

日本写真家協会会報

NO.185
(2026. Mar.)

- 焦点 「JPS アワード」の創設を前に
- 新・声のライブラリー 写真家・中谷吉隆さん
- 展望 専門家が語る写真学習プログラム「写真の魅力を分かち合う」

JPS



Photo Enomoto Toshio

ヨドバシ・ドット・コム 映像制作機材 専門ストア



プロ機材を豊富に品揃え
ぜひご利用くださいませ



<https://www.yodobashi.com/store/300201/>



新規会員募集中 日本写真家協会会員様専用の
ゴールドポイントカード

12%ポイント還元

※現金・テビットでのお支払時。一部対象外商品ございます。



専門知識豊富な販売員が親切丁寧にご案内いたします!

ヨドバシカメラ

www.yodobashi.com

<p>新宿西口本店 〒160-0023 新宿区西新宿1-11-1 ☎ 03(3346)1010</p>	<p>マルチメディア 新宿東口 〒160-0022 新宿区新宿3-2-6-7 ☎ 03(3356)1010</p>	<p>マルチメディア Akiba 〒101-0028 千代田区神田花岡町1-1 ☎ 03(5209)1010</p>	<p>マルチメディア 錦糸町 〒130-8580(駅ビルテルミナ1・2・3階) 墨田区江東橋3-14-5 ☎ 03(3632)1010</p>	<p>マルチメディア 上野 〒110-0005 台東区上野4-10-10 ☎ 03(3837)1010</p>
<p>マルチメディア 町田 〒194-0013 町田市原町田1-1-11 ☎ 042(721)1010</p>	<p>八王子店 〒192-0082 八王子市東町7-4 ☎ 042(643)1010</p>	<p>マルチメディア 吉祥寺 〒180-0004 武蔵野市吉祥寺本町1-19-1 ☎ 0422(29)1010</p>	<p>マルチメディア さいたま新都心駅前店 〒330-0843 さいたま市大宮区宮敷町4-263-6 ☎ 048(645)1010</p>	<p>マルチメディア 川崎ルポロジ 〒210-0024 川崎市川崎区日進町1-11 ☎ 044(223)1010</p>
<p>アウトレット京急川崎 〒210-0007 川崎市川崎区駅前本町21-12 ☎ 044(221)1010</p>	<p>マルチメディア 横浜 〒220-0004 横浜市西区北幸1-2-7 ☎ 045(313)1010</p>	<p>マルチメディア 京急上大岡 〒233-0002(京急百貨店1・8・9階) 横浜市港南区上大岡西1-6-1 ☎ 045(845)1010</p>	<p>マルチメディア 千葉 〒260-0028 千葉市中央区新町1001 ☎ 043(302)1010</p>	<p>マルチメディア 新潟駅前店 〒950-0901 新潟市中央区弁天1-2-6 ☎ 025(249)1010</p>
<p>マルチメディア 宇都宮 〒321-0964(トナリエ6・7・8階) 栃木県宇都宮市駅前通り1-4-6 ☎ 028(616)1010</p>	<p>マルチメディア 甲府 〒400-0031 山梨県甲府市丸の内1-3-3 ☎ 055(230)1010</p>	<p>マルチメディア 郡山 〒963-8002 福島県郡山市駅前1-16-7 ☎ 024(931)1010</p>	<p>マルチメディア 仙台 〒983-0852 宮城県仙台市宮城野区榴岡1-3-1 ☎ 022(295)1010</p>	<p>マルチメディア 札幌 〒060-0806 北海道札幌市北区北六条西5-1-22 ☎ 011(707)1010</p>
<p>マルチメディア 名古屋松坂屋店 〒460-8430(松坂屋名古屋店南館4・5階) 愛知県名古屋市中区栄3-16-1 ☎ 052(265)1010</p>	<p>マルチメディア 梅田 〒530-0011 大阪府大阪市北区大深町1-1 ☎ 06(4802)1010</p>	<p>マルチメディア 京都 〒600-8216 京都府京都市下京区東塩小路町590-2 ☎ 075(351)1010</p>	<p>マルチメディア 博多 〒812-0012 福岡県福岡市博多区博多駅中央街6-12 ☎ 092(471)1010</p>	<p>ヨドバシカメラの インターネットショッピング www.yodobashi.com</p>

YOU
ARE
A
COPYRIGHT
OWNER

写真家に知っておいていただきたい著作権のこと

あなたが写真を撮った瞬間に、写真の著作権はあなたの財産となります。

そのために何の登録も必要としません。

あなたの写真は、著作権というとても強い権利で

あなたの死後70年にわたって守られます。

しかし、著作権を譲渡する契約が交わされた写真は

その権利を失い、回復することは困難です。

写真家はでき得る限り、「写真の著作権を保持するべきである」と

私たちは考えます。

写真著作権を大切に。



一般社団法人 <https://jpca.gr.jp>

日本写真著作権協会

〒102-0082 東京都千代田区一番町25 JCIIビル403

【会員団体】

公益社団法人日本写真家協会

公益社団法人日本広告写真家協会

一般社団法人日本写真文化協会

日本肖像写真家協会

一般社団法人日本写真作家協会

全日本写真連盟

一般社団法人日本スポーツプレス協会

一般社団法人日本自然科学写真協会

日本風景写真協会

公益社団法人日本写真協会

一般社団法人日本スポーツ写真協会

■ Gallery	JPS ギャラリー 竹沢うるま、島内治彦、橋本清志、小澤太一 5 竹田武史、会沢 淳
■ First Message	いま、我々に問われる「真」・「新」・「信」 熊切大輔 11
■ Focus	「名取洋之助写真賞」20年、「笹本恒子写真賞」8年を振り返る ～「JPS アワード」の創設を前に～ 山田健太、佐伯 剛 12
■ Telescope	専門家が語る「写真学習プログラム」「写真の魅力を分かち合う」 ... 結城孝雄 18
■ Wonder Land	<新・声のライブラリー> 写真家・中谷吉隆さん 20 「いい写真からは匂いや味、香りを感ずることができる」
■ Zooming	写真の散歩道(連載 12 最終回) 鳥原 学 26 時間を超える「写真の価値」について
■ Workshop	著作権研究(連載 60 最終回) 棚井文雄 28 写真家と作品への敬意と配慮を取り戻すために
■ Award	2025年 第20回「名取洋之助写真賞」決まる 30
■ Award	2025年 第8回「笹本恒子写真賞」受賞者決定!! 西澤 丞さん 34
■ Exhibition	第8回「笹本恒子写真賞」受賞記念展「超現実世界」 35
■ Report	第7回「おやこ写真教室」開催 教育推進委員会 36 宮城県牡鹿郡女川町「女川町まちなか交流館」
■ Topics	賛助会員トピックス 38
■ Convention	第51回「日本写真家協会賞」贈呈式・第20回「名取洋之助写真賞」授賞式 第8回「笹本恒子写真賞」授賞式・2025年度会員相互祝賀会 40
■ Archives	「日本写真保存センター」調査活動報告(44) 和田直樹 44
■ Report	2025年度「フォト・ジャーナリズム論」講座報告 ... 堀 誠、小山幸佑 46
■ Books	JPS ブックレビュー／受賞おめでとうございます 48
■ Report	セミナー研究会レポート 54
■ Information	追悼＝名誉会員・本橋成一、正会員・菊地信夫、山口益路、岡 成司 56 木村 信郎、羽賀 康夫／表紙、表4写真解説／経過報告／編集後記
■ Exhibition	第20回「名取洋之助写真賞」受賞作品 写真展 59
■ Message	Message Board 60
■ Gallery	X ギャラリー 島田 聡、佐藤 均、渡辺浩徳 64 表紙・榎本敏雄、表4・池畑直樹

広告
案内

- (株)ヨドバシカメラ
- (株)リコーイメージング(株)
- (株)タムロン
- (一社)日本写真著作権協会(JPCA)
- (株)シグマ
- 富士フイルム(株)
- OM デジタルソリューションズ(株)
- キヤノンマーケティングジャパン(株)



OM SYSTEM GALLERY II

壁面長約14m 出展者随時募集中



詳細・お申込は
こちら



Boundary 中心 ————— 竹沢うるま

西アフリカのベナン共和国で撮影した一枚。砂漠の砂を含んだ春末端と呼ばれる北風が収まる季節、ベナン共和国では国教のブドゥー教の儀式が多く行われる。南部のサケテで、その儀式で現れる死者の精霊エグンゲンに遭遇した。集落ではどこからともなく、エグンゲンが現れ、村人たちを追いかけまわす。それまで踊りながらも動き回っていたエグンゲンがふと足を止め、こちらを見つめた。そのときに撮影した一枚。

写真集・写真展「Boundary 中心」





今日もひと風呂浴びにゆく ————— 島内治彦

街を歩いていると時折、心ひかれる光景に出くわすことがあります。それは誰がどう見ても何の変哲もない風景ではあるのですが、ボクから思うとすれば何となく違和感があり街に溶け込んでいるようで少しだけ、はみ出しているというか、そんな不思議な場面に遭遇するのです。そんな時、ボクの不謹慎なことは承知の上、しめしめと思ひ少しの罪悪感を覚えながらもシャッターを切る訳です。写真集ではそんな光景たちを集めています。

写真集・写真展「一撃必撮 日常はユーモアで溢れてる」





晴れ晴れ

橋本清志

広島県の北西部にある安芸太田町・中筒賀の標高およそ500メートル付近に、日本の棚田百選にも選ばれた井仁の棚田があります。稲に穂が実り始める9月頃、天日干しされた稲を横目に風情ある景色を眺めていると黙々と収穫に精を出す人影を発見。許可を得て、数時間作業風景の撮影に没頭しました。クーラーボックスには何が入っているのか想像しながら、談笑する御三方の束の間の休息を捉えた、つられて笑顔になりそうな一枚です。

写真集・写真展「陽をあゆむ」

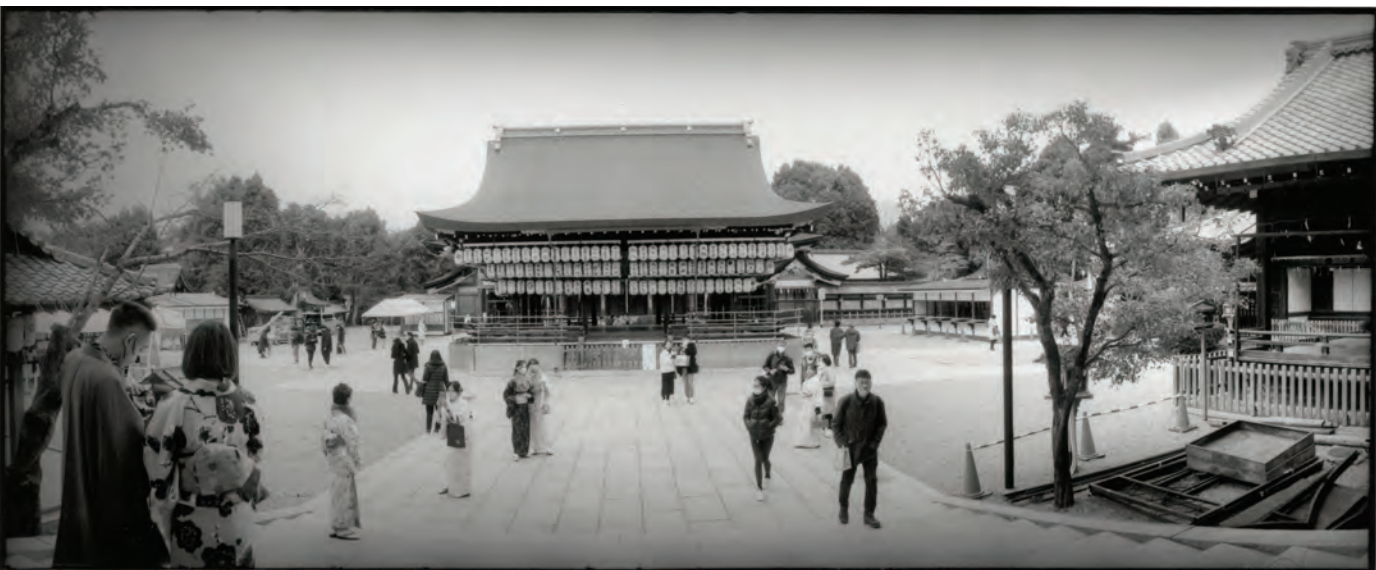




雪解け ————— 小澤太一

北海道の最果ての地・道東。コロナ禍をきっかけに、ぼくは「荒々しく何も無い」道東に魅力を感じ、東京との二拠点生活をしながら作品制作を始めた。目にはっきり見えて変化していく季節の流れ……その中で太陽より早く起き、星の軌跡を追う日々を過ごした。4月上旬、あてもなく森の中を散策していると、雪が解けたばかりの大地に雄ジカの頭骨を見つけた。この地では命が生まれ消えていく瞬間が、いつもすぐ目の前にあった。
写真集・写真展「回」





京都パノラマ百景（上：八坂神社 下：上賀茂橋上ル） — 竹田武史

少年期の記憶を辿るとパノラマの光景が浮かんで来る。3×5や6×6のような切り詰めた画角ではなく、いつも伸びやかなパノラマ=広い眺望である。今回、長年温め続けてきた「ふるさとを撮りたい」という願いを、コロナ禍に出会ったロシア製のパノラマカメラで実現することができた。どこを散策しても観光客も疎らで、一瞬の静けさを取り戻したふるさとの町「京都」は、懐かしい学生時代～少年期の記憶へと、さらには平安京遷都に始まる東洋的なものの源泉へとわたしを導いてくれたような気がしている。

写真展「地とひとⅡ」写真集『京都パノラマ百景』





桜の川面、山は遠く ————— 会沢 淳

筑波山と歩んだ三十年、私はただ光を求め、祈りに耳を澄ませながらシャッターを切っていました。朝霧に包まれる紫の稜線には、姿なき神々の息づかいがそっと宿り、その気配を写真に託してきました。「西の富士、東の筑波」と敬われてきたこの山は、古より人々の祈りを抱き続けています。自然と信仰のひそやかな息吹をまた光の奥に潜む気配を感じていただければ幸いです。

写真展「神々の光に導かれた三十年の心の旅」



いま、我々に問われる「真」・「新」・「信」

会長 熊切 大輔

先に行われた衆議院議員総選挙では、与党がかつてない規模の議席を獲得し、自民党単独で過去最多となる議席を得て、連立与党と合わせると衆議院議席数の3分の2を超える圧倒的多数を占める結果となった。この結果を生み出した大きな要因の一つとしてネットに飛び交った、一般メディアとは違う「情報」の存在があった。

インターネットはメディアには登場しないような様々な立場の人々の「思い・気持ち」を拾い上げ、情報の多様化が進んでいる。こうした表現の民主化が進む一方で、真偽不明の画像や文脈を切り取った「断片化された視覚情報」も同時にあふれだした。AIが生成する画像は一見して真実らしく見えるが、その裏にある意図や事実の裏付けを欠いている。そういった情報は根拠のない説得力を持ち、社会に不安や誤解を拡散する力にもなってしまう。写真や映像は公共的な事実認識の基盤となり得ると同時に、容易に間違った方向に導く危険な可能性をもはらんでいる。現実と照らし合わせて「真実」を見抜く力が、受け取る側にも必要になっているのだ。

写真家は、単に美しい瞬間を切り取るだけの存在ではない。被写体と誠実に向き合い、出来事の意味や背景を丁寧に掘り下げ、視覚と言葉が乖離しないよう両者を編み直す役割を担っている。だからこそ、写真家にはより強い倫理観と説明責任が求められているのだ。

こうした社会的責務は、制度面でも重要性を増している。公益社団法人としての活動基盤を規定する公益法人法の改定は、公益性の透明化と説明責任、ガバナンスの強化を求めるものであり、私たちに「社会から信頼される存在であるか」という問いを突きつけている。混乱を招くようなことが起きないように、当協会も社会通念に沿った「細則」の変更等を行い、時代と社会にあった組織づくりをしなければならない。ルールを守らないものを守らせるのではなく、ことを起こさせないような環境整備によって抑止することで、より社会貢献的な協会運営につながると考えている。

我々は単に非営利であることや文化的活動を行うことだけでなく、それらが社会にどのような価値を提供しているか、具体的に示し続けることを求められている。

このような背景の中で「JPS アワード」の誕生は、単なる顕彰制度の新設にとどまらない重要な意義を持つ。アワードは何を評価し、どのような価値を社会に提示するのかという、公益社団法人としてのスタンスそのものを表すものである。

今回「笹本恒子写真賞」および「名取洋之助写真賞」を終了し、それぞれ新賞として生まれ変わることとなる。「笹本恒子写真賞」は当初から予定した期間を終えることが理由となる。しかしスポットライトを当てるべき写真家に賞を授与する本賞の価値は年々上がっており、その目的を継続して「JPS 写真家賞」として再スタートを切ることにした。一方で「名取洋之助写真賞」は若手写真家を育成することを目標に設立された。しかし写真家が表現できる発表の場が少なくなるなか、その応募数も伸び悩んでいた。ドキュメンタリーに重きをおいた賞の狭き門をより広いジャンルに開放することとし、幅広い表現、被写体で勝負する写真家を後押しできる賞として「JPS ノンフィクション写真賞」に生まれ変わる。より強力に若手写真家を世に送り出したいと考えている。従来の写真界に貢献する企業や個人を評する「日本写真家協会賞」と併せ、3つの賞を「JPS アワード」として「新たな」スタートを図っていくつもりだ。写真界の未来へ強力に邁進する役割として「JPS アワード」がエンジンとなると考えている。

メディア混迷の時代といわれて久しい。写真というメディア自体もまた、大きな転換期にある。だからこそ私たちは問われている。何を撮るのか。なぜ撮るのか。そして、誰のために撮るのか。

写真家が社会に差し出すべきものは単なる画像ではなく、写真にある「信頼」という見えない価値なのかもしれない。

「名取洋之助写真賞」20年、「笹本恒子写真賞」8年を振り返る

～「JPS アワード」の創設を前に～

日本写真家協会は、平成 17(2005)年、社団法人設立 5 周年記念事業として、社会の動向に鋭い視線を投げかけ、情熱を燃やす新進写真家の作品を対象とした「名取洋之助写真賞」を創設した。主としてドキュメンタリー分野で活躍する 30 歳(第 9 回～ 35 歳、18 回～ 40 歳)までの写真家を対象とした。また平成 28(2016)年には、名誉会員笹本恒子さんの 102 歳を記念して、写真家の継続した写真活動を助成するために「笹本恒子写真賞」を創設した。

2026 年度より「名取洋之助写真賞」は終了し、新たに「JPS ノンフィクション写真賞」を創設する。また「笹本恒子写真賞」は名称を「JPS 写真家賞」と変更し、従来からの「日本写真家協会賞」と併せて 3 賞を「JPS アワード」と称することにした。

この 2 つの賞の審査に携われた山田健太氏と佐伯剛氏に思いを綴っていただいた。

「名取洋之助写真賞」が新しく生まれ変わることの意味

山田健太(専修大学教授、「名取洋之助写真賞」第 16～20 回選考委員)

「名取洋之助写真賞」(以下名取賞)は、2005 年の第 1 回からコロナによる中止の 1 回を挟んで 20 年の間、主としてドキュメンタリー分野で活躍している若手の作品発表の場、評価される場、若い写真家のプロの道への登竜門として大切な役割を果たしてきたと思います。この 2005 年という年は、フィルムとデジタルのカメラの出荷台数が逆転した直後で、報道の現場でもデジタルが主流になった時期です。その時に改めてドキュメンタリーにスポットを当てた賞を創設したことの意味は大変大きかったと思います。それは 10 年後にスマホ

が定着し、カメラ機能も充実し、いつでもどこでも誰でも、すぐに写真が撮れ、しかもそれを世界中にその場から発信できる時代がやってくることを予見していたかのように思うからです。

こうした本格的な SNS 時代の到来のなかで、ネットを通じて発表の場は増えたともいえますが、実際、カメラ雑誌の休刊・廃刊が続き、月刊誌や週刊誌等のグラビアページはなくなり、日常的なドキュメンタリーフォトを発表する場、活動の場は激減する事態を迎えています。それに呼応するように、名取賞の応募件数が減

■ 「名取洋之助写真賞」受賞一覧

第 1 回 (2005年)

「名取洋之助写真賞」
清水哲朗
「路上少年」(カラー)



「名取洋之助写真賞奨励賞」王 晟陽
「遠と近-上海の
下町」(モノクロ)



「名取洋之助写真賞奨励賞」伊原美代子
「海女」(モノクロ)



第 3 回 (2007年)

「名取洋之助写真賞」
今村拓馬
「Kids-existence-」
(カラー)



第 2 回 (2006年)

「名取洋之助写真賞」江原一禎
「失われゆく記憶」
(モノクロ)



「名取洋之助写真賞奨励賞」山本剛士
「被災者の心 ~新潟中越地震~」(モノクロ)



っていきます。10年目の2015年以降は減少傾向に入り、とりわけコロナ以降はその傾向が顕著です。それは名取賞の問題ではなく、ドキュメンタリーフォト、さらにいえば、ジャーナリズムあるいは写真の存在価値がいま根底から問われる状態になっているということかと思えます。

特にここ数年は、ジャーナリズムの存在自体を否定する動きも出てきました。いわば、SNS上での情報こそが真実で、新聞やテレビに代表される報道活動で伝えられる情報はフェイクだというもの。あるいは写真も加工するのが当たり前だし、いまやAIで存在しない画像をも簡単に生成できる時代になっています。しかもその真偽は、私たち専門家でも、もはや見分けることはできません。それではもはや、写真が字のごとく「真実・事実を写す」時代は終わっているということになるのでしょうか。ジャーナリズム活動はすでに過去の遺物なのでしょうか。

逆だと思えます。いま、この文章を読んでいる皆さんも、同じ気持ちを持っていらっしやると信じます。こうしたジャーナリズム活動、写真の真実性が疑われる時代だからこそ、本腰を入れて、そうした世の中の流れに抗い、改めてドキュメンタリーフォトの力を社会に知ってもらうことが求められていると思えます。それが、弱者が虐げられ、声の大きいものがますます得をするような社会、武力をはじめ力によって意に反するものを屈服させるような社会を、もう一度立て直す第一歩になるのではないのでしょうか。その中核に、職能団体・日本写真家協会があってほしいと思えます。なぜなら、こうした存在意義を体現できるのは、プロの写真家だ

けだからです。

幸いなことに、まだ日本ではどんなテーマでも自由に発表することもできます。そうした自由を最大限發揮してほしいと思います。その表現の自由の担い手がジャーナリストたる写真家です。また、事実を伝えることの重要性を、作品を通じて社会に改めて定着させること、そのプロフェッショナルとしての写真家の力が今こそ發揮されるべき時代にあるといえましょう。

名取賞をより発展継承させるものとして、新しく「JPS ノンフィクション写真賞」が生まれると聞いています。なぜ「ドキュメンタリーフォト」ではなく「ノンフィクション」なのか、どのようなノンフィクション写真が期待されるのかについては、主催者の説明に委ねるところですが、活字の世界でもノンフィクションの担い手がどんどん先細りし、選考の最終審査に残る作品の多数が、フリーではなく企業ジャーナリストが占めるという状況にあるとされます。

それからすると写真の場合、逆に組織に属さないフォトグラファーが、より積極的にドキュメンタリーフォトに取り組むような環境をどう作っていくかがドキュメンタリーフォトを活性化させる最大のテーマかもしれません。若い皆さんにとって、そうした敷居をノンフィクションと言い換えることによって下げる効果生まれ、より撮影対象やテーマも広がることで、新しい切り口のドキュメンタリー作品が増え、写真家の皆さんの活躍の場が広がることを強く願います。表現の自由と真つ当なジャーナリズムを支えるその大きな柱として、あるいはその最もわかりやすい場として、ポスト名取賞が育ってほしいと思います。

第4回 (2008年)

「名取洋之助写真賞」柳瀬元樹
「ユーゴの残影」
(モノクロ)



「名取洋之助写真賞奨励賞」三澤史明
「幸福論」(カラー)



「名取洋之助写真賞奨励賞」中井菜央
「こどものじかん」
(モノクロ)



第6回 (2010年)

「名取洋之助写真賞」トム 宮川 コールトン
「オーガニック
アメリカンズ」
(カラー)



第5回 (2009年)

「名取洋之助写真賞」久塚真央
「ゆびさきの星
つまさきの星
こころのなかの
星」(モノクロ)



名取洋之助写真賞奨励賞」中塩正樹
「奈良の祭り人 極上の刻」
(カラー)



第7回 (2011年)

「名取洋之助写真賞」林 典子
「硫酸に焼かれた
人生～ナイラと
セイダの物語」
(カラー)



「名取洋之助写真賞奨励賞」
中塩正樹
「誇り高き祭り人 刻を紡ぐ」(カラー)



「名取洋之助写真賞奨励賞」山野雄樹
「工場の少女達」
(カラー)



第11回 (2015年)

「名取洋之助写真賞」鳥飼祥恵
「amputee boy
一けんちゃん」
(カラー)



第8回 (2012年)

「名取洋之助写真賞」安田菜津紀
「HIVと共に生まれ
るーウガンダのエ
イズ孤児たちー」
(モノクロ)



「名取洋之助写真賞奨励賞」増田貴大
「終わりの気配」
(カラー)



「名取洋之助写真賞奨励賞」山本剛士
「福島原発事故～
『酪農家の記憶』
～飯館村長泥封鎖」
(モノクロ)



第12回 (2016年)

「名取洋之助写真賞」川上 真
「枝川・十畳長屋
の五郎さん」
(カラー)



第9回 (2013年)

「名取洋之助写真賞」山本剛士
「黙殺黙止～福島
の消えた歳月～」
(モノクロ)



「名取洋之助写真賞奨励賞」和田芽衣
「娘(病)とともに
生きていく」
(モノクロ)



「名取洋之助写真賞奨励賞」片山育美
「とうふ屋のおじちゃん～ a period of time～」
(モノクロ)



第13回 (2017年)

「名取洋之助写真賞」関 健作
「Limited future」
(カラー)



第10回 (2014年)

「名取洋之助写真賞」高橋智史
「屈せざる女性たち
・カンボジア
一変革の願い」
(カラー)



「名取洋之助写真賞奨励賞」楠本 涼
「もうひとつの連獅子」
(モノクロ)



第14回 (2018年)

「名取洋之助写真賞」鈴木雄介
「The Costs of War」(カー・モノク)



第18回 (2023年)

「名取洋之助写真賞」中条 望 「GENEVA CAMP-取り残されたビハール人-」(カー)



「名取洋之助写真賞奨励賞」やどかりみさお
「夜明け前」(カー)



「名取洋之助写真賞奨励賞」齊藤小弥太
「土地の記憶」(モノク)



第15回 (2019年)

「名取洋之助写真賞」和田拓海
「SHIPYARD~翼の折れた天使たち」(カー)



「名取洋之助写真賞奨励賞」小山幸佑
「私たちが正しい場所に、花は咲かない」(カー)



「名取洋之助写真賞奨励賞」藤本いきる
「おじりなりてい」(カー)



第19回 (2024年)

「名取洋之助写真賞」藤原昇平
「東京オアシス」(カー)



第16回 (2021年)

「名取洋之助写真賞」川嶋久人
「失われたウイグル」(カー)



「名取洋之助写真賞奨励賞」星野 藍
「赤き星が落ちた世界 ソビエト連邦崩壊の残響」(カー)



「名取洋之助写真賞奨励賞」喜屋武真之介
「母と、子」(モノク)



第20回 (2025年)

「名取洋之助写真賞」板谷めぐみ
「京大吉田寮~記憶と想起の結節点~」(カー)



第17回 (2022年)

「名取洋之助写真賞」※該当者なし

「名取洋之助写真賞奨励賞」鄒 楠
「燕郊物語-中国の白血病村」(モノク)



「名取洋之助写真賞奨励賞」木村 孝
「アマター「永遠の街」の肖像」(カー)



写真表現の未来と、笹本恒子写真賞

佐伯 剛(「笹本恒子写真賞」第4～8回選考委員)

長きにわたり、表現の世界はポストモダンの状況が続いています。

これは、「価値観は人それぞれであり、多様な表現があって良い」という考え方が主流である状態です。その結果、様々な形の自己表現が氾濫し、SNSなどを通じてプロとアマチュアの境界も曖昧になりました。こうした時代背景の中で、現状分析や目新しさが評価の主な対象となってきました。

さらに、近年のAI技術の飛躍的な進展により、写真加工などが驚くほど簡単に、かつ高レベルで行えるようになりました。

この状況下で、写真家の存在意義をどこに見出すのか？という問いは、真摯に写真表現に取り組む者なら誰もが深く考えざるを得ない課題となっています。

私が「笹本恒子写真賞」の選考委員として念頭に置いていたのも、まさにこの課題でした。「笹本恒子写真賞」は、個別の作品に対する賞ではなく、写真家の長年にわたる取り組みを評価する賞です。だとすれば、「この時代、写真家は何のために存在するのか？」という問いに正面から向き合い、その答えを示せるような取り組み

と成果こそを評価しなければなりません。

目新しさや、時代の特性を反映させることは、今やAIが得意とする領域です。もはや、人間が行う表現にとって、それほど重要な要素ではないでしょう。

では、AIには再現できない、人間ならではのものは一体何でしょうか。

誰もが安易に表現行為に参加できるこの便利な時代において、写真家を志す人々の哲学や眼差しの奥行き・深さが失われていくことは、写真表現そのものの衰退に直結します。そうならないためのメルクマールとなる活動こそが求められています。

具体的には、問題意識と深さと志の高さ、試行錯誤の厚み、そして決定的な瞬間(邂逅の瞬間)を待つあいだの時間に耐えるための信念です。

溢れかえる情報の中で見えにくくなっている「大切なこと」を見出し、写し出し、顕在化させること。これこそが、この時代における写真表現のミッションであるはずで

写真の力によって人々の眼差しが変わり、意識が変わり、その結果、行動も変わる。写真表現の力によって、

■「笹本恒子写真賞」受賞一覧

第1回(2017年) 宇井眞紀子

25年以上にわたって、日本の先住民アイヌの人たちの生活と文化を記録し続けたドキュメンタリー作家としての姿勢を評価して。



第3回(2019年) 吉永友愛

徳川幕府によるキリスト教徒の迫害、弾圧が260年も続いた外海(そとめ)の教徒たちは、迫害を逃れて山中に立て籠もり、信仰を守り続けてきた。その集落に住む末裔の敬虔な信徒たちの日常生活を、素朴な視線できめ細かく記録し、信仰の奥深さを丁寧に表現した力作に対して。



第2回(2018年) 足立君江

18年余にわたってカンボジアの農村地帯を訪ね、戦乱で荒廃した村々で目を輝かせながら働く子どもたちの、未来に希望を託す姿に感動してまとめた一連の写真集や写真展での優れた表現に対して。



第4回(2021年) 渋谷敦志

ジャーナリズムをベースとしたグローバルな視点と、民族紛争、飢餓、難民、環境破壊といった不条理に晒され、生存を脅かされている、弱者に寄り添った、長年にわたる真摯でアクティブな取材活動とそれらから生まれた作品に対して。



人間精神が頹廃(たいはい)に向かう流れを、少しでも食い止めること。

私が「笹本恒子写真賞」の審査員を務めた5年間に受賞された方々の作品や、表現姿勢には、ご本人が意識しているかどうかにかかわらず、一貫してこの志や信念が宿っていると感じられました。

第4回の渋谷敦志さんは、世界の様々な地域の紛争や飢餓、児童労働、災害の現場で起こる人権問題等に向き合い続けていますが、センセーショナルな表現に頼ることなく、「人間の尊厳」というテーマに真摯に向き合い続けており、その一貫した誠実さが、写真に深い説得力を宿らせています。

第5回の西野嘉憲さんは、野生、野生を相手に糧を得る人間、そして写真家。三者がそれぞれに抱く「必死さ」が画面を貫き、その緊迫感が見事な美となって結実しています。

第6回の高橋宣之さんは、仁淀川という一つの水系を、「地域性」の枠組みを超えて森羅万象の普遍性へと繋げました。ミクロの中にマクロが宿るようなその世界観は、この世界の神秘と、かけがえのなさを教えてくれます。

第7回の遠藤励さんは、グリーンランドのエスキモ

ー・イヌイットの狩猟生活に深く入り込み、彼らの尊厳と神々しい風景を記録。それらの写真は、効率を追いつめる現代社会が置き去りにしてきたものを浮かび上がらせます。

第8回の西澤丞さんは、日本のインフラや製造業、最先端科学など、社会の基盤を支える現場を20年にわたり撮影。西澤さんは、自らの写真を「立ち入り禁止」の向こう側の「超現実世界」と呼びますが、それは決して異世界ではなく、紛れもない私たちの現実の構造そのものです。だからこそ、そこには未来への希望と警鐘が写り込んでいます。

これら受賞者の表現は、無数の写真表現が巷に溢れる現代においても類似のものを見ません。スキルは、問題意識、志、信念、真相を追求するための試行錯誤に裏打ちされてこそ心に訴える表現につながり、写真家の存在意義は、そこに宿っていると私は考えます。

AIの利便性に依存し、人間の存在意義すら手放してしまう人が増えるかもしれない時代において、「笹本恒子写真賞」の受賞者たちの志と眼差しに触発され、人間の存在意義を問い直し、自らの行動に反映させる人が、少しでも増えることを願ってやみません。

第5回(2022年) 西野嘉憲

写真集『熊を撃つ』『海人・八重山の海を歩く』に結実した、伝統的な狩猟と漁撈に生きる人々を対象とする、長年にわたる真摯な取材活動と傑出し作品に対して。



第7回(2024年) 遠藤 励

グリーンランドの奥地に住む先住民を訪ね、撮影を続けるその行動力と圧倒的な表現力で撮影された写真をまとめた大型の写真集など、熱量を強く感じさせる作家活動に対して。



第6回(2023年) 高橋宣之

高知県の仁淀川水系という限定的なテーマを、数十年にわたって深く掘り下げることで、ネイチャーフォトの枠を超えて、地域文化や生きものの生態までも表現している。このハイクオリティな写真の世界が凝縮された作品群に対して。



第8回(2025年) 西澤 丞

廃炉作業中の福島第一原子力発電所やJAXA(イプシロンロケット開発と打ち上げ)、大規模地下工事現場など撮影許可がおりにくい場所でも長年撮影してきた姿勢と継続性、作品の完成度の高さに対して。



写真の魅力を分かち合う

結城孝雄(東京家政大学 児童学部教授)

2025年、小学生を対象とした「写真学習プログラム」は20周年を迎えた。20年という年月を経て、このプログラムが児童に与えたものは何だったのか、また私たち写真家は、児童たちにどんな未来を与えられたのか。美術科教育、表現と人間形成などの研究に詳しい、東京家政大学児童学部の結城孝雄教授から、第三者の視点で「写真学習プログラム」の見解を伺った。

副会長・山口規子

●はじめに

今回、日本写真家協会の写真学習プログラム外部評価を委託されました。専門は、美術科教育、欧州芸術教育制度、表現と人間形成の関係、学習者の能動性について、小学校で25年、大学で20年にわたり、理論と実践から研究を行っております。

視覚情報が日常的に格段と増加し、スマートフォンを通して画像を日々消費・活用する現代において、「写真」を主題として深く扱う学校教育の機会は、決して十分とはいえない状況にあります。

そのような中、長年にわたり学習の貴重な機会を継続的に提供されてきました日本写真家協会の取り組みに、心より敬意を表するとともに、今後さらに豊かな学習の機会へとつながることを願い、以下に所感と提言を述べさせていただきます。

●想いを分かち合うこと

今回は品川区G小学校6年生達(2クラス)66名を対象に、JPS会員の鈴木正美氏が「日常生活の日々」をテーマとして授業を実施されました。

教育実践において、学習活動の初動で大切であるとされているのが、「どうして：目的」「何を使って：手段」「どのように：方法」が、児童に分かりやすく共有されることです。これらが丁寧に伝えられることで、学習者の能動的な学びが自然に立ち上がるといわれています。

全90分という限られた時間の中で、写真の魅力、機材の取り扱い方、注意事項、そして講師としての願いや想いを入れ込む事はとても難しいのですが、鈴木氏が活動全体を通して言葉を選びながら丁寧に語られていた様子が、大変印象的でした。

その穏やかな語りかけは、教室全体に落ち着いた、安心感のある「よい」雰囲気として広がっていきました。

現職教員であっても初めて出会う児童たちと短時間で信頼関



今回は、100周年を迎える小学校での思い出を残すことをテーマに設定した授業。
講師・鈴木正美会員 撮影・土屋勝義

係を築き、活動を成立させることは容易なことではありません。児童一人ひとりのバックグラウンドを十分に把握できない中で価値観を共有していくためには、細やかな配慮が求められます。

その点において、今回の鈴木氏の語りかけは、写真の魅力を、ご自身のお仕事の一端から、また御母堂の肖像を紹介されながら、「過去に立ち戻り、力を与えてくれるもの」「その人(もの)の今を伝えるもの」として、児童一人ひとりに静かに語りかけるものでした。これに耳を傾ける児童たちのまなざしからは、その言葉を自分なりに受け止め、共感している様子が、自然と伝わってきました。

後に鈴木氏にお話を伺ったところ、児童の前でこのように語られる機会は2回目とのことであり、改めて驚かされた次第です。

●「モノ」としてのプリント作品の役割

次に、児童が撮影した作品の中から1枚を選び、大判プリントとして仕上げるという取り組みは、学習上、非常に意義深いものであると考えます。デジタル化が進み、モニター上で簡単に画像を拡大して見ることができる時代だからこそ、実体を伴う「モノ」として作品が存在することの意味は、より一層大きくなっていくように思われます。

手で触れられること、大きさを身体感覚として実感できること、そして「家の中にある作品」として存在し続けることは、作品を単なる画像データではなく、実在する表現として受け止める経験につながります。

活動の成果は、データや数値として確認することもできますが、それらは実体を伴わない、記号的な理解、解釈に留まる場合があります。一方、実際のモノは、視覚、嗅覚、触覚、聴覚(さすがに「写真」では味覚はないと思いますが……w)といった複数の感覚を伴って私たちの前に現れます。

近年のAI研究においても、複数感覚を伴う



児童たちは、カメラを手にする、すぐにお互いの笑顔の撮影を開始する。撮影・土屋勝義

体験の重要性が注目されています。機械(PC)が物を認知する際には、物を構成するカテゴリーの量が重要であり、より多様な情報を持つことで、事象を多角的に理解する、いわゆる Deep Learning (以下 DL) へと発展していきます。



自分たちで撮影するのはもちろん、人から撮ってもらうことにも興味深々。撮影・土屋勝義

多忙さを抱える学校教育の現場では、手間や時間のかかる活動を避け、成果が分かりやすい実践に重きが置かれることも少なくありません。しかし、今回の活動では、学習者が自ら興味を持ち、対象をじっくりと観察し、表現するという、「学び」の本質的なプロセスが丁寧に保障されていました。さらに、その成果をモノとして共有することで、作品だけでなく、活動の過程そのものが、児童の中に深く刻まれていくことが期待されます。

多くの感覚を伴う体験が、他の情報と結びついて理解される、DL へとつながる点においても、本学習プログラムにおける「モノ」としての作品の存在は、非常に重要な意味を持っています。そのことは、児童一人ひとりが、プリントされた作品を大切に扱っていた様子からも、十分に感じ取ることができました。

●提言を2点

最後に、今後の活動がさらに豊かなものとなることを願い、2点提言を述べさせていただきます。

一つ目は、これまでに制作された児童の作品の活用についてです。今日、美術教育の世界の潮流では、「表現と鑑賞は表裏一体」と捉えられています。言い換えれば、インプットとアウトプットが相互に関係し合う学びの構造です。「観る」ことで表現が生まれ、表現を共有することで、次の創造が促されます。

そのように考えると、同年代の児童が何をどのように表現しているのかを「観る」ことは、同じテーマに取り組む前後の学習機会として、とても重要であるように思われます。作品を前にすると、「自分だったらこうする」「こんな工夫もできそうだ」「これはすごい」といった思考が自然と引き出されます。一見、児童が安易に「模倣」「コピー」を危惧されるかもしれませんがそのようなことは全くありません、むしろ他の作品から触発されて、俄然と創作意欲を掻き立てられることがほとんどでした。前節で述べた様々な情報から自分が最適化するという「DL」が起きるのです。

その意味から、専門家の作品とともに、同年代の児童の作品を見る機会を、ぜひ取り入れていただければと考えます。著作権、肖像権への配慮を前提としつつ、一定期間、学校内の限定されたタブレット環境などで閲覧できる仕組みがあれば、授業時間外に友達同士で語り合いながら作品を観る、豊かな時間が

生まれるのではないのでしょうか。

もう一つは、肖像権、人権、著作権に関する小学生向けの冊子についてです。「写真学習プログラム」に関しては、完成度の高い冊子が配布されて、活動時間外にも振り返って、活動の内容をフィードバックすることができます。児童に向けた肖像権、人権、著作権の内容に関して、組織内での論議が存在するかと思いますが、スマートフォンを日常的に使う前から画像を持つ両義性、写真が意図せず人を傷つけてしまう可能性を持つ時代だからこそ、自分の機材を持つ以前から自分と他者を大切に尊重するための写真の在り方を考える資料があることは、非常に意義深いと感じます。

児童がひとりでも読み進めることができ、また道德の授業等でも活用できる冊子を通して、「写真」を媒介とした人権教育が実現できるのではないのでしょうか。偶然にも、かつての私の卒業論文ゼミにおいて、「写真」教育をテーマとした学生の研究の際にも、同様の要望が見られました。

いずれも費用を伴う取り組みであり、すぐに実現できるものではないことは承知しておりますが、今後の可能性としてご検討いただけましたら幸いです。

今回の「学習プログラム」を通して、私自身、温かい気持ちと共に豊かな時間を共有させていただきました。



教育推進委員会作成の撮影方法とマナーを記した冊子を使用

●プロローグ

児童たちは、写真史を詳しく知らなくとも「決定的瞬間」「植田調」「フォトモンタージュ」など、次々と立ち現れる表現の多様性を示して、率直に感心し「本当に、写真って面白いね」と実感していました。

今回の授業の参観はこのような豊かな学びの時間を通して、現場の授業が持つ力と面白さを、改めて再認識する機会ともなりました。

今後とも、本活動が日本各地の多くの児童へと広がっていくことを心より祈念し、本稿を閉じさせていただきます。末辞になりましたが、今回の活動にあたりご配慮いただきました教育推進委員会の皆さま、本当にありがとうございました。



撮影・土屋勝義

結城孝雄(ゆうき・たかお)

1955年大阪市生。兵庫教育大学連合大学院後期博士課程終了、大阪府高槻市小学校教員を経て、東京家政大学児童学部初等教育学科教授、東京家政大学大学院教授。公益社団法人日本美術教育連合監事。フレネ教育研究会代表。

子ども中心、能動的学習観を持つフレネ教育を基調に表現と人間形成の関係を制度・方法・効果測定の見点から研究を行う。

＜新・声のライブラリー＞ 中谷吉隆さん（名誉会員） 「いい写真からは匂いや味、香りを感じることができる」



JPS では、写真家本人に直接お会いして創作活動や写真論などを話していただく、声と映像による「声のライブラリー」(1970-99年)を企画し、後世に遺すことを実施してきました。そして2024年から「新・声のライブラリー」として、会報182号から掲載をスタートしました。新シリーズの第4回目は、当会の名誉会員であり、長くスポーツ写真の世界で活躍されてこられた中谷吉隆さんにお話を伺いました。

聞き手：伏見行介専務理事、小池良幸常務理事
2025年10月23日(木) 市谷の事務所にて

■ キャバの作品に心を動かされ写真の道へ

——中谷さんは1959年(創立10周年頃)と早い時期にJPSへ入会され、会員番号は94番でした。またスポーツ写真の草分け的存在として、日本スポーツプレス協会の創立にも尽力されました。また2011年にはJPSの名誉会員に推挙され、2025年には日本写真協会の功労賞を受賞されています。まさに日本の写真界とともに歩んでこられた、そんな半生をお聞きできればと思っています。

中谷 そういえばこの「声のライブラリー」で、1996年に僕も師匠の三堀家義さん(故人)をインタビューしましたよ。

——その三堀さんに弟子入りするきっかけなどもお聞きできればと思いますが、まずは生い立ちや写真を始められたきっかけなどをお話いただければ。先生は広島市のご出身ですよね？

中谷 生まれてすぐに中国の天津に渡り、租界地の小学校に通っていました。終戦の翌年に出身地である広島へ引き揚げてきたんです。父母双方の祖父母は原爆で亡くなっているという、そんな状況です。終戦の前年に帰国する話もあったけど、もし帰ったら僕もおそらく死んでいましたね。

写真を始めたきっかけですが、工業高校で電気を学んでいました。同級生の多くは普通高校に進んで広島大学を目指すんですが、うちは裕福じゃなかったんで、地元の大企業である中国電力か東洋工業(現・マツダ)

に就職しようと思っていたんです。その工業高校の2年生のとき、市内に毎日新聞の会館ができたんですが、友人からそこで「ロバート・キャバ」展があるから見に行こうと誘われました。まだキャバの名前すら知らなかったけど、モノクロームで40点くらい展示されていたかな。有名な「崩れ落ちる兵士」も展示されていましたが、とくに有名ではない人間を捉えた一点の作品に強く魅せられました。翌日もひとりで見に行って、写真ってなんだらうと思いました。

——中谷さんの年齢から計算すると、1950年代中頃のことでですね。

中谷 ロバート・キャバが『カメラ毎日』創刊記念の招待で来日するのに合わせて開催されたから、1954年ですよ。キャバは日本に滞在中にインドシナ戦争の取材依頼を受けて、予定を切り上げて現地に行つて5月に亡くなったんです。

その年の秋に大阪で、富士フィルム主催のモデル撮影会があるのを知りました。講師が岩宮武二さんと堀内初太郎さん。前日の講演会を聴きに行ったんですが、もう話がちんぷんかんぷん。でも図々しく楽屋に行つて、お話を聞きたいですといったら、岩宮さんが翌朝旅館にいらっしゃいと。朝ごはんを食べながら質問に答えてあげるからというんです。で、もう張り切って翌朝旅館を訪ねたら、仲居さんが先生方はお風呂に入つてらっしゃいますと。写真家ってみんな小原庄助さんみたいな人なのかと思いましたよ(笑)。

——朝酒はさすがになかったと思いますが、当時のこ

とですから遅くまでドンチャン騒ぎをして朝湯、ということはありそうですね。

中谷 それで風呂上がりの岩宮さんに「写真に興味を持ちました。カメラは持ってないのですが、写真の道に行くにはどうしたらよいでしょうか」と訊ねました。すると学校は東京写真短期大学（現・東京工芸大学）、日本大学芸術学部、千葉大学工学部だろうと。今だったら広島に近い大阪芸術大学に進学しただろうけど、開校する直前でした。岩宮さんは進学のほかに「写真家の助手になるという手もあるよ」と教えてくださいました。

——カメラを持っていない高校生が、どうやって撮影会に参加されたんですか？

中谷 友達のカメラを借りました。でも僕が撮るのは、指導している岩宮さんや堀内さん。モデルなんてちっとも撮りませんでした。そこから書店でカメラ雑誌を立ち読みするようになって、後の師匠である三堀さんの炭鉱の写真を見たんです。これはすごいなと。やっぱり自分も写真をやろうと。

3年生になると工業高校にも進学コースがあったので、そっちに進んで写大（東京写真短期大学、以下同）を目指しました。そして受験を目前にして、三堀さんへ便箋10枚くらいの長い手紙を送ったんです。大学に受かったら先生の助手にしてくださいとしました。広島からは夜行列車で上京するわけですが、京都で1時間くらいの停車がありました。すると駅の構内放送で呼び出されたんです。「広島の中谷さん、駅長室に電報が届いております」と。三堀さんからの電報が僕と入れ違いで家に届いて、受け取った親が慌てて郵便局で打ち返したそうです。局員さんに京都駅なら間に合うと聞いたんですね。

——今ならメールや電話で簡単に連絡できますが、そんな不自由な時代だからこそ局員さんも知恵が働いたんでしょうね。

中谷 その電報には東京に着いたら有楽町の毎日新聞社にあるサンテレフォトに来いと書いてあるんです。ただ全文カタカナで、サンテレフォトなんて固有名詞も知らないから、どこで区切るかもわからない（笑）。とりあえず毎日新聞社に行って、学生服のままエレベーターに乗ったら「君が中谷くんか」と三堀さんに声をかけられました。サンテレフォトに着くと、三堀さんは「これから学校に行きましょう」と。どこに泊まるかも決めていないのにね。

バスで中野坂上まで行くだけど、そのとき三



「広島・戦後10年」より - 原爆ドームで遊ぶ子たち - 1957年撮影

堀さんも写大のOBだということを知りました。入試は2日後でしたが、路地の突き当たりに下宿屋さんがあって、ここに広島出身の人がいるからそこに泊まって試験を受けなさいと。それから新宿に連れていってくれて、中村屋でカレーライスをご馳走になりました。中村屋にはその後何度も行っているけれど、あのときの味は忘れられないなあ。

受験が終わって結果発表までの間は日光へ遊びに行ったりして、無事合格したので三堀さんへ報告しました。そこであらためて助手にしてくださいという「わかった」と。それで昼は大学に通って、終わると有楽町へ行ってサンテレフォトで手伝いをするようになりました。

■ 大先輩に可愛がられた助手～新聞社時代

——当時のサンテレフォトといえば、そうそうたる方々がいらっしゃいましたよね。

中谷 三堀さんの他にやはり大学の先輩である田沼能さん、それから佐伯義勝さんや吉田潤さんが机を並べていました。大学が休講になるとサンテレフォトに飛んでいって、三堀さんはそれほど忙しく仕事をしていなかったの、佐伯さんが三堀さんに「借りるよ」といって僕が助手を務めることもありました。

——サンテレフォトは今でいう通信社のような会社だったのでしょうか？

中谷 会社自体は海外の通信社から届いた写真を国内に配信していました。それとは別というか、社内の一隅に三堀さんや田沼さんたちが机と椅子を並べて、暗室も借りていたんです。定着液は共用でしたが、現像液はそれぞれ好みがあるので、各人のタンクがありました。三堀さんは『アサヒカメラ』のニューフェイス診断室も担当されていて、新しいフィルムが出るとテスト撮影をしていました。僕も手伝って有楽町で撮影をしたり、さらにメーカーから送られてくる試用機を借りて学校の課題を撮っていました。

——その後卒業されて東京新聞のカメラマンになられますが、やはり報道志望だったのでしょうか。

中谷 三堀さんの写真に惹かれたのもそうですが、その前にロバート・キャパの写真展を見に行ったときは、日本に滞在するキャパの助手になれないかとも考えました。春休みや夏休みには帰省して、復興する広島の様子を撮っていました。でも学生の身分なので、発表はしていませんでした。大学を卒業する頃は木村伊兵衛さんとか、様々な写真家に触れていたの、なんとなく自分もそうなるってみたいとは思っていました。

——木村伊兵衛さんの助手などもされたのでしょうか。

中谷 いえ、三堀さんは土門拳さんの弟子なので、こちらのお手伝いをするのはなかったですね。かといっていつまでも三堀さんが面倒を見てくれるわけもなく、大学の就職担当の先生から「共同通信社を受けろ」といわれました。乗り気ではなかったんですが筆



「諸国人形芝居めぐり」より - 香川「トカラ列島 1961」より - 臥蛇島
県直島・文芸楽 - 1977年撮影にて -



1961年撮影



日劇第1回ウエスタンカーニバル
1958年撮影



ビートルズ離日 - 羽田空港にて -
1966年撮影

記試験と、三堀さんのカメラをお借りして実技試験も受けました。2時間で銀座を2カット撮って、キャビネに焼いて提出せよというものです。

その試験、50人くらい受けていたんですが、おじさんが多いんです。なかにはスピグラ（スピードグラフィック。報道用の大判カメラ）を持っているおじさんもいてね。提出後に面接があるんですが、パッと試験官の手元にある紙を見たら、僕の名前に丸が付いているんです。それで「中谷君、君は広島だね。広島の支局が空いているから」と。

でも僕は「広島から出てきて写真を1年しかやっていない人間なので、役に立たないと思います」って正直に答えて、落ちてしまうわけですよ。サンテレフォトに行ったらその話が三堀さんにも伝わっていて、「この就職難で採用するっていうのに！」と怒られました。大学からも怒られてね。

僕はそもそも朝日新聞の出版局か新潮社に行って、『週刊朝日』か『週刊新潮』をやりたかったんですよ。ページを開くと人物の写真がバンバンって載っててカッコいいじゃないですか。でもその年は空気がなくて東京新聞に行ったんです。1957年ですね。石井幸之助さんが副部長、デスクでした。誰かいないかと三堀さんや田沼さんに相談があって、僕が紹介されて囁きになったんです。

——石井幸之助さんといえば木村伊兵衛さんや土門拳さんとJPSを創立したメンバーのひとりですね。後に総理官邸写真室の初代室長にもなられました。東京新聞でもいろいろ教わりましたか？

中谷 写真部には大学の先輩も多くて可愛がってもらいました。後に自動車評論家として有名になる三本和彦さんもいてニックネームが直ぐに付き、「おい坊主！」なんて呼ばれていましたね。東京新聞はもともとは都新聞という芸能中心の夕刊紙だったんです。それが1954年に朝刊を始めて、さらに『週刊東京』という週刊誌もあって人が足りなくなり、早稲田や明治といった一般の大学からもカメラマンを採用していました。ちょうどカメラもスピグラから35ミリに変わろうという時代でした。三堀さんの助手をしていたから35ミリの現像は自信があったんです。だから先輩から次々と現像を頼まれてずっと暗室作業。現場に行つて撮影したいのに。

やっと回ってきた最初の現場は、銀座の松屋デパートで新製品の鍋を撮るというものでした。あと東京中央郵便局で新しい切手を複写するとか、そんな仕事ば

かりですよ。でも前身在夕刊紙だった関係で、映画会社が売り出し中の新人女優さんを連れてくるんです。それを日比谷公園や会社の屋上で撮影するのが楽しかったですね。

——高校生の頃は撮影会でモデルに見向きもしなかったのに、ずいぶん変わられたのですね。

中谷 いや撮影が楽しいだけで、女優さん相手は別に楽しくなかったんですよ。

——でも掲載誌を拝見していると、なかなか素敵に撮っていらっしゃいます。

中谷 やはり報道の現場に行きたかったんです。8月6日の広島を撮ったら『週刊東京』に見開きで載ったんだけど、それがあちこちで褒められてね。「胸を打つグラフィアだ」とか。すると写真部でも一目置かれるようになって、日劇のウエスタンカーニバルとか、来日したポール・アンカをスピグラで撮ったりもしたけれど、一方でルポルタージュも撮らせてもらえるようになったんです。あと入社2年目からはカラーでの撮影も始まったのも思い出深いですね。

——まだISO、当時はASAですが、感度が低かった頃ですよ。

中谷 低いね。（掲載誌のスクラップを見ながら）これなんて日中の屋外なのにシャッター速度が1/60秒だもん。この頃はJPSの軽井沢撮影会も取材してますね。

——今の時代では考えられないようなことも多かったと思いますが、印象深いエピソードはありますか？

中谷 大竹省二先生が『週刊東京』の表紙を撮っていたんですが、とにかく怖かった。先生が来社すると編集部員がそーっといなくなるんだよね（笑）。僕だけ取り残されていると「なんだ、お前しかいないのか」といわれて。東京新聞を辞めるときには「俺の助手になれ」と声を掛けてくださいました。丁重にお断りしましたが。

あと山に登ったこともないのに、谷川岳の山開きを撮ってこいとかね。女性がハイヒールで登っているんだ



キッチンと整理されている掲載誌のスクラップ



東京オリンピック開会式

1964年撮影



「ノースイドの笛が鳴る」より - 松尾雄治の激走 -

1983年撮影



南米ボリビアの日本人移民

1963年撮影

から、カメラマンが登れなくてどうするんだと。しかも誌面が7ページもあって、とにかく撮らなきゃいけないから必死で撮りましたが。週刊誌がメインだったので泊まり勤務はなかったけれど、土日もなく仕事でしたね。

——新聞社では先輩から教わることも多かったと思いますが。

中谷 当時叩き込まれたのは、自分はこう思うという写真はいらぬ。真実はわからないけれど、そこにあるもの、事実だけをきちんと撮ってこい。そこから始まって1に体力、2に体力、3、4がなくて5が体力。とにかく体力ですよ。ただ客観的な撮り方を叩き込まれるんだけど、土門拳さんや木村伊兵衛さんの写真は客観的に見えてどこかに主観がある。僕もそういう写真を撮りたいと思いました。新聞社にいと組織の中のコマでしかないから、自分の写真を撮りたいなあ、というのが食えるかわからないけどフリーになった理由でした。

■高度経済成長の真っ只中でフリーに

——1960年にフリーになられたとありますが、東京オリンピックを控えて日本が元気だった頃ですよ。

中谷 社会はそうなんですけど、自力で写真展をやらないと写真家として認められない時代だったんです。それで選んだモチーフがトカラ列島で、半年間行きました。でも展示するより先に『アサヒグラフ』などの雑誌が欲しがってね。売れて収入にはなったけれど既発表で展示ができなくなっちゃった。

——なぜトカラ列島だったのでしょうか？

中谷 中国からの引き揚げを経験したせいかもしれないけど、人間とは何か、生きるとは何かという疑問が常にある。だからキャバや三堀さんの写真に感動したんだと思います。人間は生まれるところを選べないということもモヤモヤしていて、水もない不便な離島の暮らしが気になりました。

結果としてトカラ列島は作品にまとめられなかったんですが、そんなときに新聞で「夢破れて」という見出しの小さな記事が目にとまりました。戦後、政府の移民政策で中南米へ渡った日本人たちが、まさに夢破れて帰ってきたというんです。いったい何なんだろうと気になって、南米やアメリカを7か月かけて回りま

した。1963年のことです。

——海外へ渡航するのは手続きも費用も大変だったと思いますが、どのようにして実現したかが気になります。

中谷 アメリカでは商業写真が発展していたので、その研究に行くという名目でパスポートとビザをとりました。中谷商業写真研究所という組織を作ったね。お金がないから『アサヒグラフ』や『文藝春秋』、世界文化社などから10万円ずつ原稿料を前借りしました。「帰ってこなかったら香典だ」といわれましたよ。

さらに当時は製鉄業界が元気で、鉄鉱石を盛んに輸入していました。東京新聞時代の先輩が、その輸送船の新造船があると教えてくれて、便乗させてもらいました。チリまで23日かかって運賃は2万円でしたね。

入植地に行ったら石ころだらけで、これはたしかに農作は無理だなと。その様子を撮った写真で翌1964年に富士フォトサロンで初の写真展「蒼氓60年-南米の日本人-」をやりました。会場には外務省などの政府関係者が毎日来て、「こんなのは嘘だ」というんです。「じゃあ、あんた行ったことあるのか」と聞くと、「行ったことがない」と。「写真は嘘はをつかないんだよ」と反論しましたよ。当時ブームだった週刊誌も一斉に掲載してくれて、おかげで前借りは完済できました。

——当時の写真界はどのような状況だったのでしょうか。

中谷 週刊誌や月刊誌のブームで、出版界全体がビジュアル化に傾いていきました。どこもカメラマンが必要だから、編集者たちが写真展を見て回っているんです。それでいいカメラマンに仕事を頼む。あの頃は評論家や批評家もたくさんいたけど、今はカメラ雑誌も減って少ないよね。当時と状況は違いますが。

——出版だけでなく広告も景気がよかったですよね。

中谷 僕がフリーになった頃から広告写真も増えました。日本デザインセンター*1やライトパブリシティ*2に勢いがあったね。ライトパブリシティの社長からは銀座のクラブで3日3晩うちに来てくれと説得されましたよ。でも広告写真なんてわからない。たとえば冷蔵庫を撮るっていうんだけど、別に冷蔵庫に興味はないし。給料はよかったんだけどね。篠山(紀信)君が入社するのはその直後ですね。

——もし広告に進まれたらまた違ったご活躍をされた

のかなと思いますが、当時、未来は明るいと感じられましたか？

中谷 明るかったね。銀座4丁目で石を投げたら、カメラマンの卵にあたるといわれてね。その後で的是デザイナーの卵になるんだけど、とにかくあの頃は写真論を戦わせました。1969年に富山治夫、英伸三、桑原史成、栗原達男、僕の5人でリレー連載をやろうという話になって、新宿の安い居酒屋で喧々諤々ですよ。それを『アサヒカメラ』へ1年間、モノクロ8ページの連載でやりましょう、つきましては原稿料をこれだけ……と売り込んだら、編集長から「木村伊兵衛先生にもそんなにお支払いしていません」と一蹴されて。でも「5人の目・70年への提言」としてリレー連載が実現しました。

当時の雑誌の原稿料はモノクロでページ5,000円から7,500円だったかな。JPSで原稿料の値上げ運動もやりましたね。『婦人画報』は少し安くて4,000円だったのですが、あるとき秋山庄太郎先生に「君、原稿料はいくらなんだ？」と聞かれて。正直に答えたら「一緒だ」というので驚きましたね。

——ここ市谷に事務所を構えたのもその頃でしょうか。

中谷 もう少し後ですね。自宅に暗室を作っていたんですが、50年近く前かな。ある出版社が写真部がなくて困っていて、僕に写真部の代わりにやってくれないかと。何人かのカメラマンが必要で、そうすると大人数が使える暗室もある。不動産屋さんに相談したら、この場所を紹介してくれました。といっても当時はまだ中華料理屋さんで、その奥にあった部屋です。その後1978年に今のビルに建て替えるというので、ここは違う部屋ですが、事務所兼暗室兼スタジオにしました。長友健二さんの自宅もすぐ近くにあって、富士フィルムの仕事でよく一緒に地方に行きましたね。

■スポーツ写真界、そしてJPSの活動に尽力

——ちょっと時間を戻して、1964年東京オリンピックのことをお聞かせください。中谷さんといえばスポーツ写真ですが、やはりここが転機になったのでしょうか。

中谷 東京オリンピックでは朝日新聞の遊軍カメラマンをやりました。マラソンで円谷幸吉とヒートリー、アベベを国立競技場の前で撮るんですが、アベベの走りを見て、まるで聖人みたいだと思いましたよ。そこで走るとは何か、戦うとは何かを考えていくと、人間が生きるとは何かという僕のももとのテーマに帰結したんです。それでスポーツも撮っていきましょう。

——そこから日本スポーツプレス協会（略称AJPS）を創立にいたる経緯をお教えてください。

中谷 1972年札幌オリンピックがあって、スポーツのフリーカメラマンも増えつつあった。岸本健さんが興したフォート・キシモト*3は日本体育協会の中に

事務所があって、国体などを撮っていました。一方でフリーは媒体が少ないから食うのは難しいんです。そんなわけで大学の後輩である川津（英夫）君から、スポーツ写真の協会を作りたいと相談されました。「中谷さんなら出版社に顔が利きますよね」と。それでスポーツカメラマンの認知度を高めようと1976年にAJPSを設立して、初代会長になりました。

——ご自身はラグビーを撮られていたのですよね。

中谷 出版社って冬は暇なんです。そこでサッカーやラグビーといった冬に開催する競技を撮るようになりました。AJPSの会長だから何か残さないとまずいなと思っていたら、ラグビーの新日鐵釜石が7連覇してね。ラグビーブームもあって1983年に写真集『燃えるラグビー時代』を出しました。

——AJPS創立の一方で、JPSでも活発に活動されていました。そのあたりの話をお聞かせください。

中谷 AJPSを立ち上げる少し前だけど、若手の会員たちがJPSの停滞を嘆いていたんです。そこで有志を集めて何度も話し合い、1974年に東京駅の大丸東京店で「写真家74の眼 日本人とは何か」という有料の写真展を開きました。みんなでチケットを売り歩きましたが、たくさんのお客さんが入りましたよ。それを引き継いで会員の玉田勇さんが「水」をテーマにやって、その次がJPS展になりました。

——そんな歴史がおありでしたか。

中谷 僕がJPSに入ったときは銀座の山田商会に事務所があって、理事会は小料理屋の2階でやっていました。僕も委員にはなったけれど、大先輩の写真家が顔を揃えていて、一言もしゃべれないですよ。でもその頃は社会の状況がよかった。バブルが崩壊した後も写真界がどうなっていくのか、JPSではずっと語られないままで、私はそれを訴えてきました。2000年代になってようやく社団法人になった。

我々を取り巻く環境は今猛烈に悪くなっています。とにかく媒体がない。媒体がなければ写真家が育たない。評論家や批評家もいなくなる。広告写真も優れたアートディレクターがいたから育った。そんな環境でJPSはいったいどういう方向に行くのか。コロナ以降また問われているように思います。大臣だってデジタル担当がいるのに、JPSの中にデジタル担当はいるの？

——今ようやくホームページやSNSについて、理事

会や関係する委員会で活発に話し合いが行われるようになりました。

中谷 デジタル担当の理事を置い



写真集『燃えるラグビー時代』を手に

て、生成 AI への対策もしっかりやるべきです。僕自身も表現者として心配や懸念はいっぱいありますよ。JPCA（日本写真著作権協会）や APA（日本広告写真家協会）などとも連携して、写真家の利益を守っていくべきです。

——提言はしっかりと承りました。

中谷 JPS が会員向けに何をやるのか、また外部に向けて JPS とはこうなんだというのをアピールしないと。テーマを決めて全員参加の写真展をやってほしいなあ。これだけ世界中で戦争が起きているのに、日本人は平和ボケしているから、テーマは「祈り」とか。JPS の会員はこうして写真に向き合っているんだということを知らしめるべきです。有志でもいいからやってほしい。

——中谷さんは、写真と俳句を融合した「フォトハイ句」を提唱されていますね。俳句はどのような経緯で始められたのでしょうか。

中谷 仲良くしていた『アサヒカメラ』編集長の岡井耀毅さんから電話がかかってきて、写真関係者の句会に誘われたんです。渋谷行ったら、木村恵一さんや小松健一君、カメラメーカーの人たちがいたかな。3 句出せというから提出したら、「誰だ、この季語がない俳句は」といわれてね。それから数年後にまた誘われて、それが 2001 年ですね。それからです。先生は関西の大御所だった伊丹三樹彦さんという人で、写真も嗜んでおられて写俳亭三樹彦とも名乗っておられました。そこから俳句にのめり込んで、『フォトコン』や『フォトアサヒ』の連載が続いているわけです。

——「龍子」(リュウシ) という俳号の由来は？

中谷 句会の後に居酒屋で岡井さんが箸袋に「これだ」と書いたんです。吉隆の隆から龍、あとフィルムだから粒子だろう、というわけです。写真はモノを見るということを考えて、手も使う。加えて俳句は言葉を探す。写真と違って体が動かなくなってもできるなあ。——俳句だけでなく、まだまだ写真も撮り続けていたのですが。

中谷 僕も死ぬまで現役でいたいと思っていますよ。今も写真に対するスタンスは一貫していて、「人間が生きては何か」ということなんです。僕より年上の英伸三さんは今もご自分でバライタのプリントを焼いて、先日写真展と写真集『老街茶館』にまとめられました。写真はモノクロから始まって、その階調を大事にしていったじゃないですか。そういうことを我々の年代はまだできるんだと勇気をもらいました。僕自身はフィルムカメラはもう使っていませんがね。

——いつ頃デジタルに移行されましたか？

中谷 テストは 2001 年くらいからやっていたけど、本格的には 2008 年くらいからです。カメラはニコンが主体。月に 1 度やっているレギュラーの仕事があって、そこが「もうデジタルでいいんじゃないですか？」というんでね。引き伸ばし機などは 15 年くらい前に JCII（日本カメラ財団）に寄贈しちゃいました。ネガも大切なものだけ残して、だいたい処分しましたね。

——最後に若い写真家に一言お願いいたします。

中谷 母校の写大で若手を対象にしたタルボット賞の審査をやっていますが、応募作品のほとんどが内向的で自分の主張が薄いんです。表現というのは主観的なものであり、それを写真で切り取ったり、俳句で詠むわけです。それはある程度年齢を重ねて、自分の心情が固まってこないと難しいのかもしれない。でも若さでテーマに真っ向からぶつかっていくこともできる。いい写真からは匂いや味、香りを感じることが出来ます。それこそが写真の醍醐味じゃないですか。若い写真家にはそういうものを見せて欲しいですね。

——本日はどうもありがとうございました。

(構成／出版編集委員・鹿野貴司、
撮影／出版編集委員・桃井一至)

- * 1・1959 年に設立された広告制作会社
- * 2・1951 年に日本で初めて広告制作専門の制作会社として設立
- * 3・1966 年に岸本健が設立した日本初のスポーツフォトエージェンシー

※「新・声のライブラリー」のインタビュー内容は動画でも記録しており、後日資料映像として公開する予定です。

中谷吉隆 (なかに・よしとか)

1937 年広島県生まれ。1957 年東京写真短期大学(現 東京工芸大学)写真技術科卒業。東京新聞社出版写真部を経て 1960 年フリーランスとなり現在に至る。ルポルタージュ、人物、風景、スポーツ、歴史写真などの分野で各種雑誌、カメラ誌、図書出版物、印刷物等に数多くの写真を発表。主な著書として『スナップショットへの道』『燃えるラグビー時代』『スポーツ人間像』『華麗なるスポーツレディー』『ノースイドの笛が鳴る』『神楽坂 Story』『蠢く街 新宿 What 1955～2017』『フォトハイ句読本』『フォト俳句作品集～極楽のアート』など多数。主な写真展として「道東・オホーツクと原野と湖と」「スポーツするレディに愛をこめて」「素晴らしきかなサッカー」「オルゴール色の光」「広島・戦後 10 年」「憧れの東京を写して 40 年」「トカラ列島 1961」「諸国人形芝居巡り」「フォト×俳句～極楽のアート展」「道東・1966～1975」「蠢く街 新宿 What 1955～2017」「125 年の絆・日本で活躍する中南米の日系人の今日」「ザ・レクイエム・時代を彩った男達の残像」など。また各種写真コンテスの審査や「フォト俳句」の選者を数多く務める。「カメラ芸術」新人賞受賞(1964 年度)、日本写真協会賞功労賞受賞(2025 年)を受賞。(公社)日本写真家協会名誉会員、(一社)日本スポーツプレス協会名誉会員。各種写真教室講師。俳号・龍子。(株)フォトオフィスプラスワン代表。

時間を超える「写真の価値」について

鳥原 学 (写真評論家)

Torihara Manabu

●小泉八雲の写真

昨年10月から放送が始まった、NHK連続テレビ小説「ばけげん」の評判がなかなか良いとのこと。ご存じの方も多いと思うが、明治初期に来日し、民話を収集して『怪談』などを著したラフカディオ・ハーン、小泉八雲と妻のセツをモデルにしたストーリーだ。まだ誰も外国人を見たこともなく攘夷の風さえ残っていた松江の地で、2人は怪談という共通の関心事を通じて理解を深め、そして結ばれる。近代への移行にともなう価値の混乱のなかで戸惑う、明治人の感情を細やかにまたユーモラスに描いている。

と書いてみたものの、朝はあまり時間がないこともあって、実を言えば私は熱心な視聴者とは言えない。ただ、そのオープニングの映像、松江の街を歩く二人を撮影した写真のスライドショーだけはいつも見るほど、気に入っている。その心が明るくなるような可愛さと瑞々しい表情の描写に、川島小鳥のポートレートはやはり鮮やかだ。視聴者と同じ恋愛についての感情を描き出して役に血肉を与え、ドラマへの期待を高めている。

じっさいの小泉八雲がこんな人だったら、とも思ってしまう。八雲のポートレートは何点か残っているが、どの写真を見てもその顔立ちの全容は見えない。多くが左向きの真横のもので、俯いて目を閉じていたり、あるいは左目を手で覆っていたりするものもある。15歳のとき事故でその目を失明し、その後が残った傷跡を隠そうとしたようだ。彼の仕草は心の傷の深さをはっきり示しており、人から見られることへの嫌悪も窺えるように思える。そのような写真のなかに、八



連続テレビ小説「ばけげん」より
(NHKのホームページから)

雲が紋付の羽織袴で撮った1枚がある。コンプレックスを凌駕するほどに、日本への興味と親しみが増していたのだろう。八雲の松江滞在は短く、1890(明治23)年8月から翌年10月までのおよそ1年2か月に過ぎない。その間に妻セツを娶り、日本の怪談に魅せられ、初めて和服姿でカメラの前に立ったのだ。その横



小泉八雲
(小泉八雲旧居館のホームページから)

顔から表情は読み取り難いが、ある種の羞恥と喜びが隠されているように感じる。

これを撮ったのは、森田禮造という写真師である。若い頃の森田は、松江藩で薬事に携わる人參方(にんじんかた)の役職に就いていた。16歳の時に長崎行きを命ぜられ上野彦馬の門を叩き、やがて2年の修業を終えると松江に戻り、1865(慶応元)年に山陰地方で初の写真館となる「森田写真館」を開業している。それは偶然にも八雲の失明と同じ年のことだった。

また撮影以外にも二人の関わり合いを示すエピソードがある。ある日の散歩中に、出雲の稲荷総社である城山稲荷神社に鎮座する狐の石像に魅せられた八雲が、すぐさまその撮影を森田に頼んだとの記事が、当時の「山陰新聞」に掲載されている。日本の不思議を面白がる西洋人を、森田はどう見ていたのだろう。

それは、おそらく好意的な態度だったのではないか。森田もまた不思議なことと縁のあった人だからだ。というのは松江には「今弘法」と呼ばれた、人の病気を言い当てたり悪物(つきもの)を落としたりする60代の霊能者がいて、その人物が森田とたいへん親しい付き合いをしていたようである。その体験談は、1927(昭和2)年に出版された、心霊科学研究会という団体が発行していた雑誌『心霊と人生』7月号

に掲載されている。

この神さびた街に相応しい写真師との出会いもまた、八雲の幸福であったのだと思えるのだ。そしてあの横顔の写真を見つめながら、そんな想像ができるということは、その130年後を生きている私たちの楽しみであり幸福である。

とはいえ、写真をめぐるそんな想像のあり方も、先端の映像技術の力で大きく変わり始めている。

●ディープフェイクの想像力

生成AIによる映像技術は、すさまじい勢いで進化を続けている。膨大なデータを学習することで精緻なイメージを再構成する生成AIは、統計的パターンから確率論的な正解を演算して、もっともらしい動画を生み出す。例えば、古写真を自動的にカラー化する技術が実現されたのは僅か数年前のことで、過去と現在とを隔てる距離が一気に縮まったような気がした。古写真の解釈の仕方が変わると思えた。

さらに現在ではカラー化どころか、一枚の写真をシミュレーションし、高解像度の動画を生成することが可能となっている。しかも生成精度の急速の向上によって、“不気味の谷”と呼ばれる不自然さは解消されつつあり、よりフォトリアルな描写へと近づいている。

こうしたディープフェイクと呼ばれるAI動画は、いまや動画サイトやSNSに溢れているが、なかには古写真から作られているものも多い。モノクロで不鮮明な写真が急に生氣を帯びて動き出したり、現代人の風貌に変容したりする様子は確かに面白い。歴史上の人物がどこかで見かけた人、あるいはいかにもいそうな人になるのだから。

小泉八雲とセツの写真から作られた動画も公開されていた。それは確かに新鮮であり、二人の睦まじさは幸福感を与えてくれるが、同時に大きな違和感も覚えられなかった。八雲は左目をはっきり見せ、しかも健常者のそれであったからだ。当然、動きもまたコンプレックスを持つ人の立ち居振る舞いではない。制作者にはそれなりの意図があったのかもしれないが、元の写真にあったほどの魅力は失われているように思えた。

写真の魅力のひとつに、様々な解釈が可能だという点がある。その明瞭な描写性にも関わらず推測できる余白が大きく、曖昧で自由な想像が可能なのだが、それは対象を切り取るフレームの外側への想像力に由来するものだと思う。なぜなら私たちは、被写体は短時間フレームに入れられ、シャッターが切られた後はすぐその外に出されることを知っているからだ。フレーム内でどのようなキャラクターを演じたとしても、撮影後は日常に戻らなければならない。森田のスタジオで撮られたあの八雲は、撮影後も紋付のままだったのだろうか、それとも洋服に着替えて帰宅したのだろうか。セツは彼を迎えに来たのだろうか。そんな想像も楽しいのである。

こうした読み取りや解釈には、無数のバリエーションがある。見る人の資質や文化的バックグラウンドによって違いが生じ、また経験によっても変化する。子どものときに見た家族写真を壮年期に入って見直すとき、別の思いを抱くだろう。解釈の多様性や変容を通じて人は自らの現在地を知るためにも、人は何度も同じ写真を見つめ直すのである。

●写真の無限性

このことはドイツの社会学者で映画研究者であるジークフリート・クラカウアーが指摘している。その名著『映画論』のなかで写真と映画を比較し、写真は「無限」を映画には「有限」を表現する性質を持つと述べているのである。写真はフレームの外部に広がる空間を自由に想像させるが、その写真の連続から動きを再現すると「物理的存在の連続性を確立」させる。つまり見る人の想像の余地を限定させ、代わりにより具体的な確かさを与えるのだ。生成AIによる動画もまた、映画の特性の延長線上に生まれた技術であり、その可能性をさらに拡張した。

その結果、私たちの歴史観は大きく変わりつつある。古写真に覚えていた隔絶感は解消され、代わって親近感が際限なく高められていく。

その親近感、川島小鳥の写真に覚える親密さとは異なる質のものだ。私たち視聴者は、オープニングで使われた写真があくまで演技・演出の一部であることを前提として評価する。それに対し、実際の八雲の古写真から作られたAI動画にはフィクション性が認識されづらい。

そもそもAIによる生成画像や動画は、膨大なデータベースから確率論的に生成される。だがそのデータには必然的に偏りが含まれ、それが動画の細部に投影される。ところが映像が完璧なフォトリアルさを獲得するほど、その完成度のために違和感は気づかれにくくなる。

現在のAIジェネレーターの大半は、アメリカの巨大なテック企業によって開発され、彼らが集めた映像素材を自動学習している。日本の古写真についてのシミュレーションにも、一方的に彼らの平均的な価値観が投影されていることになろう。少なくとも、それを理解したうえで、身体的なふるまいや仕草、あるいは表情の再現を見て楽しんだ方が良い。AI動画の広がりには、映像表現の可能性とともに、歴史観にも影響を与えるだろう。

だとすれば古写真を、今ある状態のままで見ることの意味はいっそう深くなる。無限を孕んだ一枚の写真に目を凝らし、往時を想像して由来を調べたりしながら、何度もそこに立ち戻る経験。それはこれからの時代に欠かせない、映像環境を生き抜くためのリテラシー能力を養うだろう。135年前に撮られた小泉八雲の横顔に、私たちは次の100年にも耐え抜くだろう写真の可能性を見出せるように思うのである。

写真家と作品への敬意と配慮を取り戻すために

棚井文雄 (写真家 / JPCA-日本写真著作権協会 常務理事)

本連載「著作権研究」の歴史を探ってみると、はじめての掲載はいまから22年前となる、2004年2月発行号であった。翌126号から連載がはじまるが、連載予告となった第0回は、「『引用』に名を借りた著作権侵害」と衝撃的なタイトルだった。その後に取り上げられたテーマをみても、日本における写真と写真家の著作権を取り巻く状況は、この20年間必ずしも良い流れではなかったことが分かる。

■「引用」に名を借りた無断利用

第0回で取り上げられた「『引用』にその名を借りた著作権侵害」は実に根深いものがある。昨年10月にも、イラストレーターとしても活動する漫画家による無断トレース、いわゆる“トレパク”疑惑が世間を賑わせたことは周知の通りだ。これは、SNSに投稿された女性の写真を本人の許諾なしにトレースして、イベントのポスター用のイラストを描いていたことに発する。

その後、この漫画家の他のイラストについても、雑誌やSNSに掲載された写真などを無断でトレースしたのではないかと“トレパク”疑惑が相次いだ。翌11月、イラスト発注会社の広報部が調査報告書を公表し、漫画家より「商業雑誌からの引用でイラスト制作を行ったとの説明がありました」と報告している。

著作権法上、“引用”とは、「公正な慣行に合致するものであり、かつ、報道、批評、研究その他の引用の目的上正当な範囲内で行われるものでなければならない」と定義されている。他人の著作物の一部を許諾なく利用できる条件として、引用部分の明確な区別、必然性、主従関係、出所の明示、改変しないなどが挙げられる。

公共機関が周知目的で公表した資料などの一部を研究の説明材料として利用することは、正当な利用の範囲内と判断し易いと思うが、可能な限り資料は自身で作成する、許諾が取れるものについては手間を惜しまないといった慎重な利用が求められる。

昨年12月30日、先述の漫画家が自身のXに今回の問題について投稿をしている。文末で、「十分な配慮ができていませんでした」とはしているものの、「トレースというのは絵を描く上での正当な段階のひとつであり、『トレース=盗用行為すなわち悪』、『トレース=すべてトレパク』という一面的なものでもありません」と自身の行為を釈明している。ここに“引用”したという表現はなかった。写真家はこれをどう受け止めているのだろうか？

一方で、近年、著作権セミナーに登壇する写真家や

写真関係者のなかにも、スライドショーなどで、他人の動画を含む著作物を著作者に無断で投映しているシーンを見かける。インパクトがある著作物を集めた、引用条件を満たしているとは思えない利用でありながらも、関係者からの指摘を受けると「引用の範囲です」と平然と答えるなど、驚かされたことがある。

JPCA-日本写真著作権協会は、“引用”への理解を深めてもらうべく活動してはいるが、写真家、写真関係者の模範となる行動も重要であることから、JPS会員ならびに賛助会員における意識改革も不可欠である。

■コンテスト主催者による「著作権（財産権）」の軽視

JPS会報131号(*1)には、JPCA-日本写真著作権協会がフォトコンテストの応募要項500件余りを調査した結果が報告されている。それは、集められた応募要項のうち「著作権が撮影者（応募者）にあると表記されているものは約20%しかなかった。しかもその内65%は使用权が主催者にあると記されている」という衝撃的な結果であった。これに対して、所在が確認できた100件余りの主催者に対して、文書による「応募要項を作成するにあたってのお願い」を送付したとも記載されている。

この調査によって、「著作権（財産権）」が軽視されている現状は明らかとなり、以降、JPCA-日本写真著作権協会は、フォトコンテストの主催者に対し、面談や書面による応募要項の改訂のお願いを継続的に行っている。しかし、残念なことに状況を完全に変えるまでには至ってはいない。その“ひとつの理由”とも言える問題については、次の「著作者人格権」の話のなかで触れることとしたい。

■変わらない状況と「著作者人格権」軽視

20年を超える「著作権研究」は、多くをJPS著作権委員や、著作権研究者らが執筆しており、そのテーマは多岐にわたる。いわゆる「肖像権」に纏わるスナップ撮影、写真のデジタル化、SNS、写真家と企業との契約書、生成AI問題などだ。なかでも特記すべきは、やはり近年、フォトコンテストや、写真家と発注者との契約書にまでも盛り込まれてきた「著作者人格権不行使」特約に警鐘を鳴らす、法学博士・斉藤博士の「『著作者人格権』の危機」(*2)であろう。

応募者にとって不利益な内容の応募要項に関する問題が完全に解決しない、その“ひとつの理由”について、斉藤氏は「『著作者人格権』の危機」のなかで以下のように記している。「著作者人格権が軽んじられ

ている状況を述べたが、(中略)名立たる企業が関係し、写真家が審査に関与している場合もあり、事の重大さを覚える」。

JPCA-日本写真著作権協会はこの状況に、やがて写真家が自らの首を絞めていくのではないかと危惧し、セミナーや『JPCA NEWS』において、フォトコンテストの応募要項における「著作権人格権不行使」特約の問題点を幾度となく取り上げると同時に、写真家への指摘も行ってきた。しかしその対策はほとんど進められないまま、近年、写真家と企業との契約書のなかにも、「著作権人格権不行使」特約が盛り込まれているとして、複数のJPS会員からの相談を受ける事態となっている。

■わが国独特の制度「職務著作」

2000年代初頭にニューヨークのギャラリーと自身の作品に関する契約書を交わすことになった私は、はじめて「著作権」というものに真剣に向き合い、その後、日本の著作権法を学ぶことになっていく。わが国の著作権法は大陸法(ヨーロッパ法)をベースにしていると聞いていたが、詳しく知るにつれて、都合よく(著作者には都合が悪く)、異なる制度が盛り込まれていたり、改正されたり、解釈されたりしてきたのだと感じるようになった。

そのひとつに「職務著作」があり、この内容に関するJPCA-日本写真著作権協会への問い合わせも少なくない。写真家が組織の社員として撮影した写真(創作物)は、勤務先である組織が著作権を持ち、「職務著作」となる。この場合、先述の「著作権人格権」も組織が有するとされる。写真家は自身で創作した著作物の権利者でないだけでなく、著作者でもないということだ。このように全ての権利を組織に奪われてしまうのは、極めて珍しい日本の特有のものだといわれる。

スポーツ写真家の水谷章人氏がインタビューで以下のように答えている。「写真家が唯一持てる権利は、その写真の著作権だけだ」「譲ったら最後、自分のものじゃないんだから。写真家としてやっていくことはできないんだと。だから私は新聞社〔で働くこと〕は勧めない(山括弧内筆者)」(『JPCA NEWS』vol.39(*3))。日本の「職務著作」について疑問を投げかけたかたただ。

■著作権は何のために誰のためにあるのか

私は、JPCA-日本写真著作権協会の運営に関わるようになった際、「著作権」とは、著作者の創作行為とその作品を守るためにあると教えられた。

しかし、先述の「職務著作」でも述べたが、わが国と他国との著作権法を比較してみると、わが国の著作権法は、第30条の4の改正に代表されるように、我々著作者の意見が汲み取られた法とは考え難く、いったい何のための誰のための著作権なのだろうかと思うことがある。

ロンドンやニューヨークで生活していたとき、日本の写真界を外から眺めてみると、実に独特のスタイルであると感じていた。特にニューヨークにおいては、

エージェンシーと契約する写真家(職業写真家)、ギャラリーと契約する写真家(写真作家)といった棲み分けと、それぞれのジャンルにおける写真家、写真関係者の活動とその意識の違いを目の当たりにした。当然、日本でいうところのそれぞれの「作品」の意味も欧米とは大きく異なる。

私の考える「作品」とは、財産的な価値よりも、人格的な品位や品性、写真家(写真作家)とその作品との関係性へと意識が及ぶ。しかし、そのような「作品」までも「コンテンツ」と呼び、財産的な価値のみでしか見ていないような日本の利用者サイドの関係者と、そのなかで改正され運用される著作権制度について、写真家(著作者)はもっと議論を深めていかなくてはならないだろう。

いま、改めて真の芸術活動を行うアーティスト、そしてクリエイターなどの創作に目を向け、弁護士や研究者のみならず、著作者を交え、著作者を中心として「著作権」を考え直すタイミングにきているのではないだろうか。

■写真家の言葉と行動が力になる

この連載は、写真に纏わる、あるいは写真家が抱える著作権に関するいくつもの問題を明らかにしてきた。これは、写真家の組織であるからこそ可能であったことだろう。執筆、編集に関わった写真家の先達、仲間たちに敬意を表すると共にこの場を借りて感謝の意を伝えたい。写真家の権利は、著作者の立場から写真家自身がしっかりと主張をしていくことが重要だ。写真家自身の言葉と行動こそが、写真家とその作品への敬意と配慮を取り戻す力になると信じているからだ。

冒頭で述べたように、日本における写真と写真家の著作権を取り巻く状況は決して良くなっているとはいえない。そのようななかで、本連載が終了してしまうことに、大きな不安を感じている。

繰り返しになるが、写真家が変わらなければ現状を大きく変えていくことは難しい。我々は、先人からのパスを受け取っていまここにいる。パスを繋いでいくために何ができるのか。JPSは写真家の著作権の擁護を目的に創立された団体だ、きっと行動を起こしてくれるにちがいない。

(*1 2006年2月発行/*2 2018年6月発行/*3 2024年4月発行)



棚井文雄(たない・ふみお)

大倉舜二に3年間師事。『家庭画報』『ひととき(新幹線グリーン車搭載誌)』の連載や、『別冊太陽』などの仕事と並行し、中国、欧州での撮影を重ね、パリ、ニューヨークで個展を開催。文化庁芸術インターナショナル研修員を経て、2005年に渡英。その後ニューヨークを拠点に10年間活動。フランス国立図書館、在ニューヨーク日本国総領事館などに作品収蔵。著書:『考える写真著作権』共著(JPCA刊2025年)/文化庁文化審議会著作権分科会委員/日本大学芸術学部非常勤講師/公益社団法人日本複製権センター代表理事副理事長

photo: Kohryu Matsuo / HJPI320610001191

2025年第20回「名取洋之助写真賞」決まる

公益社団法人日本写真家協会は、新進写真家の発掘と活動を奨励するために、主としてドキュメンタリー分野で活躍している40歳までの写真家を対象とした「名取洋之助写真賞」の第20回選考会を、過日、山田健太(専修大学教授)、清水哲朗(写真家・JPS理事)、熊切大輔(写真家・JPS会長)の3氏によって行った。応募はプロ写真家から在学中の大学生までの18名19作品。カラー15作品、モノクロ2作品、モノクロ・カラー混合2作品。1組30枚の組写真を厳正に選考し、最終協議の結果「名取洋之助写真賞」は板谷めぐみ「京大吉田寮～記憶と想起の結節点～」、「名取洋之助写真賞奨励賞」には木村孝「アマター『永遠の街』の肖像」の受賞が決定した。



選考風景 写真左から清水哲朗、熊切大輔、山田健太の各氏
撮影/企画委員：藤井智弘

○最終選考候補者

- ・宮武祐希「仮放免の日々 光はどこに」
- ・高木 嶺「KALASH 暮らしの記憶」
- ・安田園佳「小さな命と共に」
- ・木村 孝「アマター『永遠の街』の肖像」
- ・史 晨白「Red Flowers」
- ・板谷めぐみ「京大吉田寮～記憶と想起の結節点～」

■ 2025年 第20回「名取洋之助写真賞」受賞



板谷めぐみ (いたや・めぐみ)

看護師としてケニアのスラム、スリランカ、インド農村部で国際保健医療活動を行う。退職後、故福島菊次郎に師事。現在は京都大学大学院 人間・環境学研究科 文化人類学分野修士課程で「原爆の社会的集合記憶と忘却」をテーマに研究する傍ら、国内外の戦争体験者や京都大学寄宿舎「吉田寮」の撮影をしている。京都府在住。

受賞作品 「京大吉田寮～記憶と想起の結節点～」(カラー 30枚)

作品について 現存する日本最古の学生寮である京大吉田寮は、対話の精神をもとに自治で運営されてきた。1913年に設立され、太平洋戦争の記憶も色濃く残っている。作者は寮を撮影するなかで、戦死した寮生や当時戦争に加担していく京都帝国大学とその学生に思いを巡らせる。

多くの学生寮が廃寮に追い込まれるなか、吉田寮は廃寮阻止の最前線に立っている。日本社会にとって知の共有財産である大学が、経済や軍事に従属するような道筋をたどっているように思える今の姿に、第二次世界大戦時の大学と寮の歴史を想起させる。「吉田寮」とそこに住む寮生たちの生活を通して大学の在り方を問う。

受賞者のことば

受賞を聞き、今は亡き戦争体験者の方々、過去の吉田寮生、そして今を生きる寮生たちに思いを馳せました。吉田寮は裁判関係で報道をされがちですが、その前提として寮生たちの日常があり、学問や研究をしています。その小さな連続が強い力となり社会の違和感を察知できるのだと思います。戦争が続く社会で、身近にも戦争の芽があります。それを見逃さず引き続き撮影をしていき、また寮生の戦力になることができれば幸いです。

■ 2025年 第20回「名取洋之助写真賞奨励賞」受賞



木村 孝 (きむら・こう)

日本大学文学部および日本写真芸術専門学校卒業。株式会社角川グループパブリッシング写真室およびスターツ出版株式会社スタジオレイファクトリー勤務後、フリーランスとして独立。2020年より gallery176メンバー。第2回 PITCH GRANT グラント受賞。

【主な個展】2020年 ライフ・コレクション・イン・ニュータウン / 銀座ニコンサロン(東京)大阪ニコンサロン(大阪)、2022年 泳ぐセミ / gallery 176(大阪)、2024年 Amata / Kathmandu Photo Gallery(タイ・バンコク)

受賞作品 「アマター『永遠の街』の肖像」(カラー 30枚)

作品について 「アマタナコーン(永遠の街)」と呼ばれるタイの新興工業団地と隣接するニュータウンは、かつて野原だったが、いまでは七百以上の企業の工場やオフィスが立ち並び、都市へと変貌している。この街の特質に興味を持った作者は、ランドスケープから撮影をはじめ、2017年からは街の人々を彼らのプライベートルームで撮影している。出稼ぎ労働者や周辺エリアの戸建て住宅に住む家族やその子ども、コロナ後に存在が目立つようになったカンボジアやミャンマーなどの外国人労働者。様々な背景を持つ彼らの姿とパーソナルな空間を通してこの街の「らしさ」、さらには現代アジアの「いま」そのものを表した作品。

受賞者のことば

この度は「名取洋之助写真賞奨励賞」をいただき大変光栄です。タイの新興工業団地とその街に惹かれ、2014年からランドスケープを、2017年から人々とそのプライベートルーム、そして現在はこの街にまつわる人々のマイナーヒストリーに目を向けた作品に取り組んでいます。2023年からはバンコクに拠点を移しました。ここに生きる人々や、移りゆく「大きな歴史」、それらとの関係性のなかで続けていきたいと思っています。

2025年 第20回「名取洋之助写真賞」総評

熊切 大輔(写真家・公益社団法人日本写真家協会 会長)

応募作品数は決して多いとはいえないが、内容の濃い、そして個性豊かな作品が集まった。最終的な候補に残る作品は制作物としての完成度も高く「魅せる」ことに関して内容はもちろん、仕上げも含めてレベルの高いものであった。選から漏れたものの、なかには内容は良いが写真作品としての追い込み不足も多く、総合的な技術力のさらなる向上を期待したいところだ。



そうしたなかで「名取洋之助写真賞」に選ばれた作品は、板谷めぐみさんの「京大吉田寮～記憶と想起の結節点～」であった。創立から112年が経つ京大吉田寮は、生活の場であるとともに学生の諸活動の場所として象徴的な場所であり様々な時代の歴史が積み重なっている。そのなかに撮影者自身が飛び込み現代を生きる学生たちの「今」を生々しく、そしてその重厚な歴史とのギャップを見事に写し出した作品になった。

「名取洋之助写真賞奨励賞」は木村孝さんの「アマター『永遠の街』の肖像」。タイの新興工業団地に隣接するニュータウンに住む世代や性別を超えた様々な人々の生活は、どこか無気力さを感じるような現代人の姿が淡々とした距離感で集められている。コレクション的な目線でそれらの人々を撮り集めるのは、根気強い撮影活動の賜物ではないだろうか。

表現や感覚が全く違う2作品の受賞はある意味、新たなドキュメンタリー写真のあり方を考えさせられることとなった。いずれにせよ被写体にじっくりと向き合った力作が受賞したことは、未来への希望となった。

清水 哲朗(写真家・公益社団法人日本写真家協会 理事)

30枚組の本賞は「取材力・写真力・構成力」の差が結果に表れると前回の講評に書いた。テーマに対する答えを持っていない人や取材の浅い人ほどイメージの乏しさや被写体被り、ダラダラとした展開になり、半分以下の作品数でもその内容は描けると感じた。また、マラソンの「30kmの壁」同様、後半失速する人も見受けられた。途中までは良い流れだけに今後の取材と構成次



節では傑作になる可能性を秘めている。焦らずあきらめずテーマを完結させてほしい。「名取洋之助写真賞」の板谷めぐみさん「京大吉田寮～記憶と想起の結節点～」は疾走感があり、文章を読まなくても伝わる写真力と最後まで飽きさせない構成力、被写体との関係の築きかたが他作品とは一線を画していた。背景にある「明渡請求訴訟」も作品に深みを与えているが、時に空気になったりカメラを意識させたり写真家の視点も織り交ぜたりすることで内容に引き込む力があつた。大学と寮生との和解が成立した日に本賞審査が行われ、選ばれたのは何かの運命だろうか。「名取洋之助写真賞奨励賞」の木村孝さん「アマター『永遠の街』の肖像」は徹底して人と部屋を撮影することで人物像を表現。作品意図とキャプションを読むことでミニマムな暮らしの先にある夢や目標を感じさせる秀作だ。扇風機の有無が作品の印象に少なからず影響を与えているのも面白い。

山田 健太(専修大学教授)

「いま」という時代の切り取り方には、分断や希望といった抽象的なテーマを具現化するもの、戦争や貧困といった目の前にまさに起こっている事象や問題を追うもの、あるいは信仰とか正義といった自身の内心や問題意識を表面化させたものがある。ほかに、消えゆく文化などをきちんと記録すること自体を目的とするものもあるかもしれない。そうした目で見えた場合、「名取洋之助写真賞」の「京大吉田寮～記憶と想起の結節点～」は仲間意識という内面と大学管理化という外面をうまく織り込みながら、組写真のなかで物語性をも作り出していて説得力がある作品に仕上がった。一方で「名取洋之助写真賞奨励賞」は、1枚1枚の写真の裏側にあるであろうその人ごとの物語を想像させるに十分で、写真が語るという表現がピッタリだ。今回の受賞者はいずれも中堅に位置する年齢であつて、より若い世代に「報道写真＝ドキュメンタリーフォト」に魅力を感じトライしてほしいと思う。写真は時代の写し鏡であるとともに、自身を映し出すものでもある。ということは、社会的関心や多様な価値観への想像力がなければ、写真は薄っぺらいものになってしまうだろう。付加価値を上げるためにはテクニックが不可欠だ。しかし撮影技術よりも大切なものがあることも知ってほしい。



「名取洋之助写真賞」について

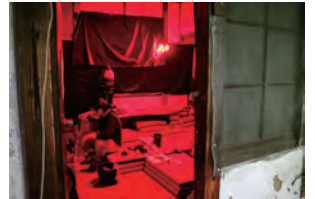
公益社団法人日本写真家協会（JPS）は、社会に貢献する事業として「JPS展」や「日本写真家協会賞」「笹本恒子写真賞」の表彰並びに顕彰を行っています。新進写真家の発掘と活動を奨励するために2005年に「名取洋之助写真賞」を創設しました。

名取氏は、1950年のJPS創立初期から写真企画展への助言、更に写真著作権の重要性を進言されるなど、様々な面で協力をいただきました。没後、名取洋之助が関わった日本工房、サンニュース、岩波写真文庫の創設に関してわが国のフォトジャーナリズムの発展に大きく貢献されたことを顕彰し、40歳までの写真家を対象に公募しています。

●名取洋之助（1910～62年） ドイツに留学していた名取洋之助は23歳の若さで、1930年代ヨーロッパで勃興していたフォト・ルポルタージュをわが国に導入し、木村伊兵衛と33年「日本工房」を興す。その後、土門拳、藤本四八、亀倉雄策らと『NIPPON』を創刊し、フォト・ジャーナリズムを確立する。戦後は47年に『週刊サン・ニュース』を創刊。50年に『岩波写真文庫』を創るなど、写真家であると同時にすぐれた企画、編集者でもありました。

■ 2025年第20回「名取洋之助写真賞」

板谷めぐみ 「京大吉田寮～記憶と想起の結節点～」 (カラー 30 枚)



■ 2025年第20回「名取洋之助写真賞奨励賞」

木村 孝 「アマター『永遠の街』の肖像」 (カラー 30 枚)





2025年第8回受賞者決定!!

西澤 丞さん

新たな価値観を提示するのが写真家の使命だと思っていた

わが国初の女性報道写真家として活躍された笹本恒子(1914年生)名誉会員の多年にわたる業績を記念して、実績ある写真家の活動を支援する「笹本恒子写真賞」を平成28(2016)年に創設。今回の選考委員は佐伯剛(『風の旅人』編集者)、野町和嘉(写真家)、熊切大輔(JPS会長)。

第8回の受賞者は西澤丞さんに決まった。授賞式は2025年12月10日(水)、アルカディア市ヶ谷で行い、受賞記念写真展「超現実世界」を12月18日(木)～24日(水)、アイデムフォトギャラリー「シリウス」で催す。

【受賞理由】

廃炉作業中の福島第一原子力発電所やJAXA(イプシロンロケット開発と打ち上げ)、大規模地下工事現場など撮影許可がおりにくい場所で長年撮影してきた姿勢と継続性、作品の完成度の高さに対して。



撮影:西澤春美

【受賞の言葉】

誰もやったことのないことをやってみたい。出来ることなら誰も撮っていないものを撮ってみたい。一般の人が立ち入ることのできない場所に行き、まだ見ぬものを撮影するとともに、新たな価値観を提示するのが写真家の使命だと思っていたからだ。ただ、自ら求めたことなのに、道なき道とは、こんなにも大変だったとは……。今回の受賞は、一筋の光明であり、今までの活動が間違っていなかったと背中を押していただいたような気持ちだ。推薦して下さった方、選んで下さった方。そして、私の活動を応援し、関わって下さった全ての方々に、感謝の気持ちで一杯だ。ありがとう!



撮影協力: 首都高速道路株式会社



撮影協力: 宇宙航空研究開発機構(JAXA)



撮影協力: 株式会社 JERA



撮影協力: ジャパン マリンユナイテッド株式会社

西澤 丞(にしざわ・じょう)

「見えない仕事を、可視化する。」というコンセプトのもと、大企業から職人さんまで、一般の人が立ち入ることのできない現場を撮影中。コロナ以降は文章にも力を入れ、よりわかりやすい形での発表を行っている。自動車メーカーデザイン室、撮影プロダクション勤務を経て2000年よりフリー。愛知県出身、群馬県在住。主な著書物: 『DEMIURGOS』キヤノンマーケティングジャパン、『福島第一 廃炉の記録』みすず書房、『MEGA-SHIP』太田出版、『鋼鉄地帯』太田出版、『イプシロン・ザ・ロケット』オライリー・ジャパン(共著)、『Build the Future』太田出版、『背景ビジュアル資料3』グラフィック社、『首都高山手トンネル』求龍堂、『Deep Inside』求龍堂。

第8回「笹本恒子写真賞」選評

佐伯 剛

このたび「笹本恒子写真賞」を受賞した西澤丞さんは、二十年来にわたり、この国のインフラ、工業、エネルギー、最先端科学など、私たちの暮らしを支える重要な分野を撮り続けてきた。なかでも、福島原発の廃炉作業を記録した写真は、私たちが直視をためらうほどの現実——とんでもない現実を、圧倒的な迫力で否応なく突きつけてくる。西澤さんは、自らの写真を「立ち入り禁止」の向こう側の「超現実世界」と呼ぶ。その巨大なスケールの世界は、時に美しく、時に危うい。しかしそれは決して異世界ではなく、紛れもない私たちの現実である。いま、バーチャルと現実の境界が曖昧になり、社会の表層をなぞるだけの写真がプロとアマチュアのあいだに氾濫している。だが、浮世の現象を追いかけるだけでは未来を手繰り寄せることはできない。未来は、見えやすい出来事の表層ではなく、むしろ不可視の「時代の構造」の奥に潜んでいる。そこに迫る表現でなければ、未来を洞察するための扉とはならないのだ。西澤さんの写真が、現実を伝えるだけでなく、未来の可能性と危うさを暗示する力を持つのは、彼の写真を通して、私たちの時代の構造が垣間見えるからにほかならない。

選評

西澤丞さんの仕事と向き合うきっかけは、2024年12月から翌年にかけてキヤノンギャラリーSで開催された写真展「超現実世界」。先端科学や大規模な工事現場、製鉄の工程など滅多に眼にすることのない現場に肉薄した大型パネル作品の展示だった。一般的に美とは距離のあるはずの現場を見事に撮りきり圧倒的な存在感で提示できている眼力の確かさに先ず脱帽した。またキャプションも的確であり、被写体に対する見識の深さが窺える。二十年以上を費やして、先端科学を下支えする、一見無機質なインフラ世界と一途に向き合ってきた写真家の、信念と執念に脱帽させられる気持ちだった。撮影現場の大半は安全上や企業秘密のために厳重に封印されている施設ばかりだ。関係当局との粘り強い交渉を重ねたあげくに、幾重もの関門を通過し、自分だけが立ち得た撮影現場の空気感を確かな視点で捉えている。HPを一覧すると、テーマは、核融合、ロケット、造船所など広範囲に及んでいるが、無機質な被写体を美に昇華する独特の感性を備えていることを納得させられた。長く取り組んできて写真集にもまとめている、福島原発の廃炉作業であるが、さらに困難を極めるであろう終わりにき廃炉工程を、独自の美意識と感性で深掘りされていくことを大いに期待している。

野町 和嘉

第8回「笹本恒子写真賞」受賞記念展

西澤 丞 写真展「超現実世界」

2025年12月18日(木)～24日(水)
アイデムフォトギャラリー「シリウス」

第8回「笹本恒子写真賞」受賞の記念写真展「超現実世界」の会場で、作品に対する想いや撮影の苦労話、今後の活動予定などについて語ってもらった。

—受賞の知らせを受け取ったときはどのように感じましたか？

長く続いてきた「笹本恒子写真賞」をいただけたということで、ある程度僕の考えていることや想いが、写真を通じて伝わり始めたんじゃないのかなということを実感しました。

—「見えない仕事を可視化する」というテーマで撮り続けてどれくらいになりますか？

撮り始めたのが2005年頃なので、ちょうど20年くらいになります。まだまだ全然撮り足りないです。

—撮影はどの程度まで達成できているのでしょうか？

どこがゴールなのかというのを特に決めてはいないので、今の段階では達成度も何もありません。いろいろものを引き続き撮っていきたくて考えています。

—取材でご苦労されている点はどんなことですか？

撮影の前段階の準備というか、許可取りが一番大変です。許可さえ取れてしまえば、ご覧になってわかるように特に照明も使ってないですし、撮影自体はそんなに難しいことをしてるわけではないので。重要なのは交渉ですよ。人脈のないところにメールなり電話なりをする。そこから一つひとつ積み上げていく感じ。ずっと同じものを撮っているのであれば、次の撮影はしやすくなるんですが、僕の場合は撮影の度に違うので個々に全部アプローチしていかなくちゃいけない。毎回、全部イチからのスタートです。

—普段見れないところに入り込むというのはかなり大変そうな作業ですね？

そうですね。中には取材を受け入れたことがないところもいっぱいあるんです。そうすると取材の依頼を受けた時点で、たぶん中では結構ガチャガチ

ちゃっているんだと思います。実際に撮影できるのは全体のごく一部でしかないんですけど、例えば「うちの安全基準ってどうだったっけ」とか「機密ってなんだったっけ」みたいなところから考えないといけなくなるわけです。受け入れる側としては、どこに線を引くのかを決めなきゃいけない。それが彼らにとっては一番大変な作業になるんじゃないかなと思います。

—撮影するまでが大変なんですね。

仕事で取材する分には特に問題はないんですけど、こちらからお願いして撮影させていただくとすると、個人が大企業に協力を取り付けることになるので、ものすごく大変です。取材先の相手にとっては、どんなメリットがあるのかっていうことにもなるわけですね。あらゆることを全部納得していただいた上で協力してもらわなければいけないですから。

—許可がおりないことも多いのでしょうか？

テレビとか新聞であれば、簡単に許可が出ると思うんですけど、あくまで一個人として申し込んでいるので、それなりにハードルは高いです。

—発表する際にもご苦労されている点はありますか？

以前は商業出版の写真集にまとめていたんですが、最近は商業出版の写真集の企画がほとんど通らなくなってしまいました。今は自分が運営しているウェブサイト (<https://workers-in-japan.com/>) で発表しています。ですから、企画書を書く際に「このウェブサイトの記事として掲載したいので」というかたちで掲載の許可も取るようにしています。

—今後撮ってみたいモノやテーマは？

これまでエネルギーとか資源といったことを取り上げてきた流れから、やはり「防衛」もテーマとして外せないんじゃないかなと思っています。英語ができないので海外の施設を取材するような予定は特にありませんが(笑)。防衛をテーマにした撮影は、まだ取り掛かり始めたばかりなので、そこはもうちょっとちゃんと撮りたいと考えています。

—ありがとうございました。

(記・撮影／出版編集委員：柴田 誠)



西澤丞写真展「超現実世界」の会場にて

【笹本恒子写真賞】

わが国初の女性報道写真家として活躍された笹本恒子氏の多年にわたる業績を記念して、実績のある写真家の活動を支援する目的で平成28年に創設された。「笹本恒子写真賞」は今回をもって締めくくられ、その理念は新たな賞である「JPS 写真家賞」に引き継がれる。

第7回「おやこ写真教室」開催

2025年9月28日 宮城県牡鹿郡女川町「女川町まちなか交流館」

教育推進委員会

2020年度から始まった「おやこ写真教室」も今回で第7回目を迎えた。第7回目は昨年度の福島県双葉郡浪江町開催のおやこ写真教室につづき、2025年度は、東日本大震災の被災地の宮城県牡鹿郡女川町での開催となった。

この地域での開催に至るきっかけは、公益財団法人上廣倫理財団の問い合わせから始まった。上廣倫理財団は1987年文部省社会教育局（当時）の許可を得て設立され、主に学術研究の助成と交流支援や学校教育の振興、社会文化活動を促進する支援及び助成事業を行っている財団である。そこから被災地である地域で子どもたち向けの写真文化活動をできないかという相談が教育推進委員会との間で行われ、委員で話し合い、おやこ写真教室を開催するに至った。そうした経緯で、上廣倫理財団からの助成金をもとに、後援に女川町教育委員会、上廣倫理財団、OM デジタルソリューションズ（株）、Nextorage（株）の協力で実施した。参加者は宮城県内から集まった親子7組16名。

参加者の親子には、OM デジタルソリューションズのカメラ（子供用カメラは、Tough TG シリーズ、大人用カメラは、OM-D E-M10）を使用していただき、記録メディアは Nextorage 株式会社の協力により提供された。

当日は、宮城県在住の大沼英樹会員を講師に迎え、カメラの持ち方や操作方法、構図や光の取り込み方など基本的な知識を座学で学んだ。

更に、様々な作例を用いて撮影手法を紹介し、貸し出しするカメラの特性についても解説した。

実践的な撮影実習は、マッシュパーク女川へ移動して実施。自然の中で遊具や被写体を探索しながら写真撮影をし、特にトンボを顕微鏡モードで接近して撮影するなど、カメラの特性を活かす工夫も見られた。



撮影実習で遊具を利用して撮影する様子 撮影・今井しのぶ

その後の講評会では、それぞれが撮影した写真の中から選んだ作品を大型スクリーンに映し出し、大沼講師が一つひとつの作品について楽しく丁寧に講評を行った。プロの写真家による講評に、参加者たちは真剣な表情で耳を傾けていた。

また、プリンターから出てきた写真を興味深そうに見つめる子どもたちや、完成したプリントを笑顔で見せ合いながら楽しそうに談笑する様子も印象的だった。更に、OM デジタルソリューションズの香嶋氏にもご参加いただき、使用したカメラについて詳しく解説していただいた。

講評の終わりには、質問タイムが設けられ、「写真家になった理由」や「リアリズム・非リアリズムの撮影について」、「鉄道写真は撮影しますか？」など、様々な質問が出され、それらの質問に大沼講師は丁寧に答え、参



プリンターから出てきた写真を興味深そうに撮影する子どもたち 撮影・今井しのぶ



撮影講座を真剣に聴く参加者 撮影・今井しのぶ



ベストショットのプリントと親子の記念写真プリントを受け取る参加者たち
撮影・今井しのぶ



今回の講師・大沼英樹会員
撮影・今井しのぶ

加者は大変満足した様子だった。

最後にそれぞれが選んだ「この日のベストショット」や親子の記念写真のプリントを受け取り、写真の楽しさや奥深さを共有しました。快晴の中、参加者やスタッフ全員が怪我や事故もなく安全にイベントを終えることができ、素晴らしい思い出となった。

この活動を通じて、親子の絆やものを見る力を育むことの大切さを実感できる、非常に有意義な一日となった。

後援：女川町教育委員会

協力：(公財)上廣倫理財団、OM デジタルソリューションズ(株)、Nextorage(株)

※「おやこ写真教室」の様子は、動画でも記録して、日本写真家協会公式 YouTube チャンネルで公開しています。



マッシュパーク女川にて参加者集合写真
撮影・土屋勝義

「おやこ写真教室」開催レポート

https://www.jps.gr.jp/oyako-photoevent7_report/

(記／教育推進委員会委員・中村恵美)

【第7回「おやこ写真教室」に参加した親子の作品】



ソニーマーケティング

ベーシックモデルの基準を刷新する、フルサイズミラーレス一眼カメラ『α7V』新登場

『α7V』は、従来比約4.5倍の高速読み出しを実現する、新開発有効約3300万画素のフルサイズ部分積層型Exmor RS[®] CMOSイメージセンサーを搭載しています。加えて、最新のα13シリーズのAIプロセッシングユニットの性能を画像処理エンジン内に統合したBIONZ XR2[®]を新たに搭載。これらに

より、AIによる人物の瞳認識性能が従来比約30%向上したほか、ブラックアウトフリーでのAF/AE追従の最高約30コマ/秒の連続撮影を実現し、プロフェッショナルのニーズに応えます。

ソニーでは、プロフォトグラファー・ビデオグラファーの皆さまに会員制のサービス「ソニー・イメージング・プロ・

サポート」を提供しています。銀座など全国5拠点に窓口を設け、機材購入や修理・清掃・点検など、会員さまの撮影活動をサポートいたします。

ソニーのカメラ機材のご試用・ご購入など担当まで遠慮なくご相談ください。ソニー・イメージング・プロ・サポートへのご入会も随時受付しております。



【問い合わせ先】

ソニーマーケティング（株）
ソニー・イメージング・プロ・サポート担当：下村智文 Tel:080-1052-4624
連絡先:Toshifumi.Shimomura@sony.com
<https://www.sony.jp/imaging-pro/>

ヴィデングラム

ヴィデングラム、社名変更とグループ統合のお知らせ

ヴィデングラムメディアソリューションズ(株)は、2025年11月に社名を新たに、2026年1月よりグループ会社である「ヴィデングラムプロダクションソリューションズ(株)」と統合いたしました。今回の統合は、写真家やクリエイター向けの撮影機材および用品と、放送局やプロダクション向けの業務用機材、それぞれの強みを融合し、より包

括的な価値をお客様に提供することを目的としています。

また、2025年に発売したハイブリッド三脚「Manfrotto ONE」は、フォトとビデオ両方の撮影に必要な要件を兼ね備えた革新的な製品として大変ご好評をいただいております。今後も、写真・映像業界の発展に貢献すべく、

幅広いソリューションを展開してまいります。

【問い合わせ先】

ヴィデングラム株式会社
TEL:03-5404-6871
infojp@videndum.com
<https://www.manfrotto.com/jp-ja/>



シグマ

表現を広げ、制約を超えるオールラウンダー 世界初※1、超広角20mmスタートの10倍ズーム

Sigma 20-200mm F3.5-6.3 DG | Contemporary は、世界で初めて広角端20mmと10倍ズームの両立を実現したフルサイズ用高倍率ズームレンズです。

この1本で、超広角20mmから望遠200mmまでをカバーするので、広い画角で収める壮大な風景写真から、被写体との距離にとらわれないアクティブなス

ポーツ撮影、さらには最大撮影倍率1:2を活かしたクローズアップまで、多彩なシーンに柔軟に対応。幅広い表現力が、旅行や日常のスナップで威力を発揮します。

徹底した小型・軽量設計、そしてリニアモーターHLAによる高速・高精度AFにより、常に快適な撮影体験を提供。すべての撮影者に、これまでにない自由



と創造性をもたらす、究極のオールインワンズームレンズです。

(※1 2025年9月時点、Sigma調べ。)
Sigma 20-200mm F3.5-6.3 DG | Contemporary
価格：オープンプライス
https://www.sigma-global.com/jp/lenses/c025_20_200_35_63/

【問い合わせ先】

株式会社シグマ 担当：桑山輝明
TEL：044-989-7436 メールアドレス：spsinfo@sigma-photo.co.jp
<https://www.sigma-global.com/>

ライカカメラジャパン

ライカMシステムにおける新たなマイルストーン「ライカM EV1」登場

光学レンジファインダー搭載のM型ライカに加え、初めて電子ビューファインダー(EVF)を内蔵した「ライカM EV1」が発売されました。このカメラは、EVFの利点とMシステムの伝統的価値を融合させたモデルです。Mシステムへのエントリーをより容易にするだけでなく、視力に左右されず、より信頼性の高い快適なピント合わせを可能にします。

特に明るく、被写界深度が浅いレンズを使用する際や、超広角・望遠・マクロレンズで構図を決める際にその真価を発揮します。解像度、576万ドットの高解像EVFは、きわめて鮮明で自然な色再現によりクリアな画質を実現します。撮影データはフレーム外に表示され、常に構図全体を見渡すことができます。このモデ



ルには、フォーカスアシスト機能が搭載されていますので、フォーカスピーキングにより、現在の焦点面をカラーオーバーレイで表示し、リアルタイムでピントを合わせるができますし、2段階の拡大表示でマニュアルフォーカスをより容易に行えます。また、トリプルレゾリューション技術を搭載していますので、6000万、3600万、1800万画素から選択し記録できます。さらにライカコンテンツクレデンシャル機能にも対応しています。

【問い合わせ先】

ライカカスタマーケア0570-055-844 (ナビダイヤル) または、各ライカストアへ

浅沼商会

「CHI・耐久性に優れ、ワンタッチで取り外し可能なカメラストラップ」

CHI Levo シリーズは撮影時にすばやくカメラを構えられるように設計されたストラップです。クイックアジャスターを片手で操作してスムーズに長さを調整可能で、独自のマグドット・アタッチメントシステムによりワンタッチで機材を着脱することができます。19mm 幅の AIR シリーズ (3 種) とシヨルダ 一部 32/45mm 幅の PRO/

ULTRA の合計 5 種類をラインナップ。また、19mm 幅のハンドストラップ (3 種) もご用意しました。

また Levo PRO/ULTRA に対応した首に荷重負荷を掛けないバックパッ



クアタッチメントや三脚穴を使用してストラップを取り付けるフレックスストラップマウントなどストラップアクセサリーが充実していることも最大の特徴となっています。

【問い合わせ先】

株式会社浅沼商会イメージング事業部

商品部 山岡・梶本

E-Mail: info@asanuma1871.jp

URL: <https://www.asanumashoukai.co.jp/c/chi>

キヤノンマーケティング ジャパン

EOS R6 Mark III

— 幅広い現場で信頼に応える一台

EOS R6 Mark III は、静止画・動画の両方で高いパフォーマンスを発揮するフルサイズミラーレスカメラです。約 3,250 万画素の新開発 CMOS センサーと DIGIC X により、高解像度と高感度性能を両立。ISO 感度は常用 100 ~ 64,000 まで対応し、暗所でもノイズを抑えたクリアな描写を実現します。

AF はディープリニング技術を用

い、進化した AF アルゴリズムにより人物・動物・乗り物などの被写体認識を高精度にサポートし、最大 40 コマ/秒の高速連続撮影に加え、連続撮影枚数も最大約 330 コマに向上し、決定的瞬間を確実に捉えます。動画性能も 7K 内部 RAW 記録、4K120p、Canon Log 2/3 対応により、映像制作の自由度が飛躍的に向上しています。



ほかにも、SD カード + CFexpress カードのデュアルカードスロット、最大中央 8.5 段の手ブレ補正機能、最大 20 枚、0.5 秒をさかのぼるプリ連続撮影、シャッター耐久 50 万回の実現など、撮影、映像制作等の幅広い現場でも対応できる 1 台です。

【問い合わせ先】

キヤノンマーケティングジャパン株式会社

社 担当：佐野、西根

TEL：03-3542-1831

ニコンイメージングジャパン

「Z CINEMA」シリーズより、
「ニコン ZR」を発売

ZR は約 630g の軽量設計でありながら、プロフェッショナルの映像制作に不可欠な機能を搭載しています。この 1 台で高解像度の映像でのモニタリング、高機能な録音、RAW 動画の内部収録が可能です。

シネマカメラとして名高い RED 機のカラーサイエンスと露出基準を採用したニコンのカメラ向けに設計された RAW フォーマット「R3D NE」の内部収録が可能。

フィルムライクな色味、忠実な肌の色味、白飛びせずに階調がなだらかに変化する優れたロールオフ処理が得られます。これにより、RED 機を含むマルチカメラでの制作体制においても、グレーディングの互換性が確保されます。

静止画性能では、新しいプリセット「ポートレート」と「星景」モードが追加。その他動く被写体にも素早く対応する高速・高



精度な AF や強力なボディー内 5 軸手ブレ補正を搭載しています。

別売のショットガンマイクロホン ME-D10 は、高い指向性を活かしてよりクリアに肉声を取録したり、フラットな感度特性で高い音から低い音まで収録できます。32bit float での録音にも対応しています。

【問い合わせ先】

株式会社ニコンイメージングジャパン

<https://www.nikon-image.com/support/contact/internet.html>

ニコンカスタマーサポートセンター

TEL: 0570-02-8000

TOPPAN

名著誕生展 ヴァチカン教皇庁図書館Ⅲ+
会期：2026 年 4 月 25 日 (土)
～ 7 月 20 日 (月・祝)

印刷博物館では、2002 年、2015 年と、過去 2 回にわたりヴァチカン教皇庁図書館とともに企画展を開催してきました。3 回目となる本展は、'名著'を通して人類の知の歩みを総合的に追体験する、国内初の展覧会です。

古来、様々な分野で名著はうまれ、継承されてきました。特に哲学・宗教分野

での知は、賢人が発した言葉として記述され、写本として伝わっていきました。そうした知の伝達行為は、中世後期に西洋で誕生した印刷技術によって激変します。

本展覧会は、印刷産業が文化・社会の発展を力強く支えつづけてきたこと、人間とはな

にかを問い続けてきたことを、名著を通して示すものです。書物がペー



モーツァルト「魔笛」、1805年頃

パーメディアからデジタルへおきかわった時に名著はどうなっていくのか、どのように人類は名著にむきあうのか、未来につながるヒントが見つかる機会になれば幸いです。みなさまのご来館をお待ちしております。

【問い合わせ先】

印刷博物館 東京都文京区水道 1 丁目

3 番 3 号 TOPPAN 小石川本社ビル

開館時間：10:00 ~ 18:00 休館日：毎

週月曜日 TEL: 03-5840-2300 (代表)

FAX: 03-5840-1567

<https://www.printing-museum.org/>

第 51 回「日本写真家協会賞」贈呈式 受賞者：株式会社セコニック

第 20 回「名取洋之助写真賞」授賞式 受賞者：板谷めぐみ「京大吉田寮～記憶と想起の結節点～」 木村 孝（奨励賞）「アマター『永遠の街』の肖像」

第 8 回「笹本恒子写真賞」授賞式 受賞者：西澤 丞

2025年12月10日（水） 於：アルカディア市ヶ谷「富士の間」

12月10日にアルカディア市ヶ谷の3階「富士の間」にて午後4時30分より贈呈式を開催した。

贈呈式は木谷有里氏の司会で始まり、最初に熊切大輔会長より「現在はAIが劇的な進化を遂げ情報の真実性が問われる状況です。誤情報で社会が混乱しないよう判断対処が必要で、写真も真正性が問われます。プロンプトひとつで画像が出来るなか、逆に写真の価値や写真家の存在意義が高まりました。写真界のリテラシーを高め、次世代につなぎ未来の写真界を明るくするのが当協会の役割です。今後もご支援、協力をお願いします」と挨拶があった。

続いて文化庁参事官付 芸術文化担当 芸術文化支援室長 松永佳子氏より各受賞者の皆様へ祝辞とともに「写真は独自の視点表現を通じて社会や歴史を後世に継承する文化芸術です。写真の持つ魅力を皆様の活動を通じて伝えることを願っています」と来賓祝辞をいただいた。

「日本写真家協会賞」贈呈式

第51回「日本写真家協会賞」を株式会社セコニックに贈呈した。贈呈理由は、「1951年の設立以来写真撮影に欠かすことの出来ない露出計を一貫して作り続け、最新の分光式カラーメーターのように時代とともに変わっていく照明機材に適した製品も送り続け、写真界に大きな貢献をしていることに対して」。

受賞された株式会社セコニックの製品ソリューションズ営業部 部長 黒井靖子氏へ熊切会長から表彰状を、同社同部 光学機器営業課 課長 吉澤隆史氏へ山口規子副会長から盾を贈呈した。

続いて黒井氏より「私たちの仕事は光を数値化し表

現の自由を開くことで、露出計やカラーメーターを通して現場の皆様と築き上げてきました。現在はほかにも様々な製品を開発、製造、販売しており、創業以来、露出計やカラーメーターを74年間で110機種を開発販売しました。弊社がこの賞をいただけるのは、会社を守って指導くださった諸先輩方、製品開発の助言をいただいた写真家の先生方、業界を盛り上げ協力した仲間、弊社の製品をお買い上げ愛用いただいたユーザー皆様のお陰でお礼申し上げます。この喜びを社内メンバー、世界の販売パートナーとわかちあい、今後も皆様に信頼いただける製品をご提供してまいります」と受賞の言葉を述べられた。記念写真撮影を行い「日本写真家協会賞」の贈呈式を終了した。

「名取洋之助写真賞」授賞式

続いて「名取洋之助写真賞」の授賞式を行った。第20



「日本写真家協会賞」贈呈式 記念撮影



熊切大輔会長の開会挨拶



文化庁参事官付 芸術文化担当 芸術文化支援室長 松永 佳子氏の来賓挨拶



株式会社セコニックの黒井靖子氏へ表彰状を贈った



株式会社セコニックの吉澤隆史氏へ盾を贈った



受賞の言葉を述べる株式会社セコニックの黒井靖子氏



「名取洋之助写真賞」選考委員の山田健太氏による講評

回「名取洋之助写真賞」は板谷めぐみ氏の「京大吉田寮～記憶と想起の結節点～」が、同写真賞奨励賞には木村孝氏の「アマター『永遠の街』の肖像」が受賞した。選考委員の専修大学教授・山田健太氏、熊切大輔会長が紹介があり、写真家の清水哲朗氏は都合により欠席した。

選考委員を代表して山田氏から「今年は19作品の応募があったなかで『京大吉田寮』は圧倒的に楽しい、面白い、考えさせられる組写真の特性を存分に活かした作品でした。撮影者自体が飛び込み、現代の学生たちを生々しく、重厚な歴史とのギャップを見事に映し出した作品です。写真力と飽きない構成力、被写体との関係の取り方が一線を画していました。時に空気となり、カメラを意識させ、写真家視点も織り交ぜ、内容に引き込む力など完成度を高く評価しました。時代を超える存在感が伝わりジャーナリスト的な作品になっています。大学が学生に対して明け渡し請求訴訟の渦中に受賞の選考時期であり、また審査日に大阪高裁が大学と寮生の和解を勧告し成立した日でもありました。そのめぐりあわせもひとつの運命でした。

奨励賞の木村孝さんの作品は口頭では極めて難しく良さが伝わりにくく、写真を見る側に想像力をもって裏側の物語を感じさせ、撮影者の世界が現れてくる作品です。ドキュメンタリーフォトは戦場や危険地帯などや世の中に紹介されていないことについて、その場所に入って作品にすることに脚光が浴びがちですが、今年は趣の違うユニークな写真を選奨できました。「名取洋之助写真賞」は今年で幕を閉じます。若手ドキュメンタリー作品発表の場、評価の場、プロ登竜門として役割を果たしました。2005年はフィルムとデジタルのカメラの出荷台数が逆転し報道現場でデジタルが主流となった年で、そのタイミングでドキュメンタリーに焦点を当てた賞を創設した意味は大きかった。写真加工があたりまえ、AIで存在しない画像も生成でき、専門家でも見分けがつかなくなっています。ジャーナリズムは過去の遺物なのか、ドキュメンタリーフォトの社会周知が求められ、その中核がJPSであって欲しい。名取賞は「JPSノンフィクション写真賞」と生まれ変わると伺っています。危機時代だからこそ受賞の2人には大きな活躍をしていただきたい」と講評された。熊切会長より賞状と副賞が板谷めぐみ氏と木村孝氏へ贈られた。

板谷氏から「京大吉田寮は112年の歴史があり自治



「名取洋之助写真賞」授賞式 記念撮影



熊切会長より「名取洋之助写真賞」を板谷めぐみ氏へ贈った



「名取洋之助写真賞」受賞者・板谷めぐみ氏の挨拶

対応する学生たちが住み続け、京大が一方向的に明け渡しを要求し今年、表面上は和解をしました。歴史的経緯を配慮し寮を補修しながら残す和解条項でしたが、学生の補修要望を京大は無視し続け、寮生たちは残すために学問や研究をしながら奮闘しています。私は以前、写真家でしたが写真に疑問を持ち、受験し直して京大文化人類学分野で戦争記憶の忘却について研究しています。私は住みながら撮る立場と逆に撮られる立場でもあります。学問や研究を行いながら生活し、寮を残し自分や未来学生も安住できるようにしたいという場所を撮り続けました。私の学業研究テーマは「記憶」で、作品サブタイトルでも「記憶と想起の結節点」です。国策にからめ取られた大学や寮生、戦死した学生たちの記憶が漂う身体感覚と記憶が発動する不思議な感覚になり、ひょういして撮るような生活をしていました。現実と過去、現在と未来が多面的な不思議な時間を過ごしながらドキュメンタリーとは何か悩みながら撮り続けています。軍事関係研究へ助成金が増えている意味とは何か、国の現状と一見、吉田寮は無関係に思いますが、経済的に困窮している学生や留学生のセーフティーネットでもあり、学生が学問研究で地域や国に還元していることが閉ざされようとしている意味は何か。他方、寮生側はなぜ残したいのか。制限あるメディアの表面的な取材ではなく、ドキュメンタリーとして中に入ることに面白さがあると思います」と受賞の挨拶をされた。

続いて木村氏から「タイの新興工業団地での人と部屋を撮った作品で、当初は第三者の立場でランドスケ



熊切会長より「名取洋之助写真賞奨励賞」を木村孝氏へ贈った



「名取洋之助写真賞・奨励賞」受賞者・木村孝氏の挨拶



熊切会長より「笹本恒子写真賞」を西澤丞氏へ贈った



「笹本恒子写真賞」受賞者・西澤丞氏の挨拶

ープを撮っていましたが、次第に街に興味をもち撮影したのが今回の作品です。現在は三作目としてさらに住民に寄り添った作品づくりを進めています。当初は日本から通い、現在は在住で作品を撮り続けています。作品づくりを続けるなか、アマタナコンの工業団地の名前の地域に興味を持ち、そこに住む人たちを今回の作品構成としています。ミャンマーやカンボジアの方がなぜここに住んでいるのか、国際情勢や自然にも関心を持ち、今後は大きな歴史と個人の埋もれている歴史や関わりを意識しながら撮影を続けていきたい」と受賞の挨拶をされた。続いて受賞者と選考委員で記念撮影を行い「名取洋之助写真賞」授賞式を終了した。

「笹本恒子写真賞」授賞式

第8回「笹本恒子写真賞」は西澤丞氏が受賞した。はじめに選考委員の編集者・佐伯剛氏、名誉会員で写真家の野町和嘉氏、熊切大輔会長が紹介された。

選考委員を代表して野町氏から「西澤さんの写真で圧倒されたのは写真展『超現実世界』でした。先端科学や大規模な造船現場、製鉄所など滅多に目にすることのできない現場で撮影されたものです。3K現場であり西澤さんの造形美、構成力で素晴らしい絵に仕上がっています。企業秘密で封印され、関係当局との交渉を通過しての撮影であったと思います。テーマは核融合、ロケット、造船所、鉄工所など広範囲に及びいずれも完成度の高い作品です。現代の我々は利便性の極致で高度な技術で暮らしが支えられており、何か不都合が起きれば社会が大混乱となる危ないところで我々は生かされているとわかります。福島を長く取り組まれ写真集も出され、これからも廃炉作業をお撮りになると思いますが、西澤さんの熱意、造形力でより深いものを見せて頂きたい。今回で「笹本恒子写真賞」は終えることになり、今後は「JPS写真家賞」へ引き継がれます。長くライフワークに取り組んでいる写真家を輩出でき、笹本賞は役割を果たしたと思います」と講評を述べた。受賞者の西澤氏に熊切会長より表彰状と副賞を贈呈した。

続いて西澤氏より「常に新しいことを撮影しようと活動しており、どのジャンルにもあてはまらず私は賞とは無縁でした。新しいことは評価基準がなく、写真家20年ひとりで暗い夜道を歩いている様で、この賞で報われました。JPS皆様やこれまで関わってくださった皆様に感謝致します。本賞をいただき『日本の写真文化

レベル向上』と『写真家の地位向上』を目標に、皆様とともに写真文化に貢献します」と受賞挨拶を述べられた。続いて壇上にて受賞者と選考委員で記念写真を撮り、授賞式を終了した。続いて東京都知事・小池百合子氏からの祝辞が披露された。



「笹本恒子写真賞」選考委員の野町和嘉氏による講評

熊切会長より“新賞”について「野町名誉会員から説明のように、「笹本恒子写真賞」は8回にわたり著しい活躍の写真家へ授与することができ、今回で最後となりました。このスピリットを継続し、長年素晴らしい撮影、活躍をされている写真家を今後も表彰するため“JPS写真家賞”としてスタートします。また、「名取洋之助写真賞」は“JPSノンフィクション写真賞”として引き継がれます。応募年齢30歳以下、応募枚数15～30枚として若い写真家皆さんが応募しやすくします。これを機にJPSの賞を見直しこれまでの「日本写真家協会賞」とともに3賞をまとめて“JPSアワード”としてひとつの形を取り、新たにスタートします。これからも皆様ご協力ください」と説明があり、贈呈式・授賞式を終了した。最後に会場を展開し、相原正明会員による集合記念写真の撮影を行った。



「笹本恒子写真賞」授賞式 記念撮影

2025 年度会員相互祝賀会 2025年12月10日(水) 於:アルカディア市ヶ谷「富士の間」

写真関係者が一堂にそろう「受賞・出版・写真展」などで活躍された会員を相互祝福

会員相互祝賀会が始まり、熊切会長挨拶のあと来賓を代表してソニーマーケティング株式会社イメージングエンタテインメント ビジネス部 統括部長水野雅夫氏より「受賞者の皆様のお話を伺いどのように伝えるか、切り取るかが作品につながり、人の心を動かすのだと改めて感じました。機材と新しい技術を提供しながら皆様の活動に寄り添い、一緒に写真文化を発展させてまいります。感動を伝えるお手伝いをしていきたいと思えます」と挨拶された。

続いて本日出席の会員外理事と名誉会員を紹介し、賛助会員を代表して富士フィルム株式会社執行役員兼富士フィルムイメージングシステムズ株式会社 代表取締役社長 松本考司氏から「富士フィルムは写真幸福論で、人々が写真を見ることで幸せになれることが価値の本筋だと世の中に問いています。AI 時代で本物偽物の混合時代に、何が大事かと考えてきました。富士フィルムは幸せを感じる写真が良い写真だという定義

で活動しています。これからも皆様と写真の価値を高めていく活動を行います」と挨拶のあと乾杯し、歓談にはいった。

2025 年度の名誉会員方々を紹介し、出席の江成常夫、大石芳野、土田ヒロミ、英 伸三、広田尚敬の各名誉会員に会長、副会長から名誉会員証と金バッジが贈呈された。続いて 2025 年に出版や写真展で活躍した会員の記念撮影を行った。さらに出席の新入会員の紹介挨拶、「2026JPS 展」アピール、「KG+2027」出展支援作家募集アピール、「JPS フォトフォーラム」「名取賞写真展」「笹本賞写真展」等のアピールが行われた。恒例の福引では多くの景品が渡された。最後に理事全員が壇上に上がり、山口規子副会長の三本締めで祝賀会は盛況のうちに終了し、散会した。

(贈呈式・授賞式共に記) / 出版編集委員: 小野吉彦、
撮影 / 出版編集委員: 桃井一至)



「会員相互祝賀会の記念撮影」(撮影・相原正明)



ソニーマーケティング株式会社イメージングエンタテインメントビジネス部統括部長・水野雅夫氏による来賓挨拶

富士フィルムイメージングシステムズ株式会社代表取締役社長・松本考司氏による乾杯の発声



新名誉会員との記念撮影



2025 年度新入会員の皆さん



盛り上がった豪華景品の福引抽選会



写真展委員会より「2026JPS 展」のアピール



2025 年に受賞・出版・写真展等で活躍された会員の皆さん



国際交流委員会より「KG+2027」出展支援作家募集のアピール



企画委員会より「JPS フォトフォーラム」「名取賞写真展」「笹本賞写真展」などのアピール



三本締めで祝賀会を終了した

「日本写真保存センター」調査活動報告(44)

理事・和田直樹（日本写真保存センター担当）

■写真原板の保存・公開等に関する事業報告

1. 写真原板の収集および目録作成

2025年度は山岳写真家・川口邦雄氏の事務所における資料選別や、宇納敏氏が撮影したスポーツ写真(ボクシング、剣道等)を預かり、収集に向けた調整を継続している。また、広島平和記念資料館から2024年度に続き受託した林重男氏撮影の原板(44コマ)については、相模原分館への入庫準備を進めている。収集の適正化を図るため、歴史的価値や劣化状況等を客観的に評価する「写真原板収集ガイドライン」および「調査チェックリスト」を新たに制定した。国立映画アーカイブ相模原分館への入庫については、6月、10月、2月に実施し、杉村恒氏、岡本崔氏、勝山泰佑氏、笹本恒子氏、白川義員氏、広島平和記念資料館の原板計21,725点を収めた。年間入庫数は2024年度とほぼ同数であり、これまでの累計収蔵数は215,240点となった。現在は大東元氏、稲越功一氏、白川義員氏の包材交換およびデータベース入力作業および若目田幸平氏の画像デジタル化を進めている。

2. 資料のデジタル化と保存体制 上半期に岡村崔氏の原板8,732点の高画質デジタル化を完了し、現在は若目田幸平氏の原板について同様の作業を進めている。また、過去に低画質スキャンを行った写真協会所蔵原板3,755点についても、高画素デジタルカメラによる再デジタル化を実施し、利活用環境を整備した。画像データの安全性確保については、地震等の大規模災害によるサーバー被災リスクを低減するため、従来の1拠点管理からクラウドストレージを含む2拠点体制への移行を視野に、費用見積を含むケーススタディに着手している。

3. 目録・資料の公開および権利整備 寄贈者本人や家族による画像利用ルールを明確化するため、寄贈契約書雛形の改訂準備を進めている。資料公開の進捗としては、写真原板データベースにおいて岡村崔氏の美術写真作品を公開した。公開に際しては、著作者人格権に配慮し、画像掲載を既刊写真集掲載分に限定しつつ、タイトル、作者名、特徴等のメタデータ(8,350件)は全件公開とし、専門家等の利活用に供することとした。あわせて、笹本恒子氏が撮影した女性芸術家等の作品217コマを新たに公開した。なお、肖像権への対応については、デジタルアーカイブ学会の「肖像権ガイドライン」を準用し、個別の判断に基づき適切な運用に努めている。

■写真展「写真フィルムからよみがえる原爆の記録と記憶」の開催

1. 開催概要および展示内容

2025年度、日本写真保存センターは、戦後80年の節目に合わせ、所蔵(寄託を含む)する写真原板の文化的・歴史的価値を再考し、保存の重要性を広く社会に啓蒙するための利活用事業として、写真展および記念講演会を多角的に展開した。歴史の記録としての写真原板が持つ「唯一無二性」と、近年のAI社会の到来において写真原板が記録の「真正性」を担保する重要な資料であることをアピールした。

写真展は、2025年7月31日(木)から8月20日(水)までの休館日を除く実会期14日間、東京都新宿区のアイデムフォトギャラリー「シリウス」において開催した。開館時間は10:00から18:00、入場は無料とした。

当センターが現在保管している約37万点の写真原板資料群の中から、原爆投下直後の惨状から戦後の復興へと向かう歩みを克明に捉えた作品約50点を選定し構成。山端庸介、林重男、松重美人、岸田貢宜、深田敏夫、吉田潤らの写真を展示した。これらの作品の原板は、単なる視覚情報の記録媒体としての意味だけでなく、写真家と時間を共にした唯一の物理的な記録であり、まさに歴史の断片を封じ込めた「タイムカプセル」のような存在であることを提示する機会となった。

展示手法においては、写真原板が持つ豊富な情報量を示すために精緻な銀塩プリントでの展示に加え、写真家の撮影現場での足跡が確認できるコンタクトプリント(ベタ焼き)や、複数の原板から製作したパノラマ写真などを織り交ぜた。特に、原板から直接製作され、細部まで鮮明に再現され高精細なプリントは、その圧倒的なリアリティーで原板保存の重要性を来場者に強く印象付けた。

会場内には、酸性劣化(ビネガーシンドローム)によって波打ち、崩壊の危機にある原板の実物も展示し、適



写真展会場風景 撮影・寺師太郎

切な保存環境が整備されなければ貴重な写真原板が永遠に失われてしまうという現状を視覚的に訴えた。あわせて、日本写真保存センターの活動目的やこれまでの実績、フィルムの適切な保存方法、写真原板データベースの利活用方法などをパネルやリーフレットで紹介するコーナーを開設した。会期中の来場者数は約七百人に達し、活動に賛同した来場者からの寄附も募った。二万円以上の寄附に対しては、所蔵原板から作成した高精細な印刷複製プリントを返礼品として進呈する取り組みを行い、会期中の寄附総額は約四万五千円となった。本展は、株式会社アイデム、株式会社シグマ、株式会社写真弘社、株式会社タムロン、TOPPAN株式会社、株式会社長野クリエイション、株式会社ニコイメージングジャパン、富士フイルムイメージングシステムズ株式会社、株式会社ブルージェイの特別協賛のもと実現した。改めて感謝申し上げる。

2. 記念講演会の実施 会期中、東京都写真美術館との共催により、写真展の関連事業として、東京都写真美術館1階ホールにおいて、写真原板の重要性を専門的な視点から掘り下げる2つの記念講演会を開催した。講演会には延べ百二十五名が来場し、活発な質疑応答が行われた。

記念講演会①「写真原板が社会に与えた影響について、写真史・博物館それぞれの視点」は8月2日(土)の10:30から12:45にかけて開催し、42名が来場し



記念講演会①の会場風景
撮影・井上六郎

た。講師には、写真史研究家で学術博士の白山眞理氏と、東京文化財研究所客員研究員である田良島哲氏を招いた。白山氏は近代以降の写真報道の歴史的文脈から、田良島氏は博物館における写真資料の保存と活用の実務的観点から、写真原板が社会の記録や文化の伝承、芸術表現の基盤として果たしてきた役割について論じた。写真の黎明期から現代に至るまで、原板がどのような価値を創出してきたのかが多角的に示唆される内容となり、AI時代における写真原板のもつ真正性の重要性を示すことができた。

記念講演会②「写真家・土田ヒロミが50年間向き合い続けた『ヒロシマ』」は、8月9日(土)の10:30から11:50にかけて開催し、83名が来場した。講師には写真家の土田ヒロミ氏が登壇した。土田氏は、1970年代から半世紀にわたって撮影を続けている「ヒロシマ三部作(人・風景・物)」プロジェクトについて、



講演中の土田ヒロミ氏
撮影・井上六郎

その起点から現在に至るまでの思想と変遷を語った。被爆80年の節目において、一つのテーマに長期的に向き合い、記録し続けることの重みと、それを担保する原板資料の永続性が改めて共有された。



来場者との質疑応答の様子
撮影・井上六郎

3. 来場実績およびアンケート結果 写真展の来場者数は延べ七百二名、講演会の来場者は延べ百二十五名であった。講演会アンケートでは、内容について「満足」以上が84%に達し、高い関心が示された。一方、来場者の78%を50代以上が占めており、若年層への広報が今後の課題となった。

■セミナー「あなたのネガの整理法」の実施報告

1. 開催概要および趣旨 2026年1月27日、JCIビル6F会議室にて、日本写真保存センター委員会・寺師太郎委員長が講師を務め、ハイブリッド方式によるセミナーを開催し、計43名が受講した。デジタル化が加速する今、ネガを適切に保存、継承することは重要な社会基盤であり、未来へ引き継ぐために写真家自身が取り組むべき実践的な手法を提示した。

2. セミナー内容の要点 ネガの最大の脅威は、加水分解による「ビネガーシンドローム」であり、進行すると修復不能となる。劣化防止には、押し入れ等の湿気の多い環境を避け、低温・低湿な環境を維持し、埃対策をすまわり通気性が失われることがリスクにつながることを示した。長期保存に適した専門資材について言及し、PGI社の協力により、中性・無酸のネガシートや保存ボックスなど、会場で実際に手に取って確認する機会を設けた。また、ネガを単なる「遺品」ではなく「社会的資産」として活かすには、体系化、言語化、可視化が不可欠であり、作品の分類に加え、



質問に答える寺師講師
撮影・井上六郎

日付・地名・権利関係といった詳細なメタデータを付与することで、初めて「探される対象」になりうることを示した。

3. 総評 質疑の時間では多くの発言が寄せられた。発言の大半は写真家各自の保存環境をどうするべきか、調査から得られた保存状態のよいネガの保存環境の実例などに関心が寄せられた。これらにより保存に関する意識の高まりが得られ、セミナー主旨が十分に伝わったと考えられる。一般参加者の比率の高さは、日本写真保存センター活動に対する関心の表れであり、今後も継続的な啓発活動を実施したい。

2025年度「フォト・ジャーナリズム論」講座報告

共催事業：専修大学、公益社団法人日本写真家協会

2010年専修大学が開講した「フォト・ジャーナリズム論」(旧：報道写真論、山田健太教授担当)は、公益社団法人日本写真家協会との共催事業であり、当協会は、2011年から講師を派遣してきた。この講座は「学生たちの真実を見抜く目を育て批判力と行動力を養うことを目的とし、メディアの第一線で活躍する写真家や実務者の実作と体験談をもとに、いまメディアの現場で何が起きているかを理解してもらうこと」を方針としている。

2025年度は堀 誠と小山幸佑両氏を派遣した。会場は、川崎市多摩区の専修大学生田キャンパス。

●堀 誠

2025年4月15日～6月6日、7月22日(7回)

専修大学文学部のジャーナリズム学科の学生さんたちに向け、前半6回の講義と7月22日に政治学者の姜尚中さんとリモート対談を行った。通信社で働いてきた写真家として学生さんたちと「日本近代化の光と影」を中心テーマに歴史的考察をした。

また東京都写真美術館の「ロバート・キャバ 戦争」、ニコプラザ東京の小柴一良「水俣物語」、富士フィルムスクエアの土田ヒロミ写真展「俗神」を見に行ってもらいレポートを提出してもらった。

第1回は「通信社の仕事」通信社の仕組み、歴史、について解説した。2022年7月8日に起きた安倍元首相銃撃事件で現場に居合わせた地方支局の記者たちが、どのように写真と動画を撮影し、写真が通信社を通じて全世界に配信されたのかを解説した。また、通信社と新聞社の違い、新聞とSNS、組織ジャーナリズム、フォトジャーナリストに求められること。AIによる合成写真とねつ造写真の歴史について解説した。

第2回は「東ティモール非正規戦争」1999年に行われた独立を問う住民投票を中心に、民兵に襲われ運転手に助けられるという私の失敗について、いつ取材をやめて引き揚げるかなどについてリアルな戦争体験を話した。

第3回は「エネルギーは国家なり」石炭から原子力へ日本が直面したエネルギー問題と蹉跎を軍艦島から福島へめぐる旅、「国策」に翻弄された人々、「失地回復」に立ち上がる人々の願いを写真で表現する方法を考察した。

第4回は「近代の奈落 水俣、足尾」戦後の高度成長がもたらした未曾有の公害事件「水俣病」、それは高度成長だけがもたらした問題なのか、公害の原点ともいえる足尾鉍毒事件から通底する問題を考えた。

第5回は「差別という病」ハンセン病と津



キャンパスで講義中の堀 誠氏



久井やまゆり園事件、ハンセン病は国家の誤った政策により差別が助長された。2016年7月に起きた津久井やまゆり園の障害者殺傷事件は優性思想が私たちの中に残っていたのではないかを考えた。

第6回は「沖縄戦と米軍基地」日本の国土の0.6%しかない沖縄に米軍専用施設の7割が集中する。「あらゆる地獄を集めた」と米軍側が表現した沖縄戦、日本の辺縁には私たちが抱える矛盾が集中し、本土の平和のために暴力と共存することを強いられている問題を考えた。

第7回はオンラインで政治学者の姜尚中さんと職業としてのフォトジャーナリストについて何が必要か、7月に行われた参院選の結果と政治の将来について考えた。

厳しさを増すマスメディアの世界、それでも熱心な学生さんたちに触れて、まだ私たちにも希望の光があるのだと思うことができた期間だった。

堀 誠(ほり・まこと)

1959年東京都生まれ。写真家・ジャーナリスト。日本大学芸術学部写真学科卒業後に通信社の写真記者として、湾岸戦争、旧ユーゴスラビア紛争、ソ連崩壊、南オセチア紛争、東ティモール独立など世界各地の紛争や地球環境と民族の生活などを取材。その後、明治以来の日本の近代化の光と陰、東日本大震災・原発事故後の福島、マイノリティー、人口減少と格差拡大、袴田事件など各地の冤罪事件などの取材を続けている。共著などに「維新の影 近代日本150年思索の旅」「祝祭の陰で 2020-2021 コロナ禍と五輪の列島を歩く」「姉と弟 捏造の闇『袴田事件』の58年」など。JPS会員。共同通信社編集委員。

●小山 幸佑

2025年6月17日～7月15日(6回)

今回のお話を頂き、講義内容についてはほぼ自由というものでしたが、ジャーナリズム学科の学生といっても多くはペン記者やその他一般職種を志す学生がほとんどであり、普段のカリキュラムにも写真に関する授業は存在せず、また将来写真の道を選んだ卒業生もまた実際ほほいない、という話を事前に伺っていたため、シラバス作成にあたってはその点を留意する必要がある。現代の大学生の皆さんは、子供の頃からデジタルネイティブとしてSNS等を通じ、彼らよりも上の世代の私たちが想像するよりも実際にはずっと膨大な活字と写真に日々自然に触れ合ってきた世代であると考えている。その一方で、200年間の写真の歴史そのものを体系的に学ぶ機会、あるいは写真で何かを伝え表現するという行為そのものについて改めて考える機会は、実のところ少ないのではないかと考えている。そこで「フォトジャーナリズムを含めた写真の歴史をざっくりと学び、日々スマホの画面で指先で扱っている写真というメディアが、どこから来たのかを知ってもらう」という前提の中で、私個人自身が現在に至るまで写真を通して学びそしていま写真家としても最も大切にしている考え方のひとつでもある「写真表現の中には撮影者の「視点」が存在し、それは撮影者のバックグラウンドに根ざしている＝それを伝えよう／読み解こうとする行為は自分自身や他者への肯定に繋がるかと体感してもらう」という2つのテーマを軸に全6回の授業を構成することとした。

実際の授業にあたっては、まず事前に私がプリントを作成し、当日全員に配布したのち投影したスライドを解説する形で講義を展開しながら重要箇所のみ書き込み式にすることで著名な写真家(といっても授業内で紹介できたのはごくごく数名のみですが)の名前や用語、キーワードなど、学生の皆さんが将来写真関係の道に進まざとも一般教養として最低限知っておいて欲しいことが一目で分かるようにした。写真の起りから技術革新による普及、その後の戦争報道を経たジャーナリズムの隆盛から現代の個人の時代までの歴史について、時間の都合上ざっくりと紹介するとどまったものの、皆さん毎回しっかりと前を向いて大変興味深そうに話を聞いてくれていた。

また初回の授業にて「わたしと社会」をテーマにした5枚以上の組写真を作成する旨の課題を告知し、その後の毎週の授業の中で過去や現代の写真家の多様な表現手法や解釈等を紹介して写真表現に対する造詣を深めつつ、最終授業前の提出日までに各々が自分なりの方法で課題に取り組んでもらえるようにした。毎回の講義にあたっては「視点」というキーワードを軸に、撮る時に見る時も、また個人であっても



キャンパスで講義中の小山幸佑氏



小山 幸佑(こやま・こうすけ)

1988年東京都生まれ。朝日新聞出版写真部を経てフリーランス。2018年よりイスラエル/パレスチナにて取材を行う。2021年東京恵比寿にKoma Galleryを設立。第18回名取洋之助写真賞奨励賞受賞。JPS会員。

マスメディアにおいても、カメラを持った撮影者の思考と選択を通じた風景が他者に共有されるメディアとしての写真の特性を意識してほしいということを繰り返し解説した。

そして最終回では、提出されたそれぞれの作品を全員の前でスライド投影して紹介した。学生の皆さんにとっては、自分自身とそれを取り巻く環境について熟考しそれを写真という視覚表現に落とし込む(あるいはそれが自動的に落とし込まれる)ということを実際に体験し、また同時に普段隣に座っているクラスメイトのプライベートな面や複雑な思考や葛藤、現在の彼や彼女を形成した過去の出来事やいま大切にしているものごと、将来への展望などについて、写真からそれを読み解き、感じるという経験をしてもらえたのではないかと思います。中には一貫したコンセプトを立ててしっかりと組写真を仕上げてくる学生もいて、私自身も大変楽しむことができた。毎回楽しみにしていた授業後に提出されるリアクションペーパーの中に「授業と課題を通じて、自分の視点を肯定しても良いんだという気持ちが芽生えた」という一文を見て、毎回苦勞して準備してきたことが全て報われたと実感した。一連の講義を通じて学生の皆さんに少しでも写真という表現について考えを深めてもらう機会となったのであれば嬉しい。

(写真提供／専修大学 構成／小池良幸常務理事)

講師派遣歴(敬称略)

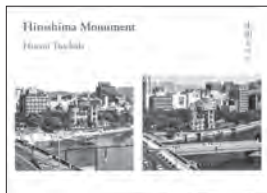
2011年度: 桑原史成	2019年度: 小松健一、前川貴行
2012年度: 長倉洋海、英伸三	2020年度は新型コロナウイルス感染症拡大のため休講
2013年度: 宮嶋茂樹、樋口健二	
2014年度: 大石芳野、山本皓一	2021年度: 渋谷敦志、小澤太一
2015年度: 清水哲朗、石川文洋	2022年度: 高橋智史、米田堅持
2016年度: 桃井和馬、石川 梵	2023年度: 小松由佳、竹田武史
2017年度: 宇井真紀子、広河隆一	2024年度: 榎並悦子、野田雅也
2018年度: 公文健太郎、竹沢うるま	



協会に寄贈された会員の出版物を到着順に掲載いたします。

(2025年7月～2026年1月)

- ①発行所
 - ②発行年月
 - ③サイズ
(タテ×ヨコ)、頁数
 - ④定価
 - ⑤寄贈者
 - ⑥電子書籍ストア
- 本紹介／会員・池口英司



Hiroshima Monument
土田ヒロミ

- ①ふげん社 ②2025年6月
- ③25.7 × 36.4cm、120頁
- ④10,000円 ⑤発行所

原爆投下によって壊滅した広島市中心部の街の姿を、定点観測の手法によって、1979年から4回にわたって記録。1つの見開きに4枚のモノクロ写真を並べる。消えた風景、残された風景を通じて、私たちの生き方を考えさせられる。



**列車で行こう！ JR+私鉄
観光列車大図鑑**
櫻井 寛

- ①世界文化社 ②2025年7月
- ③25.7 × 18.2cm、384頁
- ④3,600円 ⑤発行所

日本全国の、移動するためではなく、乗って楽しむことを主な目的として運転されている観光列車を、一同に集める。一つの列車ごとに、季節感のある走行写真と客室内の写真を並べ、見る者を鉄道旅行へと誘う。



人物ポージングのレシピ帳
今井しのぶ

- ①玄光社 ②2025年6月
- ③25.7 × 18.2cm、160頁
- ④2,500円 ⑤今井氏

ポートレート撮影で意外と悩むのが、モデルにどんな動きを与えるかで、顔の向き、手の位置など、難問は多い。そんな悩みへの回答が揃っているのが本書。小さなアイデアを覚え、フォトグラファーとしての引き出しを増やそう。



原爆棄民〔増補改訂版〕
韓国・朝鮮人被爆者の証言
伊藤孝司

- ①論創社 ②2025年8月
- ③21 × 14.8cm、418頁
- ④3,600円 ⑤伊藤氏

日本で暮らし、原爆の被害を受けた韓国(大韓民国)人、朝鮮(朝鮮民主主義人民共和国)人の証言を集める。原爆の後遺症と、国籍による微妙な立ち位置に苦しみ続ける人の言葉には、私たちが忘れてはならない示唆がある。



サハラ 波乱の海を越えて
韓国・朝鮮で生きる日本人女性たちの物語
伊藤孝司

- ①風媒社 ②2025年8月
- ③21 × 14.8cm、347頁
- ④2,200円 ⑤伊藤氏

戦前、戦中に大陸に移り住み、今も韓国・朝鮮で生き続けている日本人女性たちの、現在の姿を報告するルポルタージュ。異国での生活には、今なお消えない戦争の傷跡が影を落とす。つまり戦争とは、弱者を永遠に苦しめ続ける凶器なのだろう。



人間の大地
野町和嘉

- ①クレヴィス ②2025年7月
- ③26.5 × 19.5cm、232頁
- ④3,600円 ⑤発行所

サハラ、ナイル、チベットなど、日本からは遠く離れた地域で生きる人たちの姿を収めた写真集。物質的な豊かさには恵まれない土地に住まう人では、暮らしぶりは真摯で、笑顔は明るい。人間の生き方はどうあるべきかを問う一冊。



住まいの昭和図鑑
昭和レトロ住宅のゆたかな暮らし
編著・小泉和子、写真・小野吉彦

- ①エクスナレッジ ②2025年7月
- ③25.7 × 18.2cm、192頁
- ④2,600円 ⑤小野氏

現代の日本家屋の、室内の写真を集める。少し古びた木造の建物や、調度品の数々が、毎日の暮らしに合致する心地よい空間を創り出していることが分かる。カタログとしても、写真集としても楽しめる、現代の『陰影礼賛』の書。



町の灯りを恋ふる頃 WONDERLAND 1970s

大西みつぐ

- ①キンカンパブリッシング
②2025年6月③18.2×25.2cm、
80頁④5,200円⑤発行所

主に1970年代に、浅草、深川などで撮影されたモノクロ写真を集める。当時は「コンボラ写真」とも形容された作風の写真が、繁栄と騒乱が相半ばした当時を物語る。そこに過去の時間への詠嘆と、「恋ふる」現代人の気持ちがある。



一にっぽん列島— いのちの聲

鈴木一雄

- ①風景写真出版②2025年8月
③22.5×28cm、176頁
④4,500円⑤発行所

鳥類、爬虫類、両生類など、私たちの身近な場所で生きている動物を被写体とした写真集。撮影するだけでも大変であるはずの生き物を、これだけ美しい光の中で、全写真ノートのリミシングで、捉えてみせた著者の努力に驚かされる。



発掘写真で巡る日本の鉄道 山陰本線

写真・諸河久、岩堀春夫

- ①フォト・パブリッシング
②2025年8月③25.7×18.2cm、
240頁④3,200円⑤発行所

JRの発足後に進められた合理化によって、幹線というよりもローカル線の集合体に変身してしまった感のある山陰本線の、在りし日の姿を振り返る。本書に登場する車両のリミシングで、捉えてみせたことができない。



歴史の軌跡 平和を求めて

尾辻弥寿雄

- ①現代写真研究所出版局
②2025年8月③25.3×19.2cm、
136頁④3,200円⑤尾辻氏

デモ隊、座り込みをする人々など、エスカレートする戦争に反対する、1970年代、80年代の民衆の姿を記録した写真集。オールモノクロながら、一級の報道写真が並ぶ。まだ私たちが忘れてはならない問題、懸案は数多いはずだ。



越中八尾 おわら風の盆 榎並悦子

- ①クレヴィス②2025年6月
③26.5×19.5cm、160頁
④3,500円⑤榎並氏

富山市八尾町で毎年9月初めに行われる「おわら風の盆」に集う人々の姿を収める。過ぎ行く時を愛しむ人の姿は美しく、そしてどこか切ない。宵闇に響く調べが聞こえてくるかのような、艶やかな写真が並ぶ作品集だ。



Hiroshima Collection 土田ヒロミ

- ①NHK出版②2025年7月
③21×14.9cm、608頁
④7,000円⑤土田氏

原爆投下後の広島から発掘された数多くの「遺品」の写真を収録する。溶解した酒瓶、焼け焦げた女学生の夏服などが、凄惨だったであろう現場を思わせる。著者が「電話帳のように」と注文した書籍の体裁も、本書に重厚さを加えている。



「ヒロシマ・コレクション」 —1945年、夏。

土田ヒロミ

- ①中之島香雪美術館②2025年
6月③42×29.7cm、90頁
④3,000円⑤土田氏

「Hiroshima collection」と同じ被写体を、大型の判型で紹介。大きな写真でしか見えない被写体の質感、圧倒的な迫力を感じ取ることができる。ただ1枚の写真でも、人の心に訴えるものは多い。これが写真の力なのだろう。



—スポーツ報道写真— 水谷章人作品展「HERO」

水谷章人

- ①JCIIフォトサロン
②2025年9月③24×25cm、
31頁④1,500円⑤発行所

2025年9月に千代田区のJCIIフォトサロンで開催された写真展の図録。スポーツ写真として撮影された数多くの中から、各選手の一瞬の表情を抽出している。真剣に競技に立ち向かう人の姿は、これほどまでに美しい。



Ene ku=an i
アイヌ 100 人のいま II
宇井眞紀子

- ①皓星社 ② 2025 年 9 月
③ 23.7 × 19.5cm、128 頁
④ 5,000 円 ⑤発行所

アイヌ 100 人の現在の姿を取め、巻末には被写体となった人たちの、いま言いたいこと一言を並べる。皆の表情はにこやかで、どの写真も明るい雰囲気だが、私たちが考え続けなければいけない問題も少なくないようだ。



月刊「たくさんのふしぎ」通巻 488 号
ニホンカモシカのパール
前川貴行

- ①福音館書店 ② 2025 年 11 月
③ 25 × 19cm、40 頁
④ 736 円 ⑤前川氏

ニホンカモシカをテーマにした写真絵本。子ども向けの編集がなされ、解説文にはルビがふられているが、各写真は強い力で見る者に迫り、残された自然の大切さを訴えてくる。子どもも、大人も、それぞれに感動できるはずだ。



列車で行こう! 最新版
JR 全路線図鑑
改訂第 2 版
櫻井 寛

- ①世界文化社 ② 2025 年 10 月
③ 25.7 × 18.2cm、384 頁
④ 3,600 円 ⑤発行所

現在も稼働する JR の路線について、1 線区ごとに写真数枚を充て、各路線の歴史、特徴、役割を解説する。誰もが知っているようで知らない基本的な情報を改めて学ぶことができる。力作揃いの写真は、見ているだけで楽しい。



がんばれ!
はこねとさんでんしゃ
写真・持田昭俊、文・せきやゆうこ

- ①小峰書店 ② 2025 年 9 月
③ 26.4 × 19cm、33 頁
④ 1,500 円 ⑤持田氏

箱根登山鉄道を被写体にした写真絵本。親子連れのモデルも登場し、フレンドリーな雰囲気、ストーリーが展開する。硬派のファンにとっては、いまやオールドタイマーとなったモハ 1 形・2 形の登場が嬉しいところだろう。



一撃必撮
日常はユーモアで溢れる
島内治彦

- ①きんもくせい書房 ② 2025 年 7 月 ③ 21 × 21cm、158 頁
④ 3,000 円 ⑤島内氏

日常に溢れている、思わずクスッと笑ってしまうシーンを集めた写真集。期せずして起こったトラブルや、小動物が登場するカットが多く、心が和む。それぞれの写真に心発され、自らも立ち上がるフォトグラファーもいるはずだ。



京都パノラマ百景
竹田武史

- ①禅フォトギャラリー
② 2025 年 4 月 ③ 12.5 × 25cm、120 頁 ④ 5,500 円 ⑤竹田氏

モノクロによるパノラマ写真で、京都の町の姿を記録した写真集。表現の手段に敢えてモノクロを選び、敢えてパノラマ写真を選んだところに、古都が湛える精神世界を写し取りたいとする著者の思いが垣間見える。



回
小澤太一

- ① ulus publishing ② 2025 年 10 月 ③ 20 × 29.5cm、144 頁
④ 6,000 円 ⑤発行所

北海道東部を舞台に選び、厳しい自然の中で逞しく生きる小動物や、手付かず自然の姿を被写体として、生命の輪廻に思いを馳せる。ただひとつの事象から導かれる解釈は無限。そんな謎かけが、著者から投げかけられる一冊。



古都の撮り方、歩き方。
原田 寛

- ①日本写真企画 ② 2025 年 3 月
③ 24.7 × 18.2cm、144 頁
④ 1,800 円 ⑤原田氏

鎌倉や京都を撮り続けてきたフォトグラファーによる、古都撮影指南の書。構図、レンズの選び方などの基本も語られているが、各作例は完成度が高く、写真集として楽しむこともできる。撮影に費やした膨大な時間が偲ばれる。



かまくら 四季の花巡り
原田 寛

- ①冬花社 ②2025年4月
③21×15cm、168頁
④1,800円 ⑤原田氏

書籍のタイトルには「花」と謳われているが、本書の真のテーマは鎌倉の空気であるのかもしれない。それほどに空気感と奥行きを感じられる作品が並ぶ。花の乏しい季節の静謐、それもまた魅力的な被写体であることが窺える。



東京ぐるぐる
吉永陽一

- ①ふげん社 ②2025年10月
③21.2×30.4cm、120頁
④6,000円 ⑤発行所

空撮による東京の写真集。変貌が続く東京の「いま」を押さえた写真は貴重な記録となるだろう。鉄道を収めたカットが多く、熱心なファンが存在が想像できるが、細長い被写体の、いつもと違うアングルの写真は、確かに面白い。



鉄道写真
広田尚敬

- ①小学館 ②2025年11月
③36×27.5cm、318頁
④50,000円 ⑤発行所

長く鉄道写真の第一人者の座に君臨してきた著者による渾身の作品集。昭和中期の写真に古き良き時代の鉄道の姿を、現代のデジタル写真に先端の技術を知ることができる。見る者誰もが、自分が好きだった時代を語れる一冊だ。



磯辺海苔男という猫

著者・マリリン、写真・原田佐登美

- ①辰巳出版 ②2025年8月
③14.8×21cm、96頁
④1,400円 ⑤原田氏

猫である。自分勝手極まりないが、しかし、回りにいる人を癒してしまう不思議な動物。本書の主人公もそういう奴だ。そういう猫の魅力が、日々の暮らしの中でピックアップされている。こんな、肩の力が抜けた写真も、とても楽しい。



海のメッセージ
地球・人間・時代
中村卓哉

- ①新日本出版社 ②2025年11月
③21×14.9cm、160頁
④2,600円 ⑤発行所

水中写真による写真集。撮影の舞台が、見て美しい海ばかりでないことが大きな特徴で、お台場の海も登場すれば、沖縄の海も登場する。そういった多様な海の姿を通じて、人間と自然の関わり方を問うのが本書のテーマだ。



CIRCUS
榎本敏雄

- ①用美社 ②2024年6月
③28×21cm、160頁
④4,000円 ⑤榎本氏

サーカスに携わる人の姿を収めた写真集。高度な技に挑む軽業師も、舞台の合間に登場するピエロも、ここでは同等の位置が与えられたスターだ。エンターテインメントに魅せられた人々との、一期一会の出会いがここにある。



北海道 鉄道撮影バイブル
スポットからプランまで徹底解説
福園公嗣

- ①メイツ出版 ②2025年10月
③25.7×18.2cm、128頁
④1,900円 ⑤福園氏

北海道の鉄道を効率良く撮影するためのガイドブック。もっとも代表的な撮影ポイントがチョイスされ、QRコードも添えられているので、撮影地を正確に把握することができる。有名駅弁の紹介ページも楽しい彩りになっている。



シリアの家族
小松由佳

- ①集英社 ②2025年11月
③19.5×14cm、328頁
④2,200円 ⑤発行所

紛争が続き、わが国に情報が届くことも稀なシリア。本書はそのシリアを舞台とし、現地人の視線で実情を伝える。断裂の解釈は人さまざまだろうが、悲しい運命に弄ばれるのは、いつの時代も、もっとも弱い立場の人間なのだろう。



小説 定年したら
やっちゃんえカメラマン

牧島ヒロミツ (ペンネーム 木村小平)

- ①風鈴社 ②2025年12月
- ③21×14.8cm、232頁
- ④2,200円 ⑤牧島氏

定年後にサラリーマンからカメラマンに転身した著者の愉快な体験談。軽いタッチの文章は、瞬く間に読者を引き込む。できるのであれば、迷わず何でもやった方がいい。カメラマンだって、楽しいことも、辛いこともあるのだ。



いつかまた 軽便鉄道
草軽、沼尻、九十九里

広田尚敬

- ①JCII フォトサロン ②2026年1月 ③24×25cm、31頁
- ④1,500円 ⑤発行所

今は無き北関東の軽便鉄道の在りし日の姿。鉄道を利用する人々の姿はつましやかで、そこにも昭和中期という穏やかな時代を見て取れる。2026年1～2月に千代田区のJCII フォトサロンで開催された写真展の図録。

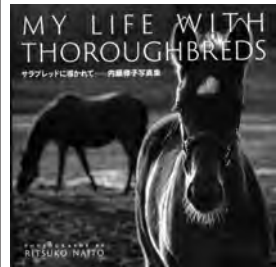


陽をあゆむ

橋本清志

- ①日本写真企画 ②2025年11月
- ③17.5×25.5cm、128頁
- ④3,000円 ⑤橋本氏

広島県の北西部、島根県との県境に位置する安芸太田町に通った著者による写真集。自然と共生し、慎ましく、そして確かな足取りで生きる、この町の人たちの姿を記録する。山間に広がる穏やかな風景と、子どもたちの笑顔が印象的だ。



サラブレッドに導かれて

内藤律子

- ①羅針舎 ②2025年12月
- ③25.7×25.7cm、132頁
- ④4,545円 ⑤内藤氏

サラブレッドを50年間撮り続けてきた著者による、集大成とも呼ぶべき作品集。人と馬の距離が、作品ごとに自在であることも、著者の年季の賜物だろう。「走る芸術品」とも形容されるサラブレッドの息使いに、思いを馳せよう。

寄 贈 図 書

中谷吉隆様

……編集・写真家'74の眼・写真家'74の眼「日本人とは何か」

小平尚典様……4/524

遠藤励様……SHAKE-UP THE OLD FUTURE

功力俊文様……戦後八十年 証言者たち

瀬戸内道達様……ADIEU TOKYO

船尾修様……Occupied Japan——日本の米軍基地

中国写真家協会様……編集・刘铮・中国浙江摄影家文献

……刘宇・永遠の隣人

Fotoskolan STHLM 様……Martina Holmberg・Väsen

……Niklas Storm・In the twilight zone

JCII フォトサロン様……井桜直美・明治の幻燈

「中島待乳の妻・園の幻燈画の世界」

……沢田教一・一報道写真家 沢田教一のまなざし

「戦渦を生きる人々」

……一ノ瀬泰造・一戦場を駆けた写真家 一ノ瀬泰造

「もうみんな家に帰ろー！」

……石黒敬章・一昭和初年の報道写真は語る一

「昭和は遠くなりけり」

東京都写真美術館様……総合開館30周年記念 遠い窓へ

日本の新進作家 vol.22

……総合開館30周年記念 TOP コレクション トランスフィジカル

……ルイジ・ギッリ・総合開館30周年記念 終わらない風景

……ペドロ・コスタ・総合開館30周年記念 インナーヴィジョンズ

ふげん社様……木原千裕・不思議

……佐藤信太郎・都市の相貌

双葉社様……監修・櫻井 寛、作画・はやせ淳・新・駆弁ひとり旅

高知県立美術館様……石元泰博・

高知県立美術館 館蔵品目録 11 石元泰博コレクション (2)

石元泰博・コレクション展 2014-2023

東京展美術協会様……第51回 美の祭典 東京展 図録

日本肖像写真家協会様……人像 2024

日本写真作家協会様……第36回 一般社団法人日本写真作家協会展

日本風景写真協会様・四季のいろ 第9回 日本風景写真協会選抜作品集

二科会写真部様……第73回展 二科会写真部作品集

日本大学芸術学部写真学科様……LOCUS2025

受賞おめでとうございます。今後ますますの活躍をご期待申し上げます。



■ 「DFA Design for Asia Awards Communication Design 部門 Merit Award」 受賞 2025年12月

受賞者：織作峰子（2009年入会）

写真集『光韻 -kouin-』に対して。



■ 「Bird Photographer of the Year Creative Perspectives category」 入選 2025年9月30日

受賞者：篠田岬輝（2023年入会）

作品「Incubation」に対して。



■ 「第7回田淵行男賞写真作品公募 フォトコン賞」 受賞 2025年8月10日

受賞者：武並完治（2019年入会）

作品「ゼフィルスの森 -初夏にきらめく命の躍動-」に対して。



■ 「令和7年度釧路市文化賞」 受賞 2025年10月3日

受賞者：長倉洋海（1984年入会）

NPO法人「アフガニスタン山の学校支援の会」を設立し、アフガニスタンの子どもたちの教育支援を続けられている一方、近年は釧路市に活動拠点を移し、実家の店舗跡を活用して開講した「長倉商店塾」や市内での数々の講演活動により、世界を巡り培ってきた知識と経験を次世代へ伝える活動に積極的に取り組まれるなど、釧路市の文化の発展に多大なる貢献をされたことに対して。



■ 「第5回古典の日文化基金賞」 受賞 2025年9月3日

受賞者：中田 昭（1980年入会）

写真家活動の中で、約30年にわたり「源氏物語」をテーマに、歴史、文学、有職故実の研究をしながら撮影を続け、書籍などへの写真の提供や写真展開催を通じた古典文化の普及と啓発活動を行う。季節の移ろいの中で時空を超えて見える表情を物語に重ねた臨場感あふれる写真を撮り続け、日本のみならず世界への発信も行い、その継承と普及に努めていることに対して。



■ 「2025 フォトシティさがみはら さがみはら写真新人奨励賞」 受章 2025年10月11日

受章者：中西敏貴（2020年入会）

写真集・写真展『Land of Fusion 地と記憶』に対して。



■ 「Cosmos Award 2025 2nd Trimester」 Creative Fashion / Beauty 1位・銀賞受賞 2025年8月

受賞者：早坂華乃（2024年入会）

作品「Weapon of Beauty」に対して。



■ 「紺綬褒章」 受章 2025年10月25日

受賞者：前川貴行（2007年入会）

公益のため多額の私財を寄附したため。



■ 「令和7年度桜内義雄賞」 受賞 2026年1月19日

受賞者：持田昭俊（2001年入会）

聴覚障害を持ちながらもプロの写真家として社会に貢献したことに対して。



■ 「2025年度神戸市文化賞」 受賞 2025年9月24日

受賞者：森井禎紹（1994年入会）

神戸市の文化の発展に大きく貢献したことに対して。



■ 「IPA [International Photography Awards] 2025 Architecture / Aerial / Drone Professional 部門」 Honorable Mention 入選 2025年8月20日

受賞者：吉永陽一（2017年入会）

作品「Train & Plane in Tokyo」に対して。

セミナー研究会レポート

◆ 2025 年度第 1 回技術研究会報告 ◆

この 1 本で撮る - 写真家が語る超広角レンズの魅力 -

2025 年 7 月 25 日 (金) 14:00 ~ 16:30

JCII ビル 6F 会議室及びオンライン 参加数: 37 名

講師: 関一也、山下晃伸 (会員)、桑山輝明 (株式会社シグマ)、城山敦巳 (株式会社タムロン)、田原栄一 (株式会社ケンコー・トキナー)、キムウォンヨン (LK SAMYANG 株式会社)

今回は常に進化を続ける超広角レンズの使用で課題となる湾曲、収差、歪みなどを総合的に考えることが必要となることから制作された写真の評価が高く、機材について多くの執筆を行う会員 2 名に制作の工夫やレンズの魅力を語ってもらい、レンズを取り扱うメーカー 4 社から 2025 年現在イチオシである超広角レンズを紹介してもらい、参加者の仕事や制作に役立てるヒントを見つけてもらうことを目的として講演をお願いした。



関会員からは超広角レンズで苦勞するモデルの立ち位置や風景の映り込みなど、超広角レンズの特徴をいかした表現の難しさとそのなかで生まれる多数の素晴らしい作品を解説し、最後には超広角レンズに対する要望も語られる場面もあった。山下会員からは大学時代から現在まで行っている写真制作の流れから長年にわたって注力しているユニークなオブジェを多く撮影している作品に超広角レンズがどのように導入されていき、どのように魅力が引き出されていたのかを語られていた。

桑山氏はシグマのレンズ開発の始まりから現在注目されている超巨大径超広角レンズ 14mm F1.4 DG DN、魚眼レンズ 15mm F1.4 DG DN の仕様解説と圧倒的な表現力、描写性能、操作性などについて紹介した。

城山氏はタムロンのレンズ開発の始まりから 7 月の始めに 16-30mm F/2.8 Di III VXD G2 が発表されたばかりということでコンパクトな設計、高速で正確な AF、美しい画質とボケなどについて紹介した。

キム氏は LK SAMYANG とシュナイダーとで共同開発された 14-24mm F2.8 が 5 月に発売されたばかりということでその先進的な光学設計により生まれた、シャープな描写や高画質について紹介した。

田原氏はキム氏が紹介した LK SAMYANG から発売されている 14-24mm F2.8 についての補足やトキナーから発売されている APS サイズをいかし作られた 11-18mm F2.8、ツァイスから発売されている独特な形状をもつ Batis 18mm F2.8、Batis 25mm F2 などを紹介した。

またレンズに触れるタッチアンドトライも行い、参加者からは技

術研究会で話題の出た制作方法の苦勞や最新の技術で開発されたレンズに驚きをもつ言葉などが多く見受けられた。(抜粋)

(記/山下晃伸、撮影/齊藤小弥太)

◆ 2025 年度第 2 回技術研究会報告 ◆

今から始める Drone 空撮

2025 年 12 月 5 日 (金) 14:00 ~ 16:30

JCII ビル 6 階会議室及びオンライン 参加数: 65 名

講師: 林 明輝 (会員)、小森光幸 (DJI JAPAN 株式会社)

今回は「今から始める Drone 空撮」というテーマで、前半では林 会員が講師として、Drone 空撮をどのように行っているのか、Drone 空撮の観点と地上での撮影と異なるポイントなどを事例と一緒に講演した。また各所への飛行申請をどのように実施しているのか、役所などとのやり取りも具体的に説明した。さらに現像ソフトを使った写真の解説や、写真だけでなく動画を交えながら離発着時の注意事項の解説も行い、参加者は講演を通して、Drone ならではの撮影プロセスや画角に驚いている様子だった。

後半は DJI JAPAN ㈱の小森氏が Drone の操作方法をシミュレーターで紹介し、会場では実際の機体を使ったデモフライトも行った。飛行シミュレーターでは基本的な Drone の動き、カメラの動かし方、RTH 機能 (Drone を自動で離陸地点まで戻す機能) などを説明した。特に RTH 機能では、Drone が障害物を自動的によけながら離陸地点まで戻る動画を紹介し、参加者はその機能性の高さに驚いているようだった。またデモフライトでは、小型 Drone を参加者の上空へ飛ばし、手のひらの上に着陸させるなど、参加者を巻き込んだ形での実演が行われた。また市販されている Drone 機体の違いや選び方について解説された。参加者は自身が買う場合にどの機体がマッチしているかを考えているようだった。

質疑応答では、参加者から空撮を始めるにあたって、初めて機体を購入してから飛ばすまでのプロセスについて、特に免許や法規制に関する質問があった。小森氏より Drone を飛ばすことに免許が不要であること、機体登録が必要であること、実際に飛行させる際には各所への連絡・確認が必要であることなど、初飛行に向けた具体的な解説があり、参加者はメモを取りながら熱心に聴講していた。



講師による一方的な講演ではなく、参加者が機体を見ながら、講師と近い距離で話を聞いて質問できたことで、Drone 空撮を始めるにあたっての不安を解消することができたようだ。研究会終了後には、講師の林氏、小森氏のもとへ参加者が集まり、会場の時間ぎりぎりまで話を聞いている姿が見られた。(抜粋)

(記/篠田岬輝、撮影/齊藤小弥太)

RICOH GR シリーズの魅力を満喫できるスペース

「GR SPACE TOKYO」に行ってみた！

柴田 誠(JPS 会員)

RICOH GR シリーズのコンセプトや世界観を施した空間「GR SPACE TOKYO」が2024年8月、東京・原宿にオープンした。写真やスナップの魅力をより感じることができ、写真を観る楽しみ、撮影する楽しみを体験できる、写真の可能性を広げていくことを目指したコミュニケーションスペースだ。オープンから1年が経った「GR SPACE TOKYO」を訪れてみた。

ギャラリーでありショールームであり、ブックカフェでもあるコミュニケーションスペース

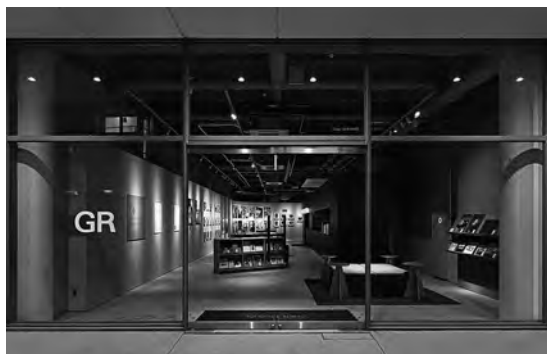
「GR SPACE TOKYO」は原宿と渋谷の中間あたり、明治通りから一歩入ったところにある。ガラス張りの外観は、コンセプトショップのようにもカフェのようにも見える。外国人観光客の多いエリアということもあって、海外からのお客さんは来場者の2～3割ほど。

ソファと書棚が並んでいるブックカフェエリアを抜けて奥に進むとGRシリーズがカウンターにずらりと並んでいる。さらにGRユーザーにとって嬉しいのは、オンラインショップでしか手に入らない機種やアクセサリ一類を自由に試することができることだろう。

奥に向かってラウンドしている壁面は、作品の展示エリア。スペース内の写真集は写真集専門店「book obscura(ブックオブスキュラ)」のチョイスによるもの。展示作品に関連した書籍などは購入することもできる。

ちなみにテーブルやソファ、書棚などはGRの世界観に合わせて、すべてオリジナルで製作されたものだ。

GRのさまざまな機能にフォーカスした「GR Lesson」やトークイベントなども不定期で開催されて



GR SPACE TOKYO

住所：東京都渋谷区神宮前6丁目16-19 原宿 WAT ビル 102

電話番号：0570-081996(ナビダイヤル)

営業時間：11時30分～19時00分

カフェメニューラストオーダー：18時30分

休館日：火・水・祝日およびその他指定休館日

いるのも嬉しいポイント。GRを深く知りたいという人にはもちろん、ゆったりと写真の世界に浸りたいという人にとっても、落ち着ける空間といえるだろう。オープンから1年を経て、「GR SPACE TOKYO」は何度も訪れたい注目のスポットになっていた。



最新のGR IVをはじめ、実機を手にして操作感をしっかり確かめることができる。



GR IVをはじめとする各機種の抽選販売はGR SPACE TOKYOでも受け付けている。



壁面には歴代のGRシリーズを展示したコーナーが設けられている。



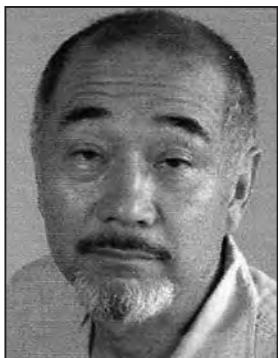
カウンター下の引き出しの中のアクセサリ一類は自由に試することができる。



展示されている作品はもちろん、コーヒーを飲みながら写真集も楽しめる。



こだわりのコーヒーや季節に応じた飲み物を提供している。



本橋 成一 名誉会員

2025年12月20日、老衰のため逝去。85歳。(1969年入会)
1940年東京生まれ。1963年自由学園卒業、東京総合写真専門学校入学。1960年代から写真家としての本格的な活動を始め、炭鉱や魚河岸、サーカス、屠場など市井の人びとをテーマにした作品を多く残す。また1998年チェルノブイリ原発事故の被災地で暮らす人びとを記録する「ナージャの村」より映画監督としてのキャリアをスタート。
こうした功績により2025年に名誉会員に推挙されました。
謹んでご冥福をお祈り申し上げます。

本橋成一さんの逝去を悼んで

野町和嘉

本橋成一さんが亡くなられた。

炭鉱労働者に肉薄した「炭鉱(ヤマ)」で1968年に太陽賞を受賞し、ドキュメンタリー写真家としての地歩を築いて以降、本橋さんは、穏やかで確信に満ちた独特の眼差しで、つねに市井の人々と向き合ってきた。

黙々と生きる人々と正面から向き合い、深みのあるモノクロームで表現する、その一貫した姿勢は、 Cholnoyev (チェルノブイリ) 原発事故に見舞われた村人たちとの向き合い方においても揺らぐことはなかった。繰り返し現地を訪れ、先祖伝来の土地に根を下ろして生きる人々の暮らしに寄り添い、信頼を得て、信仰に裏打ちされた質素で穏やかな日々を、慈愛に満ちた眼差しで撮り続けたのである。

Cholnoyev取材を契機にドキュメンタリー映画の制作へと踏み込んだ本橋さんは、「ナージャの村」で初監督を務めた。その後も「アレクセイと泉」をはじめ、いずれも人々の生に静かに寄り添う姿勢を貫き国内外で高い評価を受け、作品群は数々の国際映画祭で上映・受賞を重ねていった。

また2003年には映画館「ボレボレ東中野」を立ち上げ、その運営に深く関わっていく。一貫してドキュメンタリー作品を上映するこのミニシアターは、いまや東中野の文化拠点として確固たる存在となり、熱烈な観客に支えられている。

本橋さんの拠点は中野区東中野で、私は神田川を挟んだ新宿区に住んでいる。近所という縁もあり、2022年に亡くなった田沼武能さんも東中野在住だったことから、本橋さんの呼びかけで「町内会」と称する気の置けない飲み会が始まったのは十数年前のことだった。ボレボレ東中野そばの居酒屋2階に、私たち夫婦と、元『アサヒカメラ』編集長・岩田一平さん、ときには中村征夫さん、大石芳野さんや公文健太郎さんが集まり、情報交換とも雑談ともつかぬ時間を重ねた。

長野県茅野との二拠点暮らしだった本橋さんの茅野滞在が多くなり、コロナ禍、そして田沼さんの逝去を経て、その集いは自然と途絶えてしまったが、本橋さんの思いが込められた「ボレボレ東中野」は、これからも多くのの人々に支えられ、生き続けていくに違いない。

本橋成一さんのご冥福を心よりお祈りいたします。 合掌



菊地 信夫 正会員

2025年7月7日、心不全のため逝去。77歳。
謹んでご冥福をお祈り申し上げます。(1978年入会)



山口 益路 正会員

2025年7月9日、急性骨髄性白血病のため逝去。69歳。
謹んでご冥福をお祈り申し上げます。(1986年入会)



岡 成司 正会員

2025年11月25日、貧血のため逝去。89歳。
謹んでご冥福をお祈り申し上げます。(1968年入会)



木村 信郎 正会員

2025年11月26日、多臓器不全のため逝去。76歳。
謹んでご冥福をお祈り申し上げます。(1976年入会)



羽賀 康夫 正会員

2026年1月13日、老衰のため逝去。95歳。
謹んでご冥福をお祈り申し上げます。(1965年入会)

【出版編集委員会からのお知らせ】

現在のスタイルでの『会報』の発行は今号で終了となります。次号(2026年9月発行予定)から新しいスタイルでの『会報』の発行を企画していますのでご期待ください。

写真解説(表紙、表4)

Traveling Clown(表紙写真)——榎本敏雄

サーカスの撮影に十年の歳月をかけ日本各地の会場を巡りかけ取材した。団員と食堂で食事を共にし大風呂にも入れてもらいながら関係を築いた。人との信頼があってこそ自然な姿が写り、良い写真につながる。時間を共有することで距離は縮まり、カメラの存在が消えていった。舞台裏の日常に寄り添う視線が作品の核となった。その積み重ねの先に初めてサーカス村の外での撮影を許され、作品「Traveling Clown」が生まれた。写真集・写真展「circus」



白嶺(はくれい)と姉妹(表4写真)——池畑直樹

1999年末から2000年始めにかけ3週間の1度目のネパール撮影に赴いた。この時の目標は「白嶺のヒマラヤを背にしたポートレイトを撮る」であった。高度順応もあり1週間歩いて標高4500mの村へ辿り着く。その村で出会った姉妹と片言の英語で心を通わせ撮影に成功。ネパールの子供達との出会いは私の心を揺さぶり、その後のアジア撮影と写真家としての原点となった。本作はネパール撮影を象徴する一枚である。写真展「まなざしの大地～アジアを生きる声なき詩～」



経過報告(2025年4月～2025年10月)

- ◎4月25日～5月3日 KG+公益社団法人日本写真家協会選抜展「MIX UP」AMS写真館ギャラリー1
- ◎5月17日～25日 第50回2025JPS展(東京) 東京都写真美術館 BIF 展示室 入場数3806名 ○5月17日表彰式、代表委任2名、議決権行使書606名、計685名、外部理事5名、外部監事2名、関係者3名、名誉会員4名、賛助会員14社17名 ○決議事項:第1号議案:2024(令和6)年度事業報告書及び決算報告書承認の件、第2号議案:理事及び監事の任期満了に伴う改選の件、第3号議案:名誉会員推挙承認の件 ○報告事項:「J2025(令和7)年度事業計画書」の件、2「2025(令和7)年度予算書」の件、3.第51回「日本写真家協会賞」の件、4.会費滞納による正会員資格の喪失手続きの件、5.その他
- ◎5月25日 著作権セミナー PM11:00～2:30 東京都写真美術館1Fホール 参加数100名 ○2025「知っておきたい写真著作権&肖像権」
- ◎6月14日 著作権セミナー PM2:00～4:00 大阪産業創造館6F会議室A・B 参加数59名 ○2025「知っておきたい写真著作権&肖像権」
- ◎6月24日 表敬訪問 PM5:00～6:00 JPS会議室 12名 アジア写真芸術連盟
- ◎7月1日～6日 第50回2025JPS展(関西) 京都市美術館別館2F 入場数1005名 ○7月5日作品講演会、記念講演会「写真家 織作峰子の仕事」
- ◎7月15日～21日 第50回2025JPS展(名古屋) 愛知県美術館ギャラリーJ(8F) 入場数1,130名 ○7月16日セミナー「いまさら聞けないデジタルフォトの基礎知識」、7月19日イベント「会員写真家による作品講演会」、7月20日作品講演会、記念講演会「素敵な風景写真の表現術」
- ◎7月17日～23日 2025年新入会員展(東京) アイデムフォトギャラリー

- 「シリウス」 出展者18名、作品数54点、入場数547名 ○「私の仕事」
- ◎7月19日 著作権セミナー PM2:00～4:00 愛知芸術文化センターアートスペースA 参加数46名 ○2025「知っておきたい写真著作権&肖像権」
- ◎7月25日 第1回技術研究会 PM2:00～4:30 JCIIビル会議室/オンライン 参加数24名、オンライン参加数13名 ○この1本で撮る・写真家が語る超広角レンズの魅力
- ◎7月31日～8月20日 写真展「写真フィルムからよみがえる原爆の記録と記憶」 アイデムフォトギャラリー「シリウス」 ○8月2日記念講演会「写真原板が社会に与えた影響について、写真史・博物館それぞれの視点」、8月9日記念講演会「写真家・土田ヒロミが50年間向き合ってきた「ヒロシマ」」
- ◎8月1日 JPSピアパーティ PM6:30～8:30 「ブッフ&貸切パーティー」Y's(ワイズ)新宿エステック情報ビル/パーティースペース 参加数105名
- ◎8月22日 「笹本恒子写真賞」選考会 PM2:00～5:00 JCIIビル会議室8名 ○選考・佐伯剛、野町和嘉、熊切大輔、推薦候補者・30名、第8回「笹本恒子写真賞」・西澤 丞
- ◎8月22日～28日 2025年新入会員展(大阪) 富士フィルムフォトサロン大阪 出展者18名、作品数54点、入場数3,466名 ○「私の仕事」
- ◎8月25日 2025年第20回名取洋之助写真賞作品選考会 PM1:30～4:00 JCIIビル会議室 10名 ○選考・山田健太、清水哲朗、熊切大輔、応募者・18名19点、名取洋之助写真賞・板谷めぐみ「京大吉田寮～記憶と想いの結節点～」、奨励賞・木村孝「アマター「永遠の街」の肖像」
- ◎9月1日 賛助会員との懇談会 PM5:00～7:30 JCIIビル会議室 賛助会員22社39名、JPS22名 ○The Presentation/参加会員20名
- ◎9月18日 表敬訪問 AM10:30～11:30 JPS会議室 15名 ○中国写真家協会代表团
- ◎9月28日 第7回「おやこ写真教室」 AM10:00～15:00 女川町まちなか交流館 参加数7組16名
- ◎10月14日～24日 ストックホルム写真学校インターンシップ受け入れ 学生6名
- ◎10月26日 2026JPS展関連イベント PM12:00～4:30 JCIIビル会議室 参加数25名 ○JPS会員写真家による秋の作品大講演会

編集後記

◎1997年JPSに入会、師匠の故長友健二から「会報編集をしろ」言われて出版広報委員会に属しました。広告写真を生業としていたので、編集作業の右も左も全くわからないで委員生活開始。気が付けば29年。その間お世話になった故木村恵一さん、今もお世話になっている小池さん、影の編集長高田前事務局長、本当にありがとうございます。現在のスタイルの「会報」はこの号が最後です。秋には、新しいスタイルになります。(伏見)

◎現在の『会報』のスタイルは2002年7月発行の120号からで、当時委員長だった私と故木村恵一理事とで立案し、それまでの縦書き右開きから横書き左開きの紙面に変更しました。以来24年間、同じスタイルを続けてきましたが、今号で最後となります。皆様の「会報」へのご支援、ありがとうございます。次号は新しいスタイルの紙面となりますのでご期待

ください。(小池)

◎会報編集に携わり始めた頃、保育園に通っていた息子が大学受験でした。家族も健康管理で外出時はマスク着用、正月旅行もなし。最近の願書は自宅でプリントアウトを持参とのこと。解答は相変わらず鉛筆と消しゴムで、赤本も書籍版で購入していた。本号発行時には、可否は如何に。(小野)

◎いよいよカメラグランプリ2026の選考&投票が始まります。それと並行して2026TIPA World Awardsの投票も行われます。2つの賞の運営と選考に関わって感じるのは、日本のカメラ産業のレベルの高さであり製品のクオリティーの高さです。今年ほどの機種が受賞するのでしょうか。(柴田)

◎只今ミラノ・コルティナ五輪が開催中で、スポーツといえは見る専門の僕は時差と戦い続ける毎日です。今号ではスポーツの分野でも活躍された中谷隆先生にお話を伺いましたが、現場で格闘するカメ

ランの方々にもエールを送らずにはいられません。(鹿野)

◎今シーズンは移動やイベントで大雪に遭遇することが多い。自分なりに対策して出かけても、想定を上回る出来事が頻発。雪国の方たちの大変さが身に染みる。そして最近、都内で雪に足を奪われて転倒。子どもの頃に慣れ親しんだ雪のある暮らしから離れ、もう40年近くようやく都会の人になれたかも。←たぶん加齢(桃井)

◎北極星はこぐま座のポラリスという星で、地球の地軸のちょうど延長上にある。ところが、地球の地軸は約2万年周期でコマのような首振りをしているそうで、長い年月とともに北極星と呼ばれる星も変わることになるそうだ。小学生の娘から教えられた。地球でさえ軸がぶれるのを知って、少しほっとした。(山縣)

日本写真家協会会報 第185号(年2回発行) 2026年3月10日 印刷・発行 ©編集・発行人 熊切大輔

URL <https://www.jps.gr.jp/> Email info@jps.gr.jp 本誌掲載記事・写真の無断転載を禁じます

出版編集委員 伏見行介(専務理事)、小池良幸(担当常務理事)、小野吉彦(委員長)、柴田 誠(副委員長)、鹿野貴司、桃井一至、山縣 勉

発行所 公益社団法人日本写真家協会(JPS)

〒102-0082 東京都千代田区一番町25番地 JCIIビル303 電話 03(3265)7451(代表) FAX 03(3265)7460

印刷所 株式会社光邦

〒102-0072 東京都千代田区飯田橋3丁目11番18号 飯田橋 MKビル 電話 03(3265)0611(代表)



THE BF CAMERA
MADE IN AIZU, JAPAN

SIGMA

第20回「名取洋之助写真賞」受賞作品 写真展

【東京展】2026年1月16日(金)～1月22日(木)

富士フィルムフォトサロン 東京

【大阪展】2026年1月30日(金)～2月5日(木)

富士フィルムフォトサロン 大阪

第20回「名取洋之助写真賞」受賞作品写真展(主催：公益社団法人日本写真家協会)が、東京と大阪の富士フィルムフォトサロンで開催した。「名取洋之助写真賞」を受賞した板谷めぐみさん、「名取洋之助写真賞奨励賞」を受賞した木村孝さんにそれぞれお話を伺った。

(記／出版編集委員：柴田 誠)

◆名取洋之助写真賞：板谷めぐみさん 「京大吉田寮～記憶と想起の結節点～」

京都大学の吉田寮を撮影するきっかけは、2年前に友人のバックパッカーが300円で泊まれる吉田寮の宿泊制度を利用することになったことからだという。そこで出会った寮生たちに興味を持ち、吉田寮の裁判を傍聴しに行ったことで、ますます関心を持つようになった。自身も戦争についての研究をしたことがあったことも影響している。当時社会人だった板谷さんは大学院を受験して京大生となり、吉田寮の寮生として闘う寮生の姿を内側から撮り続けてきた。

もともと「名取洋之助写真賞」を目指して撮影していたわけではないそうだが、何かあったときに写真を提供したり発表できるような準備をずっとしていたのだという。「写っている人たちがちょっとでも良くなるような戦力になりたい」という思いを抱いていたところにたまたま「名取洋之助写真賞」があった。

その締め切りが、ひと月後に和解協議が開始されるというタイミングだったので、その時点でいったんまとめて応募することにしたというのが応募の経緯だそ

第20回「名取洋之助写真賞」を受賞した板谷めぐみさん。富士フィルムフォトサロン東京にて撮影・齋藤小弥太



うだ。寮生となって1年以上撮り続けていたので、60点までは絞り込めたものの、応募のためにさらに30点に絞るのには苦労したという。

未発表の写真がまだまだあるので、第2弾の写真展もやりたいし写真集にもまとめてみたいと意欲的だ。「女子の寮生は5:1と比率的には少ないですが、私の強みとして女子寮生をかなり撮らせてもらったので、それも発表したいです。寮猫の生活も撮っています」と板谷さん。

吉田寮の行く末が決まるまで、もうしばらく撮影を続けたいと語ってくれた。

◆名取洋之助写真賞奨励賞：木村 孝さん 「アマター『永遠の街』の肖像」

「今回の受賞作品は、タイにある工業団地をテーマに撮ったもので、「人と部屋」を一つのキーワードとしてまとめたものです。最初はタイの工業地帯で何もない場所に街が出来上がっていくランドスケープ(風景)のシリーズを撮っていました。このシリーズは人と部屋をテーマにした二部作目なんです」と木村さん。

最初のシリーズは、この場所についてはもちろん、タイについてもあまり詳しく知らない状況で撮り始めたのだという。今回の人と部屋の作品を撮る頃には、街に知人もでき始めた。まだ外部からの目線ではあるものの、プライベートルームを撮影して、個人のストーリーに迫ったものになっている。

変わり目となったのはコロナ禍だ。コロナ後に訪れた団地ではタイ人労働者が少なくなって、代わりにミャンマー人やカンボジア人、ラオス人がものすごく増えていた。タイ人の賃金上昇や製造業離れといった国内事情だけでなく、ミャンマーの軍事クーデターといったことも影響して、彼らがなぜそこにいるのかという理由には国際的な意味だったり、現代のアジア事情という要素が絡んでいると感じるようになったとい

第20回「名取洋之助写真賞奨励賞」を受賞した木村 孝さん。富士フィルムフォトサロン大阪にて撮影・柴田明蘭



う。

現在、3部作目を撮り始めたという木村さん。これまでの撮影で知り合った人々に寄り添って、なぜそこにいるのかやその場所の歴史を掘り下げていきたいと語る。

今回の応募には3部作目が間に合わなかったのだそうで、自身の中ではそれを完成させたいなという思いが強い。「1作目、2作目も継続しながら3作目の撮影を行っています。ここで一区切りというのではなくこれも続けていこうと思っています」と語る。木村さんの視点で捉えたタイ3部作をまとめて見る日が来る日を心待ちにしたい。



Message Board



◆西野嘉憲 (2010年入会)

2025年の秋はクマの出没と被害が頻発しました。私が取材している岐阜県飛騨市の熊猟師に聞くと、山の縄張りから追い出されたクマが人里に押し寄せているとのこと。原因は、高い技量が必要な熊猟を行う猟師が高齢化で減少し、クマの数が増えたためと言います。2022年に上梓した熊猟の写真集『熊を撃つ』が、2025年9月にペーパーバック版として復刊しました。Amazonまたは立夏書房のECサイトで取り扱っています。

(沖縄県石垣市在住)



◆吉永陽一 (2017年入会)

私の初の写真集が刊行されました！タイトルは『東京ぐるぐる』(ふげん社刊)です。空撮の世界へ入ってから約二十年、本格的に鉄道の空撮を捉えながら約十五年、やっとのことで名刺代わりとなる写真集ができました。私は東京をぐるぐる廻るように空撮しており、また柔らかい文字が良いなど感じていたので、なかなか秀逸なタイトルが出来ました。ご興味ありましたら、ふげん社をはじめ各通販サイト、書泉や丸善ジュンク堂なども取り扱っています！

(東京都渋谷区在住)



◆池田 勉 (2012年入会)

第40回池田勉写真展「仏道の行者」開催
2026年3月3日から8日までの会期中、長崎県美術館の会場で首記写真展を開催した。タイトルのロングテーマとして取り組んでいる「神仏の修験」については、昭和52(1977)年以来48年が経ちました。この間、木曾御岳の峰入行、小浜市の杵鉢寒行、四国巡礼、九州各地の峰入行、火渡ノ行、滝ノ行、水被寒行、座禅ノ行などを幾度も幾度も繰り返しながら、時には自分自身の修行も兼ねて、行者と共に行動しながら撮影してきました。今回、それらの作品の中から7種類の行に種分した106点を展示して、「自身が自らに過酷な試練を与



えて限りなく真理を求める行者像」を描き上げました。

(長崎県西彼杵郡在住)

◆高橋智史 (2022年入会)

2025年7月24日からタイとカンボジアの国境紛争が勃発し、取材に向かった。双方で四十人以上が死亡、三十万人が国内避難民となる事態を生んだ。そして、九十万人にのぼるカンボジア人出稼ぎ労働者がタイを脱出するために国境ゲートに押し寄せた。家財道具を抱えた延々と続くカンボジアの人々の姿は、現地報道で「エクソダス」と表現される大量出国の光景だった。戦禍に翻弄され、日常を奪われた人々の願いを今後も伝えたい。

(神奈川県横浜市在住)



◆大岩友理 (2023年入会)

2026年の午年、愛知県・豊橋総合動植物公園(のんほいパーク)お正月干支イベントにて、写真展「ひだまり牧場・馬たちの日常」を1月2日~31日開催。園内のひだまり牧場に暮らす馬たちに焦点をあて、普段は見ることのできないバックヤードの様子も取材し、来園者の皆様に楽しんでいただける工夫をしました。日本の干支文化を通じて、馬という動物や命の大切さを感じていただける良い機会になったと考えています。

(愛知県名古屋市中区在住)



◆伊藤孝司 (1896年入会)

11か月間も寝食を惜しんで作業をし、2025年は2冊の本を出した。『原爆棄民 韓国・朝鮮人被爆者の証言 [増補改訂版]』(論創社)と『サラン 波乱の海を越えて 韓国・朝鮮で生きる日本人女性たちの物語』(風媒社)だ。80年代後半から、アジア太平洋戦争などでの被害者を約八百人取材しており、それを順にまとめてきた。「撮影した写真・ビデオと取材データは、すぐに整理しないとゴミになる」と思い、厳密に管理してきました。今回、それが実につながっている。し



ばらくはゆっくりしようと思っていたが、2026年に出版したいと2冊の依頼がきた。ドキュメンタリーは、過去の仕事で大きな財産になる。

(三重県桑名市在住)

◆諸河 久 (1982年入会)

高校時代に親しんだ都電と街の写真撮影は私にとってかけがえのない記録となった。都電撮影に熱中した1960年代から六十余年を経た昨年、都電が走った東京の街並みと都電が消えた現状を新旧対比して、12か月のカレンダーとして刊行する企画を依頼された。都電の新旧対比撮影はJPSに入会当時に、1960年代から二十年を経た定点撮影写真集『都電の消えた街(下町編・山手編)』として上梓している。それ以来、新旧対比の撮影術を持続してきたが、今回撮影現場に足を運ぶと、暦の「還暦」にあたる六十年余の歳月の流れに東京の街は凄まじい変貌を遂げていた。

私事だが、当時16歳のカメラ小僧が「喜寿」を越える後期高齢者カメラマンに変身している現実、歳月の流れの恐ろしさと写真は記録であることの重要性を再認識させられた。

(東京都中央区在住)



◆尾辻弥寿雄 (1977年入会)

写真集『歴史の軌跡 平和を求めて』のタイトル考

2025年8月に写真集『歴史の軌跡 平和を求めて』を現代写真研究所出版局より発行した。戦後80年、日本人の心に「二度と戦争を起こさない」という強い思いが根付いている。しかし世界では「武力こそが解決」という風潮が席卷している。だからこそ、80年間平和を希求し守ってきた日本国民の記録を残すことは、重要であると痛感した。

「1972年・横浜・村雨橋事件」と「1982年・NY100万大行動」の出来事を歴史という時間軸で俯瞰すると、十年間という時間が消え同列に並ぶことに気がついた。「歴史の軌跡 平和を求めて」というタイトルである。大仰なタイトルだけに、1章「1972年 横浜・村雨橋事件」は、ベトナム戦争と米軍戦車移送反対



の行動を起こした市民の「戦車を止める」をキャッチにし、2章「1982年反核・ニューヨーク100万人行動とその後」は被爆者の願いである折り鶴を正面に出した「NYに折り鶴が舞う」とした。(神奈川県横浜市在住)

◆榎並悦子 (1994年入会)

この度、写真集『越中八尾おわら風の盆』を上梓することができました。富山市八尾町では毎年9月1日から3日にかけて、農作物が風害に遭わないよう風の鎮めを願い、五穀豊饒を祈って「おわら風の盆」が行われます。江戸中期から三百年以上続くこの行事では、越中おわら節の旋律に合わせ、編笠を被った男女が踊り、坂の町を流し歩きます。



取材で初めて八尾を訪れたとき、その哀調を帯びた音色や踊りが町全体を包み込む情景に深く心を奪われました。以来、季節が巡るたびに足を運び、気がつけば二十年以上、この行事を撮影してきました。本書を通して「風の盆」が育んできた時間の深みや美しさ、魅力が多くの方の心にそと届くことを願っています。(東京都新宿区在住)

◆櫻井寛 (1992年入会)

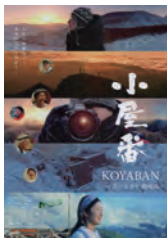
『列車で行こう!「JR+私鉄」観光列車大図鑑』を上梓しました。本書には全国各地を走る163の観光列車を収録しています。163種の観光列車全てに乗り撮影したわけですが、これほど多くの「観光列車」が走っている日本の鉄道の素晴らしさを改めて感じることができました。同時に多くの「観光列車」の舞台はローカル線であることを知りました。ローカル線の赤字を少しでも減らすために頑張っているわけです。ところが、赤字ローカル線は毎年のように廃止されています。国鉄からJRに移行し39年経ちますが、この間に77路線2196kmが廃止されてしまいました。鉄道が廃止されれば、どんな魅力的な「観光列車」も走ることができません。赤字ローカル線の廃止に私は断固反対します。(東京都稲城市在住)



◆菊池哲男 (2007年入会)

2025年3月のTBSドキュメンタリー映画祭で好評を博した映画「小屋番 八ヶ岳に生きる」が1月9日より「小屋番 八ヶ岳に生きる 劇場版」となって全国50館でロードショーにな

りました。私は山岳写真家として山小屋から山小屋を繋ぐストーリーテラー役を演じ、様々なシチュエーションでの撮影シーンやインタビューに加え、今まで八ヶ岳で撮り続けてきた山岳作品や小屋番たちのスナップ作品を多数提供しています。ぜひ大きなスクリーンで雄大な八ヶ岳の風景とそこに生きる小屋番たちの物語をご覧くださいと嬉しいです。(東京都足立区在住)



◆原田寛 (1996年入会)

首都圏から1時間余りの場所に立地する古都鎌倉。小学生の遠足から、高齢者の散策まで、幅広い年代が鎌倉を訪れ、最近では外国人の姿も数多く見かける。そんな鎌倉のガイド本は数多く出版されているが、花名所のガイド本となると、意外に数少ない。正確な資料がないこと、花や木は枯れたり花付きが悪くなるなどの変化が激しく、情報の更新が欠かせない。自著を振り返ってみても、前著の発刊時には健在だった鶴岡八幡宮の大イチョウでさえ倒伏してしまい、今は見られない。



本書はこのような時代の変化に対応した最新の花情報に加えて、最近人気の夜間ライトアップも紹介している。一般来訪者の花散策にも、花撮影にも絶好。最近ではスマートフォンでの撮影者も激増している。そんな人にも魅力的な花の名所案内として活用していただければと思っている。(神奈川県鎌倉市在住)

◆増田雄彦 (2012年入会)

増田雄彦写真展「和醸—WAJO—」信州上諏訪にあるいくつかの酒蔵の中で最も小さな酒蔵「酒ぬのや本金酒造」の創業は1756年(宝暦6年)に遡る。当時と変わらぬ手作業による酒造りは寒い季節だけで、麹菌という生き物を相手にするこの仕事ではタイミングが重要となる。杜氏と蔵人たちが息を合わせ、最適なタイミングで工程を進めて最良の酒を醸し出すのだ。その姿をファインダー越しに覗いているうちに「和醸良酒(和は良い酒を醸す)」という言葉が何度も頭に浮かんだ。米粒が日本酒に変わっていく様子と機敏な蔵人た



ちの姿を記録するべく酒蔵に通い、一通りの工程を記録させてもらった。期間:2026年4月26日(木)~5月13日(水)午前10:00~午後6:00、最終日午後3:00まで。日曜、4/30(木)~5/6(水)休館、入場無料。会場:アイデムフォトギャラリー「シリウス」(東京都目黒区在住)

◆持田昭俊 (2001年入会)

『がんばれ!はこねとぞんでんしゃ』は構想に1年、撮影に1年もの歳月をかけて完成させた写真絵本です。箱根登山電車は開業1919年!3か所のスイッチバックと12か所のトンネル、四季折々の季節と見どころたくさん!百年以上前に作られた電車の工夫と、いまでも大事に使い続ける様子を紹介しています。特に車輪とレールの間に水をまくタイミングは何度も撮り直した苦心作です。せきやゆうこ氏が文章を、私が写真を担当しました。対象年齢は5・6歳ですが、巻末では箱根登山電車の特徴についてイラストとともに紹介し、大人でも楽しめます。レトロ車両100形が2028年1月をもって引退が決まっており、手元におきたい1冊です。B5判/33ページ。(東京都葛飾区在住)



◆内藤律子 (1981年入会)

『サラブレッドに導かれて』は2011年の『白の時間』以来、久しぶりの私の8冊目の写真集になります。これまでの写真集に使っていない写真を中心にまとめてみました。今年は午年でもあり、サラブレッドを追いかけて約50年、私にとっても思い入れの強いものとなりました。初めは種牡馬や若駒達の荒々しくも逞しい姿に魅了されました。しかし日高にどっぷり浸かるようになり、子馬の成長を見る楽しみを知りました。日高の四季折々の美しい自然を背景に、子馬達の表情豊かで、愛らしくも、魅力たっぷりの姿ご覧下さい。思わず抱きめたくなるような、馬は勿論、動物好きのための写真集になっていると思います。(北海道浦河郡在住)



Canon

make it possible with canon

5



写真に限界はない。

動画には可能性しか見えない。

映像表現に、双璧の力を。

道なき未知を切り拓く、

EOS R5 Mark II。

「私」が知らない「私」の新境地へ導く。

前人未踏の私へ。

EOS R5 Mark II

110
million
EOS

170
million
RF/EF

EOSは2023年3月に累計生産台数1億1,000万台^{*1}、交換レンズRF/EFレンズシリーズ^{*2}は2025年10月に累計生産本数1億7,000万本を達成しました。
※1 銀塩(フィルム)とデジタルの双方を合わせた累計生産台数。映像制作用のシネマカメラを含む。※2 EFレンズ、EF-Sレンズ、RFレンズ、RF-Sレンズ、EF-Mレンズ、EFシネマレンズ、エクステンダーを含む。2025年10月21日時点。



© キヤノン EOS R5 Mark II ホームページ
canon.jp/eos-r5mk2

キヤノンマーケティングジャパン株式会社

TAMRON

Focus on the Future

25-200mm F/2.8-5.6 Di III VXD G2 (Model A075)

ソニー Eマウント用

F2.8スタート、
進化した
高倍率ズーム。



NEW

25-200_{mm} F2.8-5.6 G2

for full-frame mirrorless cameras

Sony E-mount

Di III: ミラーレス一眼カメラ専用レンズ

www.tamron.com/jp/

製品の詳細情報はこちらから▶





森の中の子ども ————— 島田 聡

こんもりとした小さな森の脇に行む、宮城県仙台市郊外のとある保育園。小さいとはいえ、小学校の校庭くらいの広さは十分にある、その森は、もう深山幽谷の趣。子どもたちにとっては、巨大な壁のような斜面を登り、得意げに大木の根元に陣取り、竹とんぼに見立てた小枝で遊んでみる。

FUJIFILM X-H2s XF56mm F1.2 R WR



撮影・野田知明



タンチョウのいる里 ————— 佐藤 均

タンチョウは、その優美な姿から日本の野鳥の象徴とされ、古来、不老不死や夫婦愛を宿す神聖的な存在として仰がれてきました。白と黒の清らかな羽色と気品ある佇まいは人々の心を癒し日本人の精神性や世界観と深く響き合っています。2月の北海道・鶴居村、氷点下20度にもなる朝焼けの中、オレンジの光に包まれて静かに目覚めるタンチョウの姿は、厳寒を生き抜く生命力の強さと、尽きることのない美を、私にそっと捧げてくれました。
FUJIFILM GFX100S GF32-64mm F4 R LM WR





お食事中 ————— 渡辺浩徳

北海道に生息するエゾモモンガは人気のある野生動物です。夜行性のエゾモモンガが日没前の夕方に巣穴から出てきた。食料の少ないこの時期に大好物のハンノキの花穂を食べている。マイナス 20℃以下になるこの時期に体温を維持する為に重要な食料源だ。食料を掴み目線の位置まで降りてきた。円らな瞳でこちらを見つめながら食事に夢中になっているその姿は、まるで自分が可愛いということを自覚しているかのように感じた。
FUJIFILM GFX100 II GF500mm F5.6 R LM OIS WR



The One and Only

GFX 100RF

「GFXシリーズ」初のレンズ一体型モデルが登場！

1億200万画素。異次元の高画質の撮影体験を、さらに多くの方へ。

- 1億200万画素ラージフォーマットセンサー「GFX 102MP CMOS II」と高速画像処理エンジン「X-Processor 5」を搭載。
- アルミ切削加工が可能とする洗練されたプロダクトデザイン。
- 「GFXシリーズ」最軽量となる質量約735gを実現。（バッテリー、メモリーカードを含む）
- 9種類のアスペクト比を瞬時に切り換えられる、「アスペクト比切換ダイヤル」を搭載。
- 1億200万画素を活かす機能性とデザイン性を備えた、「デジタルテレコン切換レバー」を搭載。





Photo Ikehata Naoki